
TORU 史上最強の悪ガキ

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TORU 史上最強の悪ガキ

【著者名】

神村律子

【あらすじ】

アタシの名前はエンジエル。おとめ座スピカ星系から来た侵略者。敵対するうしかし座アーケツールス星系との地球侵略の戦いの中で、地表に落下。矢田通という少年に瀕死の重傷を負わせてしまう。何とかアタシの血を輸血して助かった通君は、実はとんでもないケンカ大好き人間だった。そんな通君を巡り、やがてアタシ達とアーケツールス人の戦いが始まる。

アスタークトの逆襲をくつつけました。

第一章 アタシとあいつの出会い

天使。普通アタシ達のことを地球人はそう呼ぶ。

聖書とか言う、超ロングベストセラーに出て来る神の使いと間違えられたのだ。

あつ、アタシの名前はエンジエル。

年は地球人に換算すると、17歳ってところ。

父と母は、お調子者で、地球人が神の使いと思っている「天使」という名を、アタシにつけてしまったのだ。

全く、紛らわしい。

そんなアタシ達は、地球人の言つおとめ座スピカ星系から来た、所謂異星人なのだ。

アタシ達と対立する、うしかし座のアークツールス星系から来た異星人の地球侵略を阻止するためにね。

その戦いは、すでに数千年にも及び、時々地球人にもそれを目撃され、様々な形で神話や伝説の中に登場するみたい。

アークツールス星系の異星人達は、聖書に出て来る「悪魔」に良く似ている。

て言うか、彼らが悪魔のモデルなんだけどね。

そんな風貌が災いしてか、地球人は彼らを悪と看做し、アタシ達を正義と考えている。

でも実際はそうじゃない。

只の勢力争いであつて、アタシ達も彼らも、地球にとつては侵略者なのだ。

地球では、そんなわけで、異星人の混戦状態が存在していた。

でもその戦闘の多くは高次元で行われているので、地球そのもの

にはほとんど影響はない。

アタシ達も、アーチツールス人（仮にこう呼ぶことにする）も地球を無傷で手に入れたいから、地球にダメージのある攻撃はないのが暗黙の了解なのだ。

そんな高度な戦いの中で、ごく稀に高次元から三次元にデイメンショーンダウン（次元降下）してしまう時がある。

それが今のアタシ！

「うわーっ！」

アタシは美少女戦士（自分で言うと嘘臭いけど、天使ってみんな美人でしょ？）なのだ。

アーチツールス人の戦士と戦っていて、そのパワーに押され、デイメンショーンダウンしてしまったのだ。

「きやーっ！」

アタシは翼があるのも忘れて、突然放り出された地球上空1000Mから、真っ逆さまに地表へ落下して行つた。

やばい！

下にはたくさんの地球人がいる！

やつと正気を取り戻したアタシは、羽ばたいて落下を止めようとした。

しかし、時すでに遅く、ブレーキングも虚しく、アタシはそのまま地上に激突した。

幸か不幸か、アタシが落下したのは、誰もいない広場の端だった。

「いつたアツ」

アタシ達は結構頑丈にできていて、このくらいならコブができる終わりだ。

ま、地球人を巻き込まなくて良かつた。

と、ホツとしたのも束の間、アタシは仰天した。

アタシのお尻の下で、虫の息になつている小さい男の子に気づいたのだ。

「きやつ！」

アタシはすぐに男の子から飛び退き、容態を見た。

直接激突したのではないようだが、落下した時に私が発した衝撃波を食らってしまったたらしい。

その上、アタシが地面に激突して弾んだ拍子に思い切りヒップアタック（恥ずかしい！）をしてしまっている。

出血も酷いし、脈拍も弱い。

「いけない。このままじゃ死んじゃう」

アタシは翼を引っ込めて、助けを呼びに走り出した。

アタシが落下したのは、学校らしかった。

「おい、何だ、あの子？」

アタシの格好は、もう「天使」そのもの。

学校中の生徒が窓からアタシが走つて来るのを見ていた。

「何だ、あの格好？ 天使みたいだな」

「つるさいわね！ 授業中よ！」

ショートカットの、可愛いけどきつそうな目の女の子が注意した。

「すげエ可愛いけど、ちょっと危なそうな感じだな」

「病院から逃げて来たのかな？」

「新しい宗教の勧誘じやないの？」

もう皆さん、言いたい放題。冗談じゃないわ！

アタシはもうすっかり危ない少女にされてしまい、あの男の子と共に救急車に乗せられてしまった。

「ちょっと、話聞いてよ！」

アタシは音声システムを地球人モードに切り替え、救急隊員に訴えた。

「はいはい。大人しくしてね。でないと、薬で眠つても「みづ」よ」
隊員の誰一人として、アタシをまともな人間に見てくれない。
服装が怪しいのはわかるが、話くらい聞いて欲しい。

「もう…」

アタシは話すのをやめ、静かにした。

途端にけたたましいサイレンの音が耳に飛び込んで来た。

一方、学校の方では、あの男の子のクラスメート達が集まって話をしていた。

その中の男の子の1人が、

「あの天使もどきの子に通がぶつ飛ばされたらしいぜ」
通というのが、私のお尻の下で倒れていた子の名前だ。
しかし酷い誤解…でもないか。

あの子に怪我させたのは、アタシだもんなア。
「何で？」

ヒシアードカットの女の子が尋ねた。

さつさき「授業中よ！」と言つた子だ。

「きつと嫌らしい事でもしようとしたんじゃないのオ」

男の子達が口を揃えて言つと、

「まつさか。通はそんな奴ぢゃないよ」

ヒシアードカットの子は反論した。

すると男の子の1人が、

「何だよ、大田、やけに通の肩持つぢゃねえか
「うつるさい！」

大田と呼ばれた女の子は、キッとして男共を睨みつけた。

彼女は大田美津子ちゃんだ。

どうやら通君とは関わりが深いらしい。
かなり気が強いのが、顔に出てる。

口ではそんなことを言いながら、本当に通君のことが心配なのか、
「でも何であいつ外にいたんだろう？」

「いつものように早弁すませて、早いお昼寝をしてたんじゃないの
？」

と口を挟んだ男の子は、ちよつとアタシ好みのイケメン。

この子は竹森信一君。美津子ちゃんは、信一君を見て、「天罰が下つたのね。全くどうしようもない奴」と冷たいお言葉。

すると、信一君の隣にいた「私可愛いでしょ光線」出しまくりの三つ編みの女の子が、「でも何だか心配だわ。あのブロンドの女の子、危ない目をしていたから」と言った。

この子は残念な事に信一君の彼女、富田香ちゃん。信一君は香ちゃんを見て、

「美人に悪い人はいないよ

「そうかしら」

「だから君もいい人さ、カオリン」

「まア、嬉しいわ、信君」

この二人、いつもこんな調子で周囲の人間の背筋をゾッときせているらしい。

でも美津子ちゃんは心配そうだった。

アタシのせいだよなア。

アタシ達はまもなく近くの救急病院に到着し、通君はストレッチャーに載せられて手術室に運ばれた。

「ご家族の方はこちらでお待ち下さい

「えつ？」

アタシは危ない女から、いつの間にか通君の家族に「昇格」してしまっていた。

もう、どうにでもなれってエの。

（何でよ？ 何でアタシがこんなところで、全然見ず知らずの男の子の手術が終わるのを待つていいきやならないのよ！？）

アタシはムツとしてソファに座つた。すると看護師の一人が走つて來た。

「貴女、血液型何型ですか？」

唐突にそう切り出された。アタシはポカンとして、「はっ？」

と素っ頓狂な声で応じた。

看護師はアタシがふざけていると思ったのか、「真面目に答えて下さい！ 時間がないんです！ 何型ですか？」

と怒鳴るように尋ねた。

アタシは苦笑いして、

「知らないんですけど」

「知らないイ？ とにかく、検査させて下さい。患者の血液型がRHマイナスA B型で、血液のストックが足りないんです」

「はア」

アタシ達には血液型は一種類しかない。

地球人の言う、RHマイナスA B型。

ただ、その時のアタシは、地球人の血液型のことを知らなかつたので、答えられなかつたのである。

あっ！

でもまずい！

アタシの血液なんか輸血したら、通君どうなるかわからぬ。

前にも言つたように、アタシ達はとても頑丈なのだ。

そんなアタシの血を通君に輸血したら、副作用で死んでしまうかも知れないので。

どうしよう？

でもアタシがそんなことを考え込んでいた時に、病院の人達はテキパキと仕事をこなし、アタシはボンヤリしている間に血を抜かれていた。

それも 400ccも！

普通こんな美少女からそんなに血を抜くか？

「良かった。家族の方に、同じ血液型の人�이て」と医師は嬉しそうに言つていた。

アタシは頭痛がして來た。

どうやら通君の手術は順調らしい。

アタシも一安心。

何しろ「天使」が人を殺してしまつたら、シャレにならないからね。

でも副作用が心配だな。

「？」

そこへアタシより背の高い女の子が走つて來た。

どうやら通君の妹さんらしい。

後で知つたことだけど、通君と妹さんは一人きりで暮らしているのだそうだ。

ご両親は交通事故で3年前に亡くなつてゐる。

ただ、遺産がそれなりにあるので、通常の生活には困らないようだ。

「あのオ、どちら様ですか？」

妹さんは、あからさまに怪しい服装のアタシを見て尋ねた。

アタシは作り笑いをして、

「あ、あの、アタシ、エンジェルって言います。貴女は？」

「私は矢田通の妹の久美子です。兄とはどういづいづい関係なんですか？」

？」

久美子ちゃんは訝しそうな目でアタシを見た。

アタシは苦笑いをして、

「えつと、アタシ、たまたま貴女のお兄さんが倒れている所を通りかかつて、救急車を呼んでもらつてですね……」

「まあ、そうだつたんですね。ありがとうございました」

久美子ちゃんは通君とは似ていず、美人だ。長い髪をポニー テールにしている。

制服からして、「中学生」のようだ。

でもアタシも我ながら凄い嘘つき。

通りかかったって…。
はア。

「エンジェルさんて変わった服を着てらっしゃいますけど、何をされている方なんですか？」
やっぱり。

言われると思った。

アタシは咄嗟に、

「ハハハ。アタシ、女優の卵なの。芝居の稽古の休憩中だったのよ。もう戻らないといけないから、失礼します」
アタシは呆然としている久美子ちゃんを残し、病院を後にした。

第一章 選ばれし者 矢田通？

アタシ達が通常いるのは、第五次元の絶対空域と呼ばれているところで、まあ言つてみれば地球人が思い描いている天国のようなどころだ。

アタシはこのたびの不始末を報告するため、恐る恐る我が軍の司令官であるミカエル将軍のところに行つた。

ミカエル将軍のいるところは、お城と言うとわかり易いと思つ。その一番高いところにある部屋に将軍はいた。

「地球人にお前の血を輸血したのか…」

将軍は顔こそお優しい感じだが、ひとたび戦場に出れば、まさしく鬼神の如き強さで戦う。

アタシも将軍の強さは十分承知していたので、どんなに恐ろしい目に遭うのかと内心ビクビクしていた。

「可能性は一つある」

「はい…」

ミカエル将軍は椅子から立ち上がった。

アタシはギクッとした。

しかし将軍はアタシを穏やかな目で見下ろし、

「その地球人は地球上に並ぶ者のいない強さを得るか、副作用が起つて死んでしまうか、だ」

「は、はい」

アタシは副作用が起こる確率が高いを考えていたが、将軍にそう言つて余計に怖くなつた。

将軍はアタシに近づき、

「エンジェル、その地球人を監視するのだ。死んでしまつたらそれまでだが、もし死なずにすんだとなると…」
と言つて添えた。

アタシは将軍の言わんとすることを察して、

「連中がそのことに気づき、地球人を使って戦局を有利に展開することが考えられますね」

アタシの返答に満足されたのか、ミカエル将軍は一ヶコリして、「そのとおりだ。私はそれを危惧している。もしそうなつたら、地球人全体を我々の戦いに巻き込みかねん。それだけは避けんとな」

「はい」

アタシはいつになく真剣な表情で将軍を見た。

その頃当の本人である通君は、もうすっかり元気になつており、個室のベッドに移されていた。

もう点滴すらしていない。

ああ、アタシ達の血つて、まさしく奇跡の血なのね…。

「驚いたわ、お兄ちゃん。最初は重体だつて聞いて、もうどうしようかと思つたのよ」

ベッドの脇の椅子に座つてゐる久美子ちゃんが嬉しそうに言つた。ところが通君はムスッとして、

「俺だつて驚いてるよ。何しろ、いきなり空の上から天使みたいな変な女が落ちて来てさ。俺もう死んだなつて思つてたら、今はもう死ぬどころか、どこも痛くねエんだもんな。昔ケンカして出来た傷も、全然痕が残つてねエしよ。どういうことなんだろうな?」

「フーン、そうなの」

久美子ちゃんもよもやその「天使みたいな変な女」が、「自称女優の卵」と同一人物とは思つまい。

あーあ。

通君は久美子ちゃんが心配していたことなどまるで眼中にないかのようにニヤリして、

「ま、それはともかく、こうしてりや何日か学校サボつてここで呑氣にしてられつから、いいかな」とどんでもないことを言い出した。

久美子ちゃんが呆れて何かを言おうとした時、

「何考てるのよ、あんたは！？」

と美津子ちゃん、香ちゃん、そして信一君が病室に入つて來た。

通君はビクツとして、

「お、お前ら…。何しに來たんだよ？」

「何しに來たは無いでしょ？ 折角お見舞いに來てあげたのに！」

美津子ちゃんは病室だということも忘れて大声で言い返した。

通君もムカツとして、

「誰が來てくれつて頼んだよ！？」

「何ですって！？」

この一人は寄ると触るとこの始末のようだ。

ま、ケンカするほど仲がいいって言つからね、地球では。

「まあまあ、美津子さん。おかげ様で兄は何ともないようです。今日にでも退院できるらしいので」

と久美子ちゃんが割つて入つた。

さつすが、タイミング抜群の仲裁である。

美津子ちゃんは通君に疑惑の眼差しを向けて、

「ハハーン。実はかすり傷程度だったのに、わざと重傷のフリしてたのね？」

「そんなことしてねエよ！」

「じゃあどうしてそんなに元気なのよ…？」

「俺にだつてわからねエよ！」

美津子ちゃんは呆れ果てたのか、クルツと背を向けると、

「こんな奴のお見舞いに来ようなんて思つた私がバカだつたわ。帰るわね」

と病室を出て行つてしまつた。

香ちゃんが、

「もう、美津子も矢田君も、素直じゃないんだから

「俺は素直だよ。あいつがひねくれてるんだ」

通君はムカツとして言つた。

香ちゃんは困つた顔で、

「じゃ、私達も帰るわね
「通、また来るよ」
と信一君。

通君は肩を竦めて、

「多分明日はもう家にいるよ

「だといいな」

信一君はニヤリとして香ちゃんと病室を出て行つた。
それと入れ替わるように、アタシは病室にスッと入り込んだ。
今度は地球人の女の子らしい服装をしてね。

「あ、貴女はあの時の女優さん！」

と久美子ちゃんがアタシに気づいて叫んだ。

通君もアタシを見て、

「あ、おめえはあの時の天使女！」

「えつ？」

キヨトンとする久美子ちゃん。

アタシは慌てて通君がそれ以上まずいことを言えないように、「アハハ、お元氣イ？」

と通君に近づいて手を握つた。

すると通君は熱湯にでも入つたかのように顔を真っ赤にして、
「な、何するんだよ！？」

とアタシの手を振り解いた。

何だ、こいつ、見かけによらず、超純情？
ま、取り敢えず誤摩化せて良かつたわ。

「何しに来たんだよ？」

冷たい態度の通君に事情を知らない久美子ちゃんは、
「お兄ちゃん、命の恩人のエンジェルさんにそんな言い方しちゃ失
礼でしょ！」

「命の恩人？」

今度は通君がキヨトンとした。

アタシは苦笑いした。

確かにそつかも知れないが、瀕死にしたのもアタシだから、「命の恩人」と言われるのは何となく恥ずかしい。

「事情を説明に来たんだ」

「事情?」

通君と久美子ちゃんは顔を見合させて、次にアタシを同時に見た。アタシはベッドの足下に立つて、

「アタシがこれから話すこと、どれほど信じられない話でも、とにかく最後まで黙つて聞いてちょうだい。いいわね?」

通君と久美子ちゃんは何が何やらよくわかつていないうつだつたので、アタシはかまわず話し始めた。

何故アタシがこんなことをするのかから、アタシの正体、そして通君がどうして急激に回復したのかまで。

「どう?」

通君と久美子ちゃんは再び顔を見合せた。

「おめえ、頭大丈夫か?」

「な、何言つてるの! アタシはそういうのじゃないわよ。これ見なさい!」

百聞は一見に如かず、と考え、アタシは翼を広げた。通君と久美子ちゃんはまさしく息を呑んでいた。

「て、天使! 天使よ、この人!」

「……」

アタシは翼を引っ込めて、

「これでアタシの言ったこと、信じてくれる?」

「あ、ああ……」

通君はまだ呆然としたまま応えた。

第三章 不死身の証明

アタシ達と敵対しているアークツールス人は、五次元の別の絶対空域にいた。

そしてまずいことに通君の存在を察知していた。

アークツールス人の城は、どちらかと言うと黒を基調とした不気味な造りで、その一角に軍の長官であるサタンはいた。

よく宗教画に登場するサタンは、まさしく彼がモデル。良く描けてる、という出来だ。

「地球人に連中の血を輸血したら、戦闘計数が飛躍的に増大した、か」

サタンは真っ黒な椅子に座り、部下のアスタークツールスからの報告を受けていた。

彼は細身の美青年で、サタンの妻リリスの弟だ。公私共にサタンをサポートする立場である。

「はい。これはもしかすると、我々にも同じことが起こせるかも知れません」

「地球人を使って強力な戦士を生み出し、一気にスピカ人（仮にこう呼称する）を駆逐できるということか」

サタンはそう言いながら腕組みした。

彼はそのような作戦で地球人を戦争に巻き込むことを望んではいない。

しかしアスタークツールスは違っていた。

「そうです。先に手を打てば、奴らが同じことを始める前に戦況は一変し、我が軍の勝利は確実なものとなるはずです」

サタンはアスタークツールスを見たままで何も言わない。

アスタークツールスもサタンがこの作戦を良く思っていないことを見抜いている。

「失礼致します」

アスタークトはサタンが何も言わないのを「了承」と解釈する」と
にし、その場を立ち去ってしまった。

「何をするつもりだ、アスタークト…」

サタンはそう咳き、目を伏せた。

「地球を守るための大ゲンカ?」

通君はアタシの説明をそう理解したらしい。

アタシは苦笑いして頷き、

「そう。アタシ達と争つて、アーフツールス人て奴らが、貴方と
同じ人間を作り出すために動くはず。そうなると、地球人は一人残
らずこの戦いに巻き込まれることになるわ」

「フーン」

通君は腕組みした。

「何か今一つピンと来ねえな。本当に俺、そんなに強くなつたのか

?」

「試してみる?」

アタシはベッドの脇のワゴンの上にあつた果物ナイフを持ち、通
君の胸に突き立てた。

「キヤーッ!」

と久美子ちゃんが叫んだ。

「あれ?」

通君は刃がねじ曲がつてしまつたナイフを見て啞然としていた。

アタシはナイフを彼に手渡し、

「これでわかつた? 貴方の身体は、この地球上の何よりも硬くな
つたのよ。不死身になつたの」

「不死身?」

通君はしばらくなきヨトンとしていたが、やがて大笑いを始めた。

「よおし、こうしちゃいられねエ!」

彼はベッドから飛び出した。

アタシは意表を突かれて、

「ちょっと、何する気？」

すると通君は非常に嬉しそうな顔で、

「決まつてんだろ。ケンカしに行くんだよ。俺のこと狙つている奴らが、この辺りにウジヤウジヤいるんだ。全部まとめてぶつ飛ばしてやるぜ」

と言い放った。

アタシは仰天した。

「その力をそんなことに使つたりしたらダメだよ！」

「つるせよよ」

通君は風のような速さで病室を飛び出して行った。

「お兄ちゃん！」

「通！」

久美子ちゃんとアタシは通君を追いかけようと病室を出た。
しかし彼はすでに廊下にもいなかつた。

「くつ…」

不意を突かれなければ、アタシにも追いつけたと思いたいが、通君から感じられたパワーは、アタシのそれを圧倒するものだつた。
不意を突かれていなくても、追いつけなかつただろう。
悔しいけどね。

「エンジェルさん、どうしよう？」

久美子ちゃんは半泣き状態だ。

アタシも泣きたかつたが、

「通のパワー・タイプはわかっているから、それを追つてみるわ」とポケットの中から小型のレーダーを取り出し、すぐに通君のパワーを追跡した。

「こつちよ！」

アタシはそう言いながら走り出した。

「あ、待つて下さい、エンジェルさん」

久美子ちゃんも走り出した。

あのバカ、ホントに何も考えていないんだから！

アタシは無性に腹が立つた。

「とにかく、この格好じゃまずいな」

通君は手術着のままだつたのを思い出し、周囲を見渡した。
ちょうど運良く（　と言つていいのかどうか　）、近くを不良共
5人が歩いていた。

「ラッキー！　あいつらから頂こい！」

通君はバンと駆け出し、5人の前に出た。

5人はいきなり目の前にケンカバカが現れたので仰天した。

「や、矢田通！？」

通君はその街では超有名なケンカ屋で、同年代の不良はもちろん
のこと、チンピラやヤクザまでが名前を聞いただけでビビってしま
うほどの男である。

そんなのが不死身の身体を手に入れたのだから、地球が危ないか
も知れないくらいだ。

「おーや、俺の事知つてんのオ？　じゃ、話は早いや。ちょっとシ
ラ貸してもらおうか」

「は、はい」

5人共通君より身体は大きいし、強そうに見えるんだけど、酷く
怯えていた。

通君、普段どんな奴なんだろ？

それほどの強さがなければ、アタシのヒップアタック（　恥ずか
しいからこの話題にはもう触れない！　）で死んでいたろうし、仮
に助かつたとしても、輸血した時に副作用で死んでいたはず。

「冴えねエ服来てる奴らだなア。さつきの方がマシかも知れねエ」
と通君は不良共から奪つた制服を着ながら言つた。

彼は高校生にしてはチビッ子なので、袖を捲り、裾を上げてよう
やくちゅうどいい長さだ。

「まあ、仕方ねエか」

通君は氣を取り直して走り出した。

アタシと久美子ちゃんは、病院のそばで美津子ちゃん達に会った。

アタシと久美子ちゃんで手短に事情を説明したが、美津子ちゃんは全く信用せず、信一君は香ちゃんと「アメリカンジョークが滑った時みたいに肩をすくめた。

「もう、信じなくてもいいから、アタシ達と一緒に来て！」

「お願いします、美津子さん！」

美津子ちゃんもアタシの言葉は全然信じていないようだが、久美子ちゃんの真剣な眼差しには何か感じるものがあったようだ。

「久美子ちゃんがそこまで言うのなら、行ってみるわ

「ありがとうございます、美津子さん」

というわけで、アタシ達5人は通君が向かっている方角へと走り出した。

その通君は、すでに決闘の場所である河川敷に到着していた。
近くには大きな鉄橋がある。

「へへへ、逃げねエで来たか、矢田ア！」

と金属バットを担いだ、髪の毛をハリネズミのように尖らせた男が言つた。

通君はニヤッとして、

「そつちこそ、俺の忠告を聞いて、100人以上頭数揃えたるうな？ 2ケタ程度じゃ、ウォーミングアップにもならねエぞ」

金属バットの男もニヤリとして、バットを高々と真上に上げた。するとそこいらじゅうから、うじやうじらと虫がわくように、目つきの悪い、髪の毛モヒカンにした奴、金髪にした奴、真っ白に脱色した奴、鼻の両脇にピアスを葡萄のフサみみたいにつけている奴、メリケンサックした奴、アーミーナイフ持つた奴、ハンマー担いだ奴など、もう通君絶対に殺されるっていうような連中が現れた。

しかし、それほどの危ない連中の大群を目にして、通君は全く

動じていなかつた。

「ほオ、いるいる。楽しみだなア」

通君は大好物のケーキを田の前にした小さい女の子のよつに嬉しそうに笑つた。

「やれつ！」

金属バットの男が通君を指し示した。

「うおーつ！」

「だーつ！」

「おりやーー！」

「死ねーつ！」

「どりやーつ！」

「死ねーつ！」

とにかくありとあらゆる奇声を発して、不良共が蜜に群がる蟻のように通君曰がけて突進した。

「へへエ、今日の俺はちょっと違つぜ」

と通君が前に出ようとした時、河原の石の下からビーンとロープが現れた。

「うわつー！」

通君は見事にそれに足を引っ掛けてしまい、前のめりに転んだ。

金属バットの男が高笑いをして、

「バカめ。てめえのよつな奴とともにやり合つ程、俺はお人好しじゃねエゼ」

「！」のヤロウ、きたねエぞ！』

通君は背後に潜んでいた大男3人に上から押えつけられた。

「汚くてもいいんだよ。ケンカつてのはな、勝ちやいいんだ、勝ちやアよ」

金属バットの男は、病的な顔をしてゲラゲラと笑つた。そして、

「ぶつちめろー！」

と叫んだ。

「うおーつ！」

通君に群がつた蟻共は、児器攻撃で通君を滅多打ちにしていた。

「へへへへ、これでここいら辺のナンバーワンはこの俺様だ」
金属バットの男は、通君の方に歩き出した。

「もうそのくらいにしておけ。本当に殺してしまつたらまずい」「誰を殺すつて？」

金属バットの男は、ギクッとした。
彼の顔中に嫌な汗が噴き出した。

「バ、バカな…。まだ口が利けるのか…」

「口が利けるだけじゃねエゼ！」

と通君の声がしたかと思うと、群がっていた連中が、まるで竜巻に巻き込まれたように空中に跳ね飛ばされ、川に落下した。

「な、何イ！？」

通君は服こそボロボロだったが、顔も身体も全くの無傷で立っていた。

バット男は、顎も外れんばかりに驚いた。

「ど、どういうことだ？ 何でなんともねエんだ？」

何が起きたのか全く理解できないバット男は怯えまくっていた。

通君はフツと笑い、

「昨日までの俺なら、今ので参つてたかもな。でもおめえら、つづく運がねエな。今日の俺は、アメリカ軍と戦つたって負けやしないぜ」

「……」

通君はボロボロになつた制服を脱ぎ捨てた。

「この服は、通りすがりの善良な奴から頂いたものだ。だからこの服に關しちゃ、怒つてねエ」

「ハ、ハイ…」

バット男は、歯をガチガチ言わせ、直立不動のままである。
「でもよオ、やっぱケンカは勝たなきや意味ねエよな！」「うわーつ！」

バット男は通君の右ストレートで、30メートルほど飛んで、ボシャンと川に落ちた。

「はい、おしまいと」

通君がニッコリ笑つて言つた時、アタシ達は現場に到着した。

信一君がヒュウと口笛を吹いて、

「呆れた奴だな。少しは加勢しようと思つてたのに、全員片づけち
まつたのかよ」

アタシも久美子ちゃんも香ちゃんも呆然。
でも美津子ちゃんだけは反応が違つていた。

「こらアツ、通！ 手術したばかりなのに、何てことしてたのよ！」

「うるせエな。おめえには関係ねエだろ」

通君は美津子ちゃんに近づきながら言い返した。

「何よ、その口の利き方は！？」

と美津子ちゃんは河川敷に降りて行つた。
その時だつた。

「ああつ！」

アタシはその場に突然現れたアークツールス人に絶句した。
テレビポートしたつていうのか。

「何だ、てめえらは？」

通君はサッと美津子ちゃんを庇うよつにしてアークツールス人に
言つた。

アークツールス人は、「悪魔」と全く同じ姿をしているので、一
見して悪者つて思われてしまう。

ま、いい人もいるんだろうけどね。

「お前がスピカ人の血を受けて、超人化した地球人か？」
とアークツールス人の1人が言つた。

通君はそいつを見上げて、

「だつたらどうだつて言つんだ？」

「我々に協力しろ」

「協力だア？」

そうか、新たに超人を生み出すより、通君を手に入れる方が早い
つて考えたのか。

ヤバいぞ、こいつは。

「通、一体こいつら何なのよ？」

と美津子ちゃんが尋ねた。

「説明はこいつらを片づけてからゆっくりしてやるよ」

「我々を片づけるだと？ バカな事を…」

とアークツールス人の1人が言つた時、通君の右フックがそいつの左脇腹にめり込んでいた。

ほらほら、ケンカする時隙見せちゃダメだよ。

「ウケエッ！」

そのアークツールス人はのたうち回つた。

もう1人はハツとして、

「貴様アツ！」

と通君に掴みかかった。

しかし通君はそれをサッヒジャンプしてかわし、そいつの首に右の蹴りを叩き込んだ。

「ぐはっ！」

そいつはドドーンと河原に叩きつけられた。

もう1人がまた立ち上がり、

「貴様、我々に協力せんということか？」

「今頃気づいたのかよ、ボケが。俺は他人に指図されんのが大嫌いなんだ。わかつたらサッサと消えろ」

と通君は言い返した。

するとアークツールス人は「ヤリとし、

「わかつた。消えよう。但し、土産つきでな」

「何？」

「きやーっ！」

アタシ達が動くより一瞬早く、アークツールス人2人は、美津子ちゃんを捕え、上空に飛び上がった。

「しまつた！」

アタシは2人を追おうとしたが、それより先にアーフィールス人達はテレポートしてしまった。

「美津子オツ！」

通君が叫んだ。

そして彼はキツとしてアタシを睨み、

「やい、天使女！俺にはああいことはできねエのか？ 空飛ぶとかパツと消えるとか…」

「できないよ」

「そうか…」

アタシは通君に近づいて、

「とにかく彼女を助けに行かなくちや」

「ああ、そうだな…」

アタシはニヤリとして、

「やつぱりね。何だかんだ言って、彼女の事好きなんでしょ？」

「バ、バカ言うな。ただあいつを助けねエと化けて出そうでさ。一生眠れなくなりそうだしな」

と通君は少し照れ臭そうに言つた。

アタシはクスツと笑つた。

久美子ちゃんと信一君と香ちゃんは、呆然として今までアタシと通君を見ていた。

美津子ちゃんはアスタロトの前に引き出されていた。彼女は気を失つたままだ。

「何だ、この女は？」

とアスタロトは美津子ちゃんを連行して来たアークツールス人に尋ねた。

こいつはアスタロトの部下のようだ。道理で卑怯な事を考えるはずだ。

「あの地球人の女です。この女を使って奴をおびき寄せ、我が軍の洗脳マシンで操り人形にしましょ！」

「なるほど」

アスタロトの顔が狡猾さ丸出しになつた。

美青年なんていう表現からは程遠い顔だ。そして、

「しかし、来るかな？」

「来ますとも。地球人は情に流され易い種族です」と言つたアークツールス人の顔も、狡猾さ丸出しだ。アスタロトは元の美青年の顔に戻り、

「わかつた。うまくやれ」

「はつ！」

部下は一ヤリとして深々と頭を下げた。

アタシ達は鉄橋の下で作戦会議を開いていた。

「奴らが美津子を連れ去ったのはどこだ？」

通君が石を川に投げ込みながら尋ねた。アタシはそんな通君の苛立ちを心の底から申し訳なく思つていたが、今そんなことをクドクド謝つてみても仕方がないと考え、

「五次元の絶対空域。そこに行くにはちょっと手間がかかるよ」とじく冷静に答えた。すると通君はアタシを睨んで、

「手間だアッ？ もつとサッと行ける方法はねエのかよ！？」

「怒鳴り散らした。アタシはそれでも冷静に、

「無理だね。アタシらの仲間がいるところならすぐに行けるけど、奴らの空域は、探知するのに時間がかかるんだ。絶対空域つて言うのは、常に移動しているからね」

「フーン」

通君はさすがにいくら焦つても仕方ないと気づいたのか、怒鳴のをやめて河原の石の上にしゃがみ込んだ。信一君が、
「急がば回つて言うからな。エンジエルさんの仲間がいる所に一旦行つて、そこから美津子さんがいる所を探した方が早いんじゃないか？」

と助言した。信一君、ナイスフォロー。アタシは通君を見て、

「そうだよ。まずはアタシ達の軍の絶対空域に行つて、軍の探知レーダーで探すのが一番確実だ。取り敢えず、アタシらの軍の城に行こう」

と意見した。今度は久美子ちゃんが、

「でも、大丈夫なんですか？ 帰つて来られるんですか？」

と不安そうに口を挟んだ。香ちゃんも、

「そうね。心配よね」

と言つた。すると通君は、

「帰つて来られるかどうかなんて、美津子を助けてから考えりゃいいことだ。今はあいつを助ける方法だけ考えりゃいいんだよ」「それはそうなんだけど…」

久美子ちゃんと香ちゃんは異口同音に言つた。アタシは、
「大丈夫。アタシの軍の将軍、ミカエル様に話せば、助けて下さるよ

「ミカエル？ そいつ、つえエのか？」

と通君は突拍子もない事を聞いて来た。アタシは半ば呆れて、

「強いわよ。貴方の1万倍くらいね」

「じゃあまざそいつで肩ならししてから、アーケ何とかの城に行く

か？」

「バカな事言わないでよ、もう…」

アタシは本気で怒った。

「ミカエル様とサタンは、実力ではほぼ互角と言われているわ。でも2人が戦つたら、いくら高次元の戦いでも、地球に影響が出かねないから、直接対決は避けているくらいなのよ。どちらも貴方が勝てる相手じゃないわ」

しかし、通君にはアタシの忠告は全く通じていなかつた。

「じゃあ、美津子を見捨てるつて言うのかよ？」

通君も通君なりにいろいろ考えているのはわかるのだが、どうもチグハグでいけない。

「そうは言つてないわよ。だからどうすればいいのか、ミカエル様に相談するのよ…」

「なるほど」

全くこの男、本当に理解してくれたのか、心配だわ。

美津子ちゃんはサタンの城の地下牢に幽閉されていた。僅かな光が、天井の隙間からこぼれているだけで、ほとんど何も見えないところだ。

（「ここはどこなの？ 一体どうなつているのよ？」）

彼女は通君が妙な姿の者と戦つているのを思い出した。

「通…」

極限状態の美津子ちゃんは素直になつていた。

そりやそうだよな。

こんな所で突つ張つたつて、何も解決しない。

「助けて、通…」

彼女の奇麗な瞳から、涙が溢れた。

アタシは通君をミカエル様の所に連れて行く事になつたのだが、地球人を連れて五次元に飛んだ事がないので、少しだけ不安だつた。

「アタシも初めてなんだ。あまり自信がないんだけど」

「なくてもやるしかねエだろ。今更弱気な事を言うなよ、天使女」

と通君は全く動じていない顔で言った。アタシはカチンと来て、
「アタシは天使女なんて名前じゃない！ エンジェル！ 今度変な
呼び方したら、只じゃ置かないわよ」

「はいはい」

通君は肩を竦めた。あれ？ 何だか不安がなくなつた。

アタシは深呼吸して準備を始めた。

「えつ？」

通君はアタシに両手を握られ、また真っ赤になつた。

もしかしてこいつ、美津子ちゃんと手もつないだ事ないのかな？

「何照れてるのよ？ じつしないと、五次元に行けないのよ」

「わかつてるよ」

アタシは何となくおかしくなつてクスッと笑い、

「目を閉じて、意識を集中して」

通君は目を閉じた。

アタシは翼を広げて通君を包んだ。

「わつ！」

アタシの身体が輝き始めたので、信一君達はびっくりしてアタシ
達から離れた。

「お兄ちゃん！」

「矢田君」

久美子ちゃんと香ちゃんは心配そうに見守つていた。

やがてアタシと通君は、光と共に三次元空間から消えた。

「成功したらしいな」

と信一君がホッとした顔で言つと、久美子ちゃんが、

「でも問題はこれからですよ」

「そりやそうだけどさ。まあ、ここで暗くなつても仕方ないから、
家に行こつか、久美子ちゃん」

信一君のお気楽発言に久美子ちゃんは呆れたが、香ちゃんは同意

した。

「そうね。もう夜になるし。矢田君家で待つてましょ」と「二コ二コ顔だ。何なんだ、このバカツプルは…」

アタシと通君は、ミカエル様の城の前で気を失っているところを発見され、ミカエル様の部屋まで運ばれて意識を取り戻した。

「この男が超人化した地球人か」

とミカエル様は椅子に座つたままで尋ねた。アタシは跪いて、「はい。矢田通と言います」

「よつ！」

通君は右手を上げて応えた。

友達と話してるんじゃないんだぞ！

アタシは彼の頭を引っぱたいて、

「ミカエル様に失礼だぞ！ きちんと挨拶して！」

「いつてエな。何だよ、お前まで美津子みたいなことを言いやがつて！」

通君は何が悪いんだという顔をしてアタシを睨んだ。するとミカエル様は、

「まあ良い。とにかく、よく参った、通。サタンの城に行きたいそうだな？」

「ああ。手つ取り早い方法で頼むよ、ミカエルさん」

この男は本当に口の利き方を知らない男だ。

アタシはもう何も言う気力がなかつた。

「サタンの城は、ここから地球人流に言うと、約45億キロメートル先にある」

「45億キロメートル？ それ、どれくらい遠いんだ？」

通君はあろうことか胡座をかけて座つた。

もう何て奴だ。

アタシは血圧が高くなり過ぎて倒れそつた。

しかしミカエル様はにこやかなお顔で、

「太陽系の惑星の中に海王星という惑星がある。太陽からその星までの距離とほぼ同じだ」
「海王星？ 水金地火木土天海冥…。うわーっ、そんなに遠くなのか？」

本当に理解したんだろうか、この男は。

ちなみに今は水金地火木土天冥海だ。

しかも地球人は冥王星を惑星から準惑星に格下げしてしまつている。

「しかしあ前の今のパワーであれば、そこに行き着くのに1時間とかかるまい」

「ホント？ そりやすげエや。どうすりやいいんだ？」

通君は大はしゃぎだ。

しかしアタシは嫌な予感に襲われた。

（ま、まさか、あれをやらされるのでは…）

その予感は的中した。

ミカエル様はアタシを見てフツと笑い、

「エンジェルと2人、力を合わせれば、一瞬のうちに飛べるようになる」

「えーっ？ この女と一緒に行くのかア？ 何か嫌だな」

と通君は鬱陶しそうにアタシを見た。

アタシはムカツとして、

「それはこっちのセリフよ！」

と言い返した。

ミカエル様は、アタシらのケンカを遮るように、

「我々には特殊な能力があり、自分の力を他人に転移させる事が出来る。つまり、エンジェルの翼をお前に与える事ができるのだ」

「えっ？ 僕に翼？ ジャ、空飛べるの？」

「そうだ」

「ラッキー！ やつたア！」

「その代わり、お前は意識のみになり、身体は全てエンジェルにな

る」

「何イツ！？」

通君はアタシを見た。

この男、露骨に嫌な顔をして！

アツタマ来ちゃう。

「嫌なのはアタシの方よ！ 転移中に、アタシの身体に変な事しないでよ！」

「誰が！」

アタシと通君はすっかりいがみ合つてしまつていた。
ミカエル様もさすがに少し呆れ氣味だ。

「エンジエル！」

「あつ、はい、申し訳ありません、ミカエル様」

「へへーっ、怒られてやんの」

「つるさい！」

もう、止めどがない奴だ、このチビ助は。

第五章 敵陣突入

アタシと通君は、城の外に出て、転移の準備を始めた。ミカエル様他、たくさんの仲間達が見守っている。何か照れるな。

「今度は何するのか前もって言えよな。わっせはまよつとびっくつしたからさ」

と通君は小声でアタシに言つた。

やつぱりこいつ、超純情なチビちゃんなんだね。

何か可愛くなつて来たな。

「今度は何するのか聞かない方がいいと思つた」「えつ？」

キヨトンとする通君にアタシは、

「さつ、田を閉じて」

「あ、うん」

通君は素直に田を閉じた。

さア、アタシもサッサと終わりにして、恥ずかしい思いは少しでも短くてすむようにしなくちゃ。

それにしてミカエル様つたら、何も城中の仲間を連れて見に来られなくてもいいのに。

「うつ！」

アタシは通君の唇に唇を重ねた。

通君はビクンと動き、田を見開いたが、アタシが田で、

（閉じてなさいよ）

と合図して、もう一度瞑らせた。

アタシは通君の首に両腕をしつかりと巻きつけて抑えていたので、彼は動く事が出来ない。

もしかして、「ファーストキス」を奪つてしまつたのかな？

「ごめんね、美津子ちゃん。ハハハ。

やがてアタシの身体が輝き出し、ステッと通君に溶け込み、続いて通君の身体が輝き出し、アタシの身体に変わった。

ミカエル様が一ツコロして、

「成功したな」

と呟いた。

通君はハツとして自分の身体（だつたといひ）を見て、「ワーッ！ ホントにこんな…。ヒヒー…！」

と大騒ぎした。

ミカエル様は城の遙か前方を指差し、

「この方向にサタンの城はある。心して向かえ、通」

通君（姿はアタシだけ）は一ヤリとして、

「おう！ ありがとよ、ミカエルさん」

と答えると、もう信じられないような速さで、サタンの城に向かって飛び立つた。

「面白い男だ」

ミカエル様は楽しそうに笑った。

その頃、地球の久美子ちゃん達のところは、夜になつていた。

「何か通つてさ、いつも俺達の想像を超えたことするよなア」

久美子ちゃんの手料理を食べ終えて、信一君が言った。

香ちゃんはお皿を片づけながら、

「そうね。矢田君で、何をしても不思議じゃないのよね。あのエンジエルさんの存在だつて、矢田君絡みだと全然不自然じゃないんだもん」

「そうだよなア。あいつ、ホントに不自然じゃないように不自然な事をやってのけるよなア」

「うん」

香ちゃんはお皿を持ってキッチンで洗い物をしている久美子ちゃんに近づき、

「矢田君は、必ず帰つて来るわ。美津子を助け出して」

「香さん…」

久美子ちゃんは泣いていたようだ。

彼女は涙を拭つて香ちゃんを見た。

香ちゃんは久美子ちゃんの涙を指で拭い、
だから泣かないで。絶対に大丈夫だから」

「はい」

久美子ちゃんはようやく微笑んで応えた。

香ちゃんもそれに応じて微笑んだ。

「キャホーッ…」

そんな久美子ちゃん達の気持ちを知らないこのお調子者は、実に
楽しそうに五次元の空を飛行していた。

「こいつ、転移を解いたら一発殴らないと気がすまないよ、全く…」

「あつ、あれか？」

遙か前方にサタンの城が見えて来た。
ついに来たのだ。

通君は「ヤッとして、

「さアて、大暴れできるぞ。あそこで何しようが、先公もポリも美
津子も、誰も口出しできねエからな」
と言つた。

「こいつ、とことんケンカ好きな奴。

目的は美津子ちゃん救出だつてことを忘れてるのかね？」

「おつ？」

何て言つていると、早速お出迎えがやつて來た。

下つ端のアークツールズ人の兵士達だ。

ざつと数えて1000人はいる。

「おうおう、盛大なお出迎え感謝するぜ」

通君はさらに加速し、先発部隊に急接近した。

「おらおら、雑魚共！ 時間稼ぎにもならねエぞ…」

通君のパンチ一発で、数十人が吹き飛ばされた。

「こいつ、アタシの転移でまたパワーアップしたらしい。

「うわーっ！」

あれほどいた兵士達が、たちまち蹴散らされて、通君は城に向かつた。すると、

「待てーい！」

とさつきの連中より大きい奴が一人現れた。

先発部隊の隊長のようだ。

そいつはニヤリとして、

「さすがに強いな。しかし、このわしはそうはいかんぞ。わしはアスタート様麾下の…」

と口上を述べ始めたのだが、最後まで言えなかつた。

通君（ぐどいようだが身体はアタシ）の右キックが、股間に炸裂していたのだ。

もう、人の身体使って、どこ蹴つてんのよー。

そいつはもがき苦しみながら、

「ぐおお…。貴様、話を最後まで聞け…」

「バーカ、何か言つてる暇があつたら、パンチの一つも繰り出して来いつてんだよ」

と通君は、全く血も涙もない裏拳をそいつの顔面に叩き込み、止めを刺した。

隊長は遙か彼方に飛んで行き、見えなくなつてしまつた。

「よオしー！」

通君は城の門をパンチでぶち破り、中に入った。

「こらア、こんな雑魚ばつかじや身体があつたまんねエぞ！ もつと強い奴いねエのかよー！」

と怒鳴つた。

美津子ちゃんは通君の声が聞こえたような気がして天井を見上げた。

「通…？」

（まさか。まさかね。いくらあいつが無茶苦茶な奴でも、こんな
わけのわからない所まで来られるはずないよね）

美津子ちゃんは顔を俯かせた。

その時、

「美津子オッ！　待つてろオッ！　今助けてやるからなアッ！」
と声がした。

その話し方は通君だったが、声はアタシなので、美津子ちゃんは
戸惑つた。

「あれは…。でもあの声は確か、あのエンジエルって子の声…」
「そうだけど、通君なのよ。

わかつてよ、美津子ちゃん。

転移解きたいけど、貴女を救出して城を離れてからじやなこと、
危険だからできないんだ。

「転移をもう一回するには時間がかかるからね。

「私ったら、何を期待してるのかしら…」

美津子ちゃんは赤面した。

（私、何で通が助けに来てくれるなんて思つたんだりつへ。
もう、美津子ちゃん、素直になりなよ。
さつきみたいにさ。

第六章 狡猾！ アスター公爵

「二のヤロウ、無視しやがったな！ なにこっちから行くぞ！」

通君は次に城の鋼鉄製の大扉を蹴破り、中に入った。

あのね、アタシの身体、ボロボロにしないでよね。

「む？」

そこは大広間になっていた。

その大広間の反対側に、誰かが立っている。

「ようこそ。姿は卑しいスピカ人だが、中身は違う。転移を使っているのかな？ 君が超人化したと言う地球人だね」

立っていたのはアスター公爵だった。

こいつのせいで、どれだけ多くの仲間が次元の狭間に落とされたか。

しかも「卑しいスピカ人」とは、何て言い草だ！

アタシが直接ぶちのめしたくなつて来た。

「誰だ、てめえは？」

通君はさつきまでとは別人のような口調で言った。

アスター公爵はニヤリとして、

「私が？ 私がこの宇宙で一番美しくて強い、アスター公爵だと耳障りな甲高い声で言った。

その声が大広間の壁で反響して、余計喧しい。

すると通君は腹を抱えて笑い、

「何だ、ニユーハーフの貴族か？」

「ニユーハーフ？」

アスター公爵は言語システムをフル稼働させてその意味を探つているようだ。

そしてそれが明らかにバカにされている言葉だと悟つたのか、美青年の仮面を脱ぎ捨てて険しい形相になつた。

「貴様、私を愚弄しているのか？」

アスターの声がより甲高くなつた。

通君はますます大笑いして、

「おめえなんか敵じやねエよ。早くドレスに着替えてカマ踊りでもして来な」

「貴様、私が一番嫌いな言葉を吐いたね！ もう貴様は許さない！ ハツ裂きにしてさらにその上ハツ裂きにしてやるー。」

アスターはヒステリックに叫んだ。

余計それっぽくなつていい。

通君はギラツと目を輝かせ（ せらひてぐどこよううだけど身体はアタシ ）、

「うるせエよ、キンキン叫ぶな、カマヤロウー。」

「それ以上私を侮辱する事は許さないー。」

アスターの姿が不意に消えた。

ヤバい！

奴をマジで怒らせちゃつたみたい。

「消えた？ でもテレポートじゃないみたいだな」と通君は呟いた。

そうだ。

アスターは素早く動いて消えたようにみせているだけだ。

「貴様、この美しく強い私を侮辱したらどうなるか、思い知らせてやるよー！」

「何？」

通君が声に反応した時、アスターは突然通君の背後に現れ、背中に強烈なキックを浴びせた。

「うわっ！」

通君は床を滑り、壁に激突した。

アタシの身体、傷ものにしたら、責任とつてもうつからね、もうー！

「まだ終わらないよ」

立ち上がった通君の後頭部をアスターの肘打ちが襲つた。

「ぐはっー！」

通君は顔面から床にめり込んでしまった。

ああ、アタシの美しい顔がアツ！ アスタークトはまた耳障りな声で笑い、

「ハハハ！ いくら超人化したと言つても所詮は地球人。私に敵うはずがない」

「そうかな？」

「何！？」

アスタークトが調子づいていると、通君はこきなり立ち上がり、また股間にキック。

もう、下品なんだから！

「グオーッ！」

アスタークトは全く無防備だったのに、酷くもがき苦しんでいる。通君はニヤリとして、

「へへ、おめえ、男だつたんだ？ 悪かつたな、思い切り蹴飛ばしちまつてさ」

「貴様アツ！」

アスタークトは涙目で通君を睨んだ。

通君は実に楽しそうに笑い、

「お苦しみのところ悪いんだけと、俺つてケンカに勝つのに手段は選ばねエ主義でさ」

うん？ 河川敷で不良共と戦つた時、相手に「きたねエぞー」とか言つてたのは誰だつけ？

「どりやーつ！」

通君はまさに容赦なく、まだもがき苦しんでいるアスタークトのボディを連打した。

「グゲゲーッ！」

アスタークトの顔が青から白に変わり、もう少しでＫＯといつぱりここまで来ていた。

「フィニッシュユース！」

通君のアツパーがアスタークトの顎に炸裂、と思つたら、奴は消え

た。

しまつた、今度はテレポートだ。

「くそつ、逃げやがったか！」

通君は周囲を見渡した。

「どこ行きやがった、カマヤロウーー？」

通君はいきり立つて叫んだ。

アスタロトは、美津子ちゃんが幽閉されている地下牢にいた。彼は明かりを灯し、美津子ちゃんに近づいた。

「うつ……」

美津子ちゃんはいきなり光に照らされて、眩しそうにアスタロトの方を見た。

「誰？」

アスタロトはそれには応えず、「

「フフフ。お前を利用させてもらひつよ」と不気味に笑つて言つた。

「……」

美津子ちゃんは後ずさりして、壁に張りつき、アスタロトを睨んだ。

（ 通… ）

通君は目を閉じ、気配を感じようとしていた。

アスタロトが戻つて来たら、間髪入れずに連打を叩き込み、逃げる隙を与えないつもりのようだ。

しかしアスタロトはあの金属バットの兄ちゃんよりタチが悪かった。

通君の目の前に現れたアスタロトはし、不敵な笑みを口元に浮かべていた。

「そこか！」

通君が突進しようとすると、アスタロトは通君の右の方を指差し

た。

「何?」

通君はそちらに目を向けてた。

そこにはアークツールス人の兵士2人に腕を掴み上げられた美津子ちゃんの姿があつた。

「美津子!」

美津子ちゃんはその通君の心からの叫びに、ついにアタシが本当は通君なのだという事に気づいた。

「通? 通なのね?」

彼女の瞳から大粒の涙がこぼれた。

通君は再びアスター口を見て、

「てめえ、どういうつもりだ?」

アスター口はフツと笑い、

「あの娘を傷つけられなくなかったら、大人しくするんだ」「てめえ…」

アスター口は勝ち誇ったように笑って、

「ケンカに勝つには手段を選ばない。いい言葉だねエ、地球人君」「くつ…」

通君はお株を奪われてムツとした。

でもどうするのさ、美津子ちゃんを人質に獲られちゃつて。

（エンジエル、聞こえるか?）

と通君の声が、アタシに話しかけて来た。

アタシはビックリして、

（な、何? 話ができるの?）

（できるかどうかわからなかつたけど、できて助かつたぜ。俺から分離しろ）

（何でよ? 危険だよ）

（このままじゃ美津子も危ないし、俺にも勝ち目がねエ。お前、分離したら美津子を助けてこの城を脱出しき。あのカマヤロウは俺が何とかする。あの2人のアークツールス人くらい、何とかなるだ

ろ？）

（でもむ…）

（迷つてる暇はねエゾ…）

（わかった）

通君がじつと動かすにいるので、アスタロトは不審に思ったようだ。

「何を企んでいる？」

「別にイ」

通君はすまして応えた。

アスタロトはフツと笑つて、

「行くよ、地球人！」

と通君に突進した。

通君は大声で、

「今だ、エンジエル！」

（了解！）

通君の身体が輝き出したので、アスタロトは足を止めた。

「何だ？」

アタシは通君から分離すると、美津子ちゃんを目指した。

「くつ！ 貴様ら、謀つたな！」

アスタロトの顔がまた険しくなつた。

通君は一ヤリとして、

「さア、これで心置きなくケンカできるぜ」

と言った。

「美津子ちゃん！」

アタシはアークツールス人の兵士をバチバチと倒して、美津子ちゃんを救出した。

「エンジエルさん」

「とにかくここを離れるわよ」

「でも通が…」

「大丈夫！ 貴女を安全な場所まで運んだら、アタシが助けに戻る

から

「ええ…」

美津子ちゃんはそれでも不安そうだったが、アタシはかまわず彼女を抱きかかえると、翼を広げて飛び立つた。

「うぬつ！」

アスターも翼を広げようとしたが、

「てめえはここで俺のサンダバッグになつてりやいいんだよー！」

と通君のフックを腹に見舞われた。

「ぐはつ！」

「おりやーつ！」

アスターのボディを通君のラッショウ攻撃が襲う。
もはや勝敗は決してかに思われた。

第七章 通 絶体絶命！

アタシは美津子ちゃんを抱えて必死にミカエル様の城を目指した。幸い通君がサタン軍の兵士全てを遙か彼方まで吹っ飛ばしてくれていたので、敵の出現の恐れは皆無だったのが救いだ。

「ごめんね、美津子ちゃん。アタシらのせいで酷い目に遭つてさ」「いいのよ。こうして助けに来てくれたんだもの。でもまさかあいつが来てくれるとは思わなかつたわ」と美津子ちゃんは嬉しそうに言つた。

アタシはニヤリとして、

「何だかんだ言つて、ホントは相思相愛の仲なんだね、2人は」「バ、バカ言わないでよ！ そりや、あいつが私に気があるのは知つてるけど、私はあいつの事なんかただの幼馴染みとしか思つてないんだから」

「へエ、 そうなのオ」

アタシがあんまり面白がるので、美津子ちゃんはすっかり剥れて黙つてしまつた。

「このヤロウ、意外にタフだな！」

通君の連打はもう100発は続いていた。
しかしアスタロトはまだ耐えていた。

「いい加減に倒れちまえ！」

通君の右ストレーントがアスタロトの顔面に決まり、アスタロトは床を滑つて壁に激突した。

「終わつたか？」

と通君が呟くと、

「いや、始まるのだよ」

とアスタロトが立ち上がつた。

通君は呆れて、

「強がり言つてんじやねエよ。もうフラフラのクセによ
「本当にそう思つてゐるのか？　おめでたい奴だな」

「何イツ？」

アスタークトの身体が、徐々に巨大化し始めたのに通君は気づいた。

「何だ？」

アスタークトは、前の倍くらいの大きさになつた。

「ここの姿で戦うのは久しぶりだ。300年ぶりくらいかな。それほど貴様は強かつたんだよ、地球人」

「へエ、300年ぶりか。何だ、お前結構ジイさんだつたんだな」「ジ、ジイさんだと？」

アスタークトの顔がまた険しくなつた。

通君はせせら笑つて、

「そりや悪かつたなア。そんなジイさんだと思わなかつたから、手荒く扱つちまつてよ」

「貴様アツ！」

アスタークトの猛攻が始まつた。

通君のさつきまでの優勢はどこへやら、もう一方的に殴られて蹴られた。

「どうだ、地球人？　これが我々の力だ。これが私の実力だ！」

「つづつ…」

通君は傷こそ出来ていながら、かなりフラフラしていた。

（畜生、身体は頑丈になつていても、脳まではそうはいかねエのか。崩れちまいそうな程ガンガン響いて来るぜ、奴のパンチが）

「はアーッ！」

アスタークトの渾身の肘打ちが、通君の顔面に炸裂し、通君はそのまま跳ね飛ばされて壁に激突し、ずり落ちた。

「よく戦つたと讃めてやるよ。私をここまで本気にさせた奴は、末だかつて存在していない。貴様の事はずつと覚えておいてやる」

アスタークトの勝ち誇つた声が広間に響いた。

「通！」

その時ようやくアタシは広間に辿り着いた。

アスターントはアタシを見て、

「遅かつたな。もうすぐそいつは死ぬ。そうしたら次はお前だ」

「……！」

アタシの背中に冷たい汗が流れた。

アスターントの今の戦闘力では、アタシはもちろん、転移後の通君にも勝ち目がなさそうだ。

絶望が頭の中を駆け巡った。

もう終わりなのか。

そんなふうには思いたくなかったが、勝機はもちろん、転移後の通君100分の1%もないだろう。

（ 通に悪い事したな。美津子ちゃんを助けたのに、ここで終わるなんて。アタシは通にいくら詫びても詫び切れない ）

アタシは死を覚悟した。

こうなつたら通君へのお詫びも兼ねて、彼を最後まで守つて果てる事にした。そうするしか、通君に報いる方法はないと思った。
「さてと。もう終わりにしようか。すぐに楽にしてやるよ、チビ」とアスターントが通君に近づき始めた時だった。

「何だアツ！？」

と通君は立ち上がった。

彼は何故かもの凄く怒っていた。

髪が逆立つて眉が吊り上がり、目が鋭くなっている。

アスターントは通君の急な変貌にギョッとして立ち止まつた。

「ど、どういうことだ？」

アスターントの疑問はアタシの疑問でもあった。

通君の戦闘計数が、アタシが転移した時より上昇しているのだ。すでに彼のパワーは、アスターントのそれを吹き飛ばしそうな程増大していた。

「てめえエツ、今何て言った！？ 今俺の事、何て言ったアツ！？」

通君の迫力満点の声にアスターントはたじろいだ。

「な、何だ、こいつは？」

アスターは後退した。

何かとんでもないことが起こりうとしているのに気づいたのだ。

「何て言つたんだよオツ！？」

通君の壮絶の一語に及きる反撃が始まった。

とにかく息吐く暇もないパンチの嵐。

アスターはなす術もなくサンダバッグと化していた。

「何て言つたつて聞いてるんだよオツ！」

通君のアッパーがアスターの顎を碎いた。

アスターはその衝撃で城の天井をぶち抜き、虚空の彼方へ消えてしまつた。

「うおおーっ！」

それがアスターの断末魔だつた。

通君は不意に力が抜けたようになり、バッタリと倒れ伏した。

「通！」

アタシは慌てて駆け寄つた。

「通、しつかりして！」

アタシは彼を抱き起こした。

息はしている。

生きてた！

良かつた。

「うつ」

通君は意識を取り戻した。

アタシは嬉しさのあまり、彼を抱きしめてしまつた。

「良かった、生きててくれて」

「おい、いてエよ、天使女」

「その呼び方はやめてよ！ 本当に怒るよ！」

アタシは泣き笑いをしながら抗議した。

その時だ。

「えつ？」

アタシは背後に気配を感じ、振り向いた。

「キヤーッ！」

思わず叫んでしまった。

そこにはあのサタンが立っていたのだ。

（ダ、ダメだ。アスターにあれほど手こずったのに、サタンに勝てるわけがない。）

アタシは今度こそ本当に死を覚悟した。ところが、

「地球人よ」

とサタンは話しかけて来た。

アタシはビックリしてサタンを見上げた。

「私の愚かな部下アスターが、私の知らぬ間に仕出かした事を、詫びる」

「えつ？」

アタシと通君はキヨトンとして顔を見合せた。

その時アタシは通君に抱きついたのに気づき、慌てて離れた。

「今後我々は地球人を戦いに巻き込む事はせん。それは約束しよう」

「……」

サタンはフツと笑つて、

「しかしあ前は強いな。あのアスターを虚空の彼方まで飛ばしてしまうとはな。私も一度戦つてみたいが、それは叶うま」

と言つた。

通君はニヤリとして、

「あんたには勝てそうにないな」

「何故だ？」

「あんた、俺の挑発に乗らないタイプだ。そういう奴が、一番手強いんだ」

「なるほどな」

サタンはニヤリとした。

そして彼はアタシを見て、

「ミカエルに伝えよ。私は軍を立て直したら、決着をつけるため、戦いを挑むとな」

「ええ」

アタシはゆっくりと頷いた。

サタンはフツと笑うと、テレポートして消えた。

「すげエ奴だ。あいつに勝つには、俺の寿命じゃ足りないかもな」

「そりや そうだよ。ミカエル様のライバルだもの」

通君とアタシは立ち上がった。

「さてと。帰るか」

「うん」

アタシはニッコリして応えた。

アタシは何となく寂しくなつていた。

「どうしたんだよ？」

と通君が声をかけてくれた。

アタシはハツとして、

「ううん、別に。どうもしてないよ」

アタシは通君と美津子ちゃんを伴い、三次元世界の通君の家の前に戻つたところだつた。

夜も更けていたので、誰も外にいなかつた。

「何か今思い出してもみると、夢みたいな日だつたなア」

「ホントね」

通君と美津子ちゃんのソーショットがあまりにも絵になつてているのを見て、アタシは何とはなしに嫉妬してしまつた。

「やっぱり2人は相思相愛なんじゃないの」

アタシは嫌味を込めて言つた。

すると通君と美津子ちゃんはキッヒアタシを睨み、

「こんな奴、そんな関係じゃないてば！」

と見事にハモつて言つた。

アタシは大笑いして、

「そこまで気が合えば、大したものよ」

そんなアタシ達の声を聞きつけて、久美子ちゃん達が外に出て來た。

「お兄ちゃん！ 美津子さん！ エンジンさん！ 無事だつたのね」

「よオ、今帰つたぜ。晩飯、遅くなつたけど、大丈夫か？」

「うん！」

久美子ちゃんは涙を拭いながら応えた。

通君は恥ずかしそうに美津子ちゃんを見て、

「飯食つてけよ。いろいろあつて、腹減つたろ？」

と声をかけた。

美津子ちゃんは素直に頷いて、

「久美子ちゃんの料理、おいしいからね。頂くわ」

「エンジエルさんもどうぞ」

と久美子ちゃんが言つてくれた。

アタシはへラへラして、

「そ、そ、う。ありがとう」

と応えた。

実はもう倒れそなぐらいお腹がすいていたのだ。

久美子ちゃんと香ちゃんは協力して、たくさん料理を作ってくれた。

美津子ちゃんは参加していなかつたが、深く追求するのは彼女の名誉にも関わるので、何も尋ねなかつた。

みんなは楽しそうに食事していたが、アタシだけが気分が乗らず、沈んでいた。

通君達と別れるのが、何となく悲しかつたから。

「さてと」

アタシはこれ以上長居をしてますます寂しくなるのも嫌なので、立ち上がつた。

みんながアタシを見た。

「おいしかつたよ、久美子ちゃん」

「ありがとう、エンジエルさん」

アタシは通君を見て、

「いろいろ迷惑かけたね」

「そうかな？ 僕は楽しかつたぜ。ま、死にかけた時は焦つたけど

な

「ハハハ」

アタシ達は外に出た。

星がいっぱい輝いていて、綺麗な夜空だつた。

「じゃあね、みんな。もつ会つ事もないかも知れないけど、元氣でね」

「ああ。お前もな」

と通君は一ヶ口つして言った。

美津子ちゃんはグッと涙をこらえているが、香ちゃんと久美子ちゃんはすっかりヒクヒクしている。

「まあ、会つ事もないなんて言わずに、たまには遊びに来て下さいよ。いつでも大歓迎ですよ」

とお調子者の信一君が言つてくれた。

アタシは苦笑いをして信一君を見た。

「それじゃ」

アタシは翼を広げた。

「あれ？」

アタシは知らないうちに泣いていた。

頬を伝わる涙を感じて、やつとそれがわかつた。

（ダメだ、アタシ…。ダメだ…）

アタシは心のわだかまりを振り払つように首を横に振り、通君を見た。

美津子ちゃんはハツとしてアタシを見た。

「大好きだよ、通」

「えつ？」

アタシは通のほっぺにキスをして、バツと飛び立つた。そして、美津子ちゃん、今度会つ時までに通とくつついてないと、アタシが通をとつむやうだ！」

と言つた。

すると美津子ちゃんはフフンと笑つて、

「どうぞ」勝手に。こんな男、いつでも連れてつちやつてよ。せこせこするわ

「素直じゃないわね」

「大きなお世話」

美津子ちゃんは「う」口にしてアタシを見上げた。

通君はやつと我に返つて、

「う」このヤロウ！ 俺は物じゃねエんだぞ！ とゆとかといねとか、勝手に決めるな！

と叫んだ。アタシは通君を見て、「バーカ、通。またね」

と言つと、上空へ飛翔した。

そんなアタシを見上げて「る通君を見て、

「もう、デレーッとしちやつて。嫌らしいんだから」と美津子ちゃんが言つた。

通君はムツとして、

「何が嫌らしいだ！ お前なんかより、エンジールの方がずっといい女だぜ。あいつについて行きやよかつたよ」

「何よ、その言い草は！？」

「何だよ！？」

「やる気！？」

「まあまあ、二人共」

香ちゃんと久美子ちゃんが美津子ちゃんを、信一君が通君を止めた。

「の2人、じばりくは「んな具合に続いて行くんだりうな。ま、いつか。

とにかくアタシは、アークツールズ軍に勝つて、もう一度あの子達に会いに来よう。

今はそれだけを考える事にする。じゃあね。

その妹美少女につき（前書き）

アークツールス人との戦いの後日譚です。

その妹美少女について

東京。その一角にある杉野森学園。その高等部一年に、とんでもない喧嘩バカがいた。

その名は矢田通。やだ じおるチビッ子なのに、強烈に強い。同級生はおろか、その辺りのワル共は皆、その名を聞くだけでビビり、その声を聞くだけで逃げ出すほどだ。

そんな矢田通の噂を聞き、他の地域のワルが彼を倒しに来るが、誰一人として敵う者はなく、矢田通の不敗神話は磐石だった。遂には暴力団からスカウトが来るほどになつたが、通はそのスカウトを叩きのめして、暴力団の組長の家まで乗り込み、全員半殺しにし、組長に、

「もう一度とこのような事は致しません」と念書を書かせた。

何故彼がここまで強いのかは誰も知らない。

一説によると、一度死にかけてから更に強くなつたらしい。

そんな事で、一時は誰も矢田通に挑もうとする連中はいなくなつた。

しかし、そのままでむほどワルの世界は大人しくはない。

そんな大人しくしていられない連中の中に、特に矢田通に恨みを持つ男がいた。その名は、石動允。いするおきよしと杉野森学園とはライバル校関係にある大東苑学院の生徒だ。

「俺達は正直過ぎた」

允は仲間を集めて、体育館倉庫で作戦会議中だった。もちろんまだ授業中である。

「あの喧嘩バカに真正面から挑むなんて、無謀だった」

允の言葉に皆が頷く。

「あれほどの男にも、弱点があつたのさ」

「おお、とどよめぐ。允は得意満面で、

「奴の妹の久美子を搔つ攫う。んで、奴を大人しくさせてボ「る」と言つた。しかし、異論が出た。

「俺は久美子ちゃんにはそんな事したくない」

「そうだ。あの子は本当にいい子だ。あいつの妹だなんて信じられないくらいな」

允は啞然とした。

「お前ら、矢田の妹に惚れてるのか?」

「おう!」

そいつらは、允に向かつて右腕の袖を捲つた。二の腕に「久美子命」とマジックで書かれている。

「バカ共が……」

允は呆れた。

「消えろ」

允の目つきが変わつた。「久美子親衛隊」は、逃げるように倉庫から出て行つた。残りは五人だ。

「だけどさ

残つた中の一人が言つた。

「何だ?」

まだ不満があるのか、と允はそいつを睨んだ。

「久美子には、いつも大山がついてるぜ」

大山とは、矢田の舍弟を自称する、久美子の同級生だ。身長は一メートルを超え、体重は百キロを超える巨漢だ。喧嘩も滅法強いと言われている。

「確かに奴も強いが、五人がかりなら潰せる。でも手早くやらねえと、矢田に気づかれる」

「ああ」

皆、「矢田」と言わただけで、額に汗を滲ませる。

「てめえら、ビビり過ぎなんだよ。奴の名前くらいで汗搔いてるんじゃないよ」

「お、おう」

允はニヤリとして、

「決行は今日の放課後。いいな」

と言つた。

矢田久美子、中学二年。

杉野森学園の中等部に通つてゐる。

兄とは似ていず、同学年は言うに及ばず、上級生、下級生、高等部、果ては他校にまで親衛隊やファンクラブがあるほどの美少女だ。でも本人は至つて謙虚で、そんな事で自惚れたりしない。

その性格の良さが、更にファンクラブ増加を加速させてゐるが、彼らは決して久美子に近づこうとはしない。遠くから見ているだけだ。何しろ、久美子の兄は、ヤクザもビビる矢田通のだから。下手な事をすれば、命が危ないのだ。一度久美子に手紙を渡した阿呆がいて、通にもう少しで殴られるところだつた。久美子が間に入り、その阿呆は助かつた。

それからというもの、久美子には男が全く近づかなくなり、体育大会のフォーケダンスの時も、兄貴が見に來るのではないかとクラスの男子が怯え、久美子は参加を見合わせた。

でも久美子は兄を嫌つたりしない。幼くして両親を事故で同時に失い、兄と二人きりで生きて來た彼女は、兄が自分を大切に思つている事をよく知つてゐるので、やり過ぎの兄を怒らない。

時々寂しくなる事もあるが、それでも彼女は暗くなる事もない。

「また明日ね」

久美子は校門の前でクラスメートと別れ、家路に着いた。

「久美子さん」

後ろから大山がついて来る。

「大山君。どうしたの？」

久美子は立ち止まって大山を見上げた。彼女も身長百六十センチと女子では大きい方だが、それでも大山は遥かに大きい。

「妙な噂を耳にしました」

「え？」

「大東苑学院の石動が、矢田さんを狙っているとか」
大山は小声で言つた。久美子は顔をしかめて、
「仕方ないわね、お兄ちゃんは。やり過ぎなのよ、相手に対して」
「はあ」

久美子は通が喧嘩ばかりしているのを嘆いている。もちろん、兄だけが悪いのではないが、挑んで来た相手を足腰立たなくしてしまって、余計怨まれるのも事実なのだ。

「でも、手加減すると、連中が付け上がるんですよ」

大山はまるで上級生に話すように久美子に言つ。久美子は歩き出して、

「まあ、お兄ちゃんはアメリカ軍と戦つても負けないだろ？から、心配してないけど」

「それはそうなんですが」

大山は久美子を追いかけながら言つた。そして、一人が角を曲がつた時だった。

「グオ！」

大山の後頭部を、いきなり金属バットが襲つ。

「何？」

久美子が振り返ると、大山が倒れるところだった。

「大山君！」

久美子が大山に駆け寄る。

「に、逃げて下さい、久美子さん……」

大山は頭から血を流しながら言つた。

「へへへ、さてと。一緒に来てもらおつかね、矢田久美子さん」
石動允が、金属バットを背負い、ニヤニヤして言つた。

「どこへ行くの？」

「いいとこさ」

「嫌だと言つたら？」

久美子は怯まない。さすが矢田通の妹である。允はフツと笑つて、「そしたら、この『デブをボコる』

「……」

久美子は大山を見てから、「わかつたわ。行きましょう」

「ものわかりがいいや。兄貴とは違うねえ、久美子ちゃん」
允は久美子の肩に手を回した。

「や、やめろ、てめえ……」

大山がフラフラしながら立ち上がる。
「まだ寝てる、デブが！」

允以下六人が、大山を蹴つた。

「く……」

大山はまた倒れた。

「さあ、行こうか、久美子ちゃん」

允はけたたましく笑い、久美子を連れて去つてしまつた。

「く、くそ」

大山はポケットから携帯を取り出し、通に連絡した。

「矢田さん、やばいつす。久美子さんが、大東苑学院の石動に……」

大山は通の返事を聞いて、

「わ、わかりました……」

と携帯を切つた。

久美子達は、河川敷に来ていた。

「ここがいいところなの？」

久美子は允を睨んだ。すると允は、

「おお、目だけは兄貴と同じで、凄みがあるねえ、久美子ちゃん。
でも、全然怖くないよお」とバカにしたように言つて笑つた。

「さてと」

久美子は持つていた鞄を地面に置き、周囲を見渡した。

「見物の人が来ないうちに、終わりにするわね」

「は？ 何言つてんのさ、久美子ちゃん？」

允がヘラヘラしながら久美子に近づく。その時だった。

「えい！」

いきなり久美子の正拳が、允の鳩尾みぞおちに炸裂した。

「グエエエエ……」

允は涎よだれを垂らしながらそのまま前のめりに倒れた。

「な、何だ？」

他の五人は、ギョッとして久美子を見た。

「いくらお兄ちゃんが強くても、いつも守つてもらえるとは限らない。だから私も強くなつたのよ」

まさに瞬殺であった。久美子の蹴りと突きが次々に決まり、阿呆共はたちまち倒れ伏した。

「良かつた、誰にも見られなくて」

久美子はニコッとして鞄を持つと、

「じゃあね」

と言い、河川敷を去つた。

「あ、甘かつた……」

地獄の苦しみを味わいながら、允は呟いた。

「久美子さん！」

大山が走つて來た。久美子は驚いて、
「ダメよ、そんな状態で走つたりしたら」

「平気つす。それより、連中は？」

大山は辺りを見回しながら尋ねた。久美子はニコッとして、

「もう帰つたわよ。用がすんだみたい」

「そ、ですか」

大山は何故か汗を搔いていた。

（矢田さんに心配するなつて言われたけど、もしかしてあの六人、久美子さんに……）

「何、大山君？」

久美子は不思議そうな顔で大山を見上げた。

「あ、いや、何でもないです」

ある意味久美子さんの方が矢田さんより怖い、と思う大山だった。

その幼馴染み美少女につき（前書き）

本当に一番強いのは誰なのか?
それがわかる時です。

その幼馴染み美少女につき

杉野森学園高等部には、伝説的な男がいる。その名は矢田通^{やだとおる}。完全に無敵の男である。その名を聞いただけで、ワル共は震え上がり、その声を聞いただけで、一目散に逃げ出してしまう。

大袈裟ではなく、彼の強さは半端ではなかつた。宇宙人と戦つて、勝つたらしいのだ。最初は誰もがその噂を信じなかつた。だが、矢田通がヤクザの組を一つ潰して、喧嘩を売つて来た暴走族百人をたつ三十分で叩き潰したのが明るみに出ると、「宇宙人でもぶつ倒すかも知れない」という恐怖が広がり、もう誰も彼に戦いを挑もうとする者はいなくなつた。

この広い東京、いや、日本で、矢田通に勝てる人間は誰もいないと思われた。

只一人を除いて。

その只一人の人間の名は、大田美津子。矢田通の幼馴染みにして、矢田通が唯一、決して勝てない存在である。杉野森学園高等部では、一二を争う美少女であるが、その気の強さと、矢田通と幼馴染みといつ事実が仇^{あだ}となり、男共にはそれ程人気がない。と言うより、通が怖くて、誰も美津子に近づけないのだ。美津子は事ある毎に、「あいつとは、幼馴染みつていうだけで、別に何でもないんだから」と言うが、周囲は全く彼女の言葉を信じていない。

美津子は喧嘩が強い訳でもないし、通が彼女に頭が上がらない訳でもない。しかし、何故か通は美津子にだけは逆らつたりしなかつた。

もちろん彼は、他の女子生徒にも暴力を振るつたりはしない。それ故、通は女子には人気がある。何かで他校の男共に絡まれたりしても、杉野森学園の生徒だとわかると、大概のワルは蒼ざめて逃げるからだ。まるで通の存在は、水戸黄門の印籠である。

ところが、通は女子に人気はあるがモテる訳ではない。これは逆

に、美津子が災いしている。通の彼女は美津子で、通にお付き合いを申し込んだりしたら、美津子にボコられると妙な噂が立っているのだ。

さすがに美津子はこの噂だけは納得が行かず、何とかしようとしたらが、そんな事をすればする程火に油だと気づき、今は諦めて何もしていない。

美津子は不良に囲まれても、一步も引かない。ワル共はやがて美津子の事に気づき、死んでしまうのではないかというくらい顔色が悪くなり、地面に頭を擦り付けて謝り、逃げてしまう。

美津子の親友である富田香は、

「矢田君のおかげだね」

と嬉しそうに冷やかすが、美津子は、

「あいつのせいで絡まるるのよ！」

と取り合わない。本当は、ワル共に絡まれて困っている女子を見て見ぬフリができるない美津子が災いを招いているのであるが。

そんな二人のこの奇妙な関係は、安定しているかに思えた。

ところが、事情を知らない神奈川県のレディースの一人が、通の強さに惹かれ、杉野森学園の近くに現れ、その関係が揺らぎそうになつた。

その女の名は、城ヶ崎倫子。神奈川にその名を知られた悪の名門であるダルタニアーン学園女子高等部の一年だ。彼女は、周囲の仲間に、

「矢田通には、将来を誓い合つた大田美津子っていう女がいる。やめときな。そいつは、矢田が唯一頭が上がらない女なんだ。鬼のよう強いらしいよ」

などと止められたが、聞かなかつた。

「アタシは、アタシの流儀で、必ず通さんをモノにする」
倫子はすっかり通の虜になつていた。

「何？」

美津子は、同じ高等部にいる女子のヤンキー達に学園の裏に呼び出されていた。近くに土地神様を祀った祠ほりがある。祭神は竜神らしい。

「アタシらの仲間が、神奈川のバカに可愛がられた」「私には関係ないでしょ」

美津子は彼女達を無視して行こうとした。するとその中の一人が、「関係あるんだよ。そいつは、矢田を狙ってるんだ」

美津子は思わず立ち止まってしまった。

「それでも私には関係ない」

美津子は憤然としてまた歩き出した。

「勘違いしてるよ、大田！ そいつは女だ。で、矢田を自分の男にするつもりなのさ」

その言葉に美津子は振り返り、「それも私には関係ないわ」

と言い捨てると、去ってしまった。

「相変わらずだねえ、大田」

ヤンキー達はニヤリとした。

城ヶ崎倫子は、付近の不良共を女ばかりでなく男まで完全制圧し、その存在感を示し出した。そのため、高等部では職員会議が開かれ、城ヶ崎対策が検討された。

「矢田さんが狙われてる？」

その噂は中等部にまで広がっていた。矢田の舎弟を自称する中等部一年の大山は、その命知らずのバカが女だと知り、余計驚いた。

「何のつもりなんだ、その女は？」

大山は、まさか倫子が通に恋しているとは夢にも思わなかつた。

城ヶ崎倫子は只強いだけでなく、美少女でもあつた。彼女は、美津子が強いだけでなく学園一の美少女だと聞いていて、尚の事鬪志が湧いていた。

「通さんには相応しいのはアタシさ」

倫子は絶対に退くつもりはなかつた。

「姐さん、氣をつけて下さい。どうやら、狙われているのは姐さん
のようですね」

校門の前で待つていた大山が美津子に言つた。美津子はムツとして大山を睨みつけ、

「その『姐さん』はやめなさいって言つてるでしょ、大山君！ 私は極道の女じゃないのよ」

「す、すみません」

矢田さんの「いい人」だから、「姐さん」としか呼べないと思つてゐる大山である。

「いい迷惑だわ、あのバカのせいで」

美津子はブイツとして行つてしまつ。

「大山君も大変ね」

香が彼を労つた。大山は苦笑いして、久美子さんが心配してゐるので

「なーんだ、そういう事かア」

嬉しそうに大山を見上げる香。途端に赤くなり、動搖する大山。「あ、いえ、その、別に久美子さんに頼まれた訳じゃないですから」彼は巨漢を揺らしながら走り去つた。

「みんな大変ね、いろいろと」

香はニコッとして呟いた。

「待ちな」

美津子は後ろから声をかけられ、立ち止まつて振り向いた。そこには城ヶ崎倫子が立つていた。

「誰？」

訝しそうな顔で倫子を見る。倫子はニヤリとして、

「大田美津子だな？ アタシは城ヶ崎倫子。神奈川を締めた女さ」

「…」

美津子はギクッとした。倫子の田と雰囲気に「本物」を感じたのだ。その辺のワルとは違つ何かを漂わせている。

「通さん」、あんたとアタシのどっちが相応しいか、決めよひじやないの」

倫子は睨みを利かせて美津子に言い放つた。ところが美津子は、「お好きにひづれ。あんな奴で良かつたら、どうぞお持ち帰り下さいな」

と言い返し、歩き出した。

「えええ？」

完全に拍子抜けの倫子だった。そして、

「負けた…」

と呟くと、美津子を追わず、神奈川に帰つて行つた。

そして次の日。

美津子に更なる伝説ができた。神奈川を締めた城ヶ崎倫子をたつた一撃で倒したといつのだ。その噂が東京中を駆け巡るのに、一週間とかからなかつた。

「何でよ……」

噂を知り、美津子は激しく落ち込んだ。

「どうして私には、そんなおかしな噂がつき纏うのよー…？」

美津子はイライラして叫んだ。香が、

「仕方ないじやない、そういう運命なんだから」

「面白がらないでよ、香！」

美津子は笑いながら言つ香を睨んでから、

「あいつのせいよ。あのバカのせいで、私はこんな田に遭つのよ

「美津子……」

香は呆れていた。悪い事は全部矢田君のせいなの？

「今度という今度は我慢できない。あいつとは絶交よー」

「そんな事できないくせに

香が小声で言うと、

「何か言った、香？」

「ううん、何でもない」

大田美津子は、本当に強いのかも知れない。

そのお嬢様美少女につき

杉野森学園高等部。その一年の男子生徒である矢田通^{やだとおり}は、東京ばかりでなく神奈川までその悪名と凶暴さが鳴り響く喧嘩バ力である。そんな矢田通にも、小学校以来の親友がいる。その男の名は竹森信一^{たけもりしんいち}。喧嘩一筋の通と違い、信一は学問に秀でており、杉野森学園中等部にトップ合格し、その後も学年トップを現在まで守り続けている。何故彼が通と親友なのか、知る人は少ない。

信一は、チビッ子の通と違い、高身長でイケメン、その上スボーツ万能だ。そのため、高等部はもちろんの事、中等部、近隣の女子達を魅了している。ある時期まで、高等部の女子は、喧嘩バ力通派と万能王子信一派に分かれたほどだ。

ある日信一は、恋に落ちてしまう。杉野森学園創業者の一族にあたる富田産業のトップである富田光夫の愛娘、富田香^{はつかな}。彼女はまさに「深窓の令嬢」と呼ぶに相応しい気品を漂わせていた。病気がちで、あまり登校できない香は、中等部以来の親友である大田美津子の助けもあり、徐々に登校できるようになっていた。そんな香に、信一は劇的な恋をしたのだ。

「守つてあげたい」

信一の騎士道精神が炸裂した。確かに香は見るからに夢^{はかな}そつで、支えてあげないと折れてしまうのではないかと思わせる容姿である。

「香さん、僕と付き合つて下さい」

ストレートな信一は、いきなり告白した。香は最初は驚いた様子だったが、

「私のような病弱な女の子でも宜しければ」と承諾した。

恋は凄い。信一も香に恋したのだが、香も信一に落ちてしまった。そして彼女はどんどん健康になり、通常の生活に支障を來たさない

ほどに回復した。これには父親である光夫と、母親である小百合も驚き、信一を自宅に招いて感謝し、夕食を共にしたくらいだ。

二人はまさに杉野森学園のベストカップルとなつた。信一に憧れていた女子達も、最初は香に嫉妬し、随分と意地悪な言動をした者もいた。しかし、それも時を追う毎に鳴りをひそめた。香を好きな男達は、最初から信一には勝てないと思つていたので、そちらは何も支障はなかつたが。

そんな二人の恋は、順風満帆に見えた。だが、ある障害が現れたのだ。

香が幼い頃に遊んだ幼馴染の牧村宗太郎である。彼は杉野森学園創業者の安本玄三郎の次男である誠の息子である。創業者一族だといふ事を鼻にかけている、まさに鼻持ちならない男だ。

「香は僕の許嫁だ。^{いきなづけ}誰にも渡さない」

彼は金の力と親の力に物を言わせて、裏社会の顔役に信一をボコボコにしてくれるように頼んだ。

「これで香は僕のものだ」

昭和の昔のような愚かな発想の男である。

そしてある日の夕方。信一と香は、いつものように一緒に下校していた。一人は帰り道、公園で少し休んで話をしてから帰るのが日課だった。そこに、ドラ息子の宗太郎の依頼を受けたその筋の連中が五人、信一と香の前に現れた。

「どちら様ですか？」

生まれついての紳士である信一は、誰に対しても物腰が柔らかだ。するとその筋の人的一人が、

「悪い事は言わない。富田香さんと別れる。香さんには、牧村宗太郎様という許婚がいらっしゃるのだ」

「はい？ 仰つている意味がわかりませんが？」

信一はにこやかな顔で尋ねた。するとそいつらのリーダー格の男

が、

「質問は許さない。別れる」

「何ですの、あなた方は！？ 失礼ですわ！」

香が怒って言い返す。すると信一が、

「力オリンは下がつてて。この人達は、僕に用があるらしいから」

香は信一の真剣な顔を見てその場を離れた。

「嫌だと言つたら、どうなさるおつもりですか？」

信一はニッコリ笑つて言つた。

「身体に教えてやるんだよ！」

五人が一齊に信一に襲い掛かつた。

「きやああ！」

香は信一がやられてしまうと思つて叫んだ。しかし、やられたのは五人の方だつた。

「グエエエ」

皆、腹を押されてのた打ち回つてゐる。信一は仮にも矢田通の親友である。喧嘩が弱いはずがない。

「つ、つええ……」

五人はよろけながら逃げ去つた。

「手加減しましたが、お医者様に行つた方がいいですよ」

信一はそう言つて手を振つた。

五人は組事務所に戻り、事情を説明した。

「何だ、てめえら！ 情けねえぞ、全く！」

組長が怒鳴り散らした。

「たかが高校生一人を相手に、何してやがる」

「そ、それが、偉く強くて……」

言い訳する組員に、組長は切れた。

「どこのどいつなんだ、そのガキは！？」

「た、竹森信一って言います。杉野森学園高等部の一年です」

組員がそう言つと、あれほど息巻いていた組長の顔が蒼くなつた。

「た、竹森イ！？」

「どうしました、組長？」

組長の顔色の悪さに、組員は尋ねた。組長はガタガタ震えながら、「ば、バカヤロウ、その人は、矢田さんのお友達だよ！」

「え？」

矢田という名前は、その筋の人達には悪魔に匹敵する恐怖の名前である。

「あわわわわ……」

とんでもない人に関わってしまったと、組員達も蒼ざめた。

「最上級の菓子折り持つて、すぐ詫びに行け！　このままだと、ウチの組が矢田さんに潰されちまうぞ」

組長は大声で指示した。組員達も転がるように事務所を出て、お菓子屋に走った。

信一と香は、ちょうど公園を出たところで組員と会った。彼らは地面に額がめり込むのではないかといつぶらの土下座をして、菓子折りを渡すと、

「この事はどうか矢田さんには内密に」

と言い、逃げ去った。

「凄いのね、矢田君て」

香は笑って言った。信一は肩を竦めて、

「こんな事しなくても、通には言わないのにね。あいつに話したら大喜びで組潰しに行くだろうから」

「そうね。例えどんなお詫びがあつても、矢田君には関係ないわよね」

「そうそう」

結局組員達の奔走は全く無駄だった。

そしてその日の夜。

吉報を待つていてるドラ息子宗太郎に、香が来たとメイドが告げた。

「そうか」

早速俺に会いに来たか。どちらが大物か、わかつたのだろう。宗太郎はニヤニヤして香の待つ居間に赴いた。

「おお、香。待っていたよ」

大袈裟な仕草を交え、宗太郎は香に近づいた。

「宗太郎さん、私、貴方に贈り物がありますの」

香は満面笑顔で言つた。宗太郎は気取つてフツと笑い、

「そう。何かな？」

と間抜けな顔で尋ねた。そこへ飛んで来た、香の平手。

「いってえ！」

宗太郎はそのまま床に倒れてしまった。

「今度あんな事したら、この程度ではすみませんから、よく覚えておいて下さい」

香はそう言い残し、屋敷を出た。宗太郎はショックで失禁までしてしまつた。

宗太郎はもう一度裏社会に依頼をしたが、どこも受けてくれなかつたのは言つまでもない。

「お帰り、カオリン」

屋敷を出て来た香を、信一が出迎えた。

「只今、信ちゃん」

香は笑顔で答えた。そして、

「あの人、執念深いから、また何か仕掛けて来るわ」

「大丈夫だよ。その筋の方々は、もう絶対来ないから」

信一は笑つて言つた。香も笑つて、

「凄いのね、矢田君効果つて」

「そうだね」

二人は腕を組んで歩いて行つた。

その弟美少年について

東京の私立の名門である杉野森学園高等部は、別の意味でも「名門」である。

矢田通。今世紀最強と言つても過言ではない、チビッ子高校生だ。街でいきがつてゐるワル共も、通の名を聞けば借りて来た猫より大人しくなり、その声を聞けば、隣の芝生よりも青くなる。それくらい、矢田通の強さは、その筋では有名だつた。しかもそれに加えて、妹の久美子、彼女の美津子も半端ではない強さだと噂される。久美子に関しては、間違つてはいないのだが、美津子は別に強くはない。但し、気の強さだけなら久美子以上だ。

「私は彼女じやないから！」

美津子はワル共が泣きながら許しを請う時も、そこだけは強調して説明する。でもワル達の耳には届かない。美津子は矢田通が唯一頭が上がらない存在と思われてゐる。すなわち、「矢田通 < 美津子」という絶対公式が、連中の間に浸透してゐるのだ。

その美津子の「伝説」の恩恵を一番受けているのは、彼女の弟である晶である。^{あきら}彼は成績優秀なのは姉と同じだが、気の弱さは誰に似たのかというくらい大人しい男だ。しかも悪い事に晶は久美子と幼馴染で、杉野森学園中等部の同級生である。更に、久美子の兄である通が唯一久美子との交際を認めている男だ。多分結婚したいと言つても、通は許すだろう。

晶と美津子が並んで歩くと、晶の方が女の子に見えてしまう。だから美津子は晶に、

「もつと男らしくなりなさい！」

と毎日言つてゐる。

「あなたがなよなよしてると、私がいじめてると思われるから、嫌なのよ！」

その言動がすでに晶にとつては「いじめ」に等しい。

普通ここまで弱いと、学校でいじめの対象になりそうだが、彼はの大田美津子の弟で、しかも彼女は矢田通の妹の久美子という最強形態なので、誰も晶をいじめたりしない。下校時に、晶が他の中学生のワルに絡まれたりしても、同級生のワル共が身体を張つて晶を守つてくれる。彼らは誰かに頼まれたわけでもなく、自主的にしているのだから凄い。

そんな事があつたのは入学したばかりの頃だけで、しばらくすると晶の立場はその附近一帯に知れ渡り、誰も彼に絡んだりしなくなつた。むしろ妙な愛想を振りまく不気味な連中すらいるほどだ。

「晶君、帰りますよ」

久美子が笑顔で声をかける。

「う、うん」

晶は何故かオロオロして答える。完全に尻に敷かれる組合せだ。

久美子はそんなつもりはないだろうが。

「どうしたの、具合悪いの？」

久美子が心配そうに彼の顔を覗き込む。

「べ、別にどこも悪くないよ」

晶は慌てて答える。

「そう。良かった」

久美子ちゃんの笑顔は癒される。晶はそう思つ。

「久美子さん」

そこへ現れる、胃が痛くなる存在。同級生の大山。身長は一メートルを超える、体重も百キロを超える。久美子を慕つてゐるようだが、決してそれを表に出さない。でも、晶には大山の思いがよくわかる。

「あら、大山君。どうしたの？」

大山は久美子に笑顔で尋ねられて、嬉しそうだ。

「いえ、その、またおかしな連中がうろついているらしいので」

「大丈夫よ。いざとなつたら、お兄ちゃんに助けてもらうから」

久美子は一応晶には自分が格闘技を習つてゐる事を隠してゐる。

二人の関係は、むしろ久美子が晶に「LOVE」なのである。もち

ろん、晶も久美子の事が好きなのだが、どこか恐れている節があるのだ。

「そ、そうですか」

自分を頼つて欲しいと思う大山だが、それは決して口に出さない。それが男だと彼は思つてゐる。

「今日は注文していった参考書が届く日なんだ」

「そうなの」

一人は楽しそうに歩き出す。大山は少し距離を置いて歩いて行く。

「ここね」

久美子と晶は駅前の大型書店に入る。大山は中には入らず、表で周囲を監視する。

「ありがとうございました」

晶は参考書を受け取り、レジから離れた。その時、後ろにいたその筋の方の足を踏んでしまつた。

「あいつててて！」

大袈裟に騒ぐその筋の人。今時珍しい弾けつぶりである。

「ああ、『』『めんなさい！』

慌てて謝る晶。その声に気づき、レジに近づく久美子。
「骨が折れたかも知れん。ちょっとと外で話そうか、兄ちゃん」

「は、はい」

素直について行く晶を、久美子が引き止める。

「久美子ちゃん」

「どうしたの、晶君？」

「人のやり取りに気づき、その筋の人人が振り返る。

「おい、姉ちゃん、あんたはこの兄ちゃんの関係者か？」

「そうですけど」

「じゃあ、一緒に来てもらおうか」

「はいはい」

陽気に答える久美子に、晶は呆然としました。

(まことに、久美子ちゃん。相手は絶対ヤクザだよ)

早く姉か通に連絡をと思つたが、外に大山がいる事を思い出す。
「ああ！」

運の悪い事に、大山は横断歩道で困つていたおばあさんを背負つて道路の反対側に行つてしまつている。

（ど、どひしょひ？）

晶がソワソワしている間に、久美子はどんどんヤクザと歩いてしまう。

「晶君、早く」

「う、うん」

晶は漏らしそうなくら「ビビッ」ていたが、久美子は全く動じていない。

（さすが、矢田さんの妹だなあ）

晶は感心してしまつた。

「どこまで行くの、おじさん？」

久美子が尋ねる。

「そこに見えるだろ、ウチの事務所の看板が」

「ああ、何だ、よっちゃんのとこなの？」

「ああ？」

ヤクザは、自分の組の組長がちゃんとづけで呼ばれたので、久美子を睨みつけた。

「あ、よっちゃんだ！」

久美子は事務所の一階の窓から下を見ている強面の男に手を振つた。その男も久美子に気づき、

「ああ、久美子さん。どうしたんですか、そんなところで？」
嫌な汗を全身から搔いているヤクザが一人。彼の寿命が縮んだのは間違いない。

「今日はありがとうございました、久美子ちゃん」

家の前で晶は言った。

「別にお礼なんて言われる事しないよ、晶君」

久美子はニコッとして答える。

「そ、そうだね」

世の中には触れてはいけない事がある。そう思つた晶だった。

プロローグ 再会

アタシの名前はエンジェル。おとめ座スピカ星系の住人だ。地球上から見ると、まさに「天使」の姿をしている、所謂「異星人」である。

以前、地球人の男の子を瀕死の重傷にしてしまい、彼にアタシの血を分けた。そのせいでその子は最強の少年になってしまった。そしてその事を敵対するうしかし座アークツールス星系の連中に知られ、その少年を巡つての戦いが始まった。ちなみにアークツールス人は、地球人から見ると「悪魔」の姿に見える。

当事者である少年矢田通君の活躍（？）もあり、アークツールス人の中の悪意ある連中は一掃された。

それからしばらく後の事。アタシは、スピカ軍地球侵攻部隊の総司令官であるミカエル様に呼び出された。

「失礼します！」

敬礼して入室する。ミカエル様に拝謁するのは、何度経験しても慣れる事はない。

「ご苦労、エンジェル。楽にしたまえ」

「は！」

一步前に進み、ミカエル様を見る。

「アークツールスとの和平交渉は順調だ。もうすぐ地球を去る事になろう」

アタシはキヨトンとした。

「は？ 地球は諦めるのですか？」

「そうだ。アークツールスも手を引く事に同意した」

「まさか。連中が諦めるとは思えません」

ミカエル様は、アタシがそう言うのを見越して笑った。

「同意せざるを得ないのだ。地球の住環境をスピカやアークツール

スのレベルまで回復させるには、途方もない時間がかかるからな
「地球が汚れ過ぎている、といつ事でありますか？」

アタシの質問にミカエル様はフツと笑い、

「端的に言えば、そういう事だ」

「はい」

アタシは納得した。地球の住環境の劣化は、目を覆いたくなるものがあつたからだ。

「そこでだ」

ミカエル様はアタシに画像が写つた携帯型の3Dグラフを渡した。
「これは？」

「アスタークトが虚空の果てから戻つたらしい。サタンからのホット
ラインで知らされた」

サタンとはアーフツールス軍の総司令官の名だ。

「アスタークトが？」

アスタークトこそが、前回の戦いの元凶だ。通君の怒りの鉄拳で、
一度と戻れない虚空の果てに飛ばされたはずなのに。

「どうして戻れたのですか？」

「ギリギリのところで踏みとどまつたようだ。呆れた執念だとサタ
ンも言つていた」

「はあ」

私もそう思う。

「奴の狙いは我々ではない」

「え？」

アタシは嫌な予感がした。

「奴の狙いは地球。いや、通だ」

ああ、やつぱり。あの粘着男、まだ通君を怨んでいるんだ。気持ち悪いなあ。

「そこで、君に地球に降下してもいい、通の警護に当たつてほしい
のだ」

「ええ？」

アタシは故意にではなく、本当にビックリして大きなリアクションを取つてしまつた。

「嬉しくないのか？」

ミカエル様は意地悪な質問をする。アタシが通君に氣があるのをご存知なのだ。

「べ、別に嬉しくはありませんが、自分が一番よく彼らの事を理解しているので、適任だと思います」

アタシは精一杯の見栄を張つて言つた。ミカエル様には丸わかりだつたが。

「それではすぐに地球に降下し、通と接触してくれ」

「了解しました！」

アタシは自分でも驚くくらい、気分が高揚していた。
通君に会える！ ウキウキしてしまつた。

一方、その矢田通のいる日本。東京の一角にある私立杉野森学園高等部。喧嘩バカの通は相変わらず喧嘩に明け暮れていたが、すでに高校生では相手になる者がいない。彼は教室で椅子にふんぞり返つていた。

「いい加減、喧嘩するのやめなさいよ、通」

幼馴染で、只一人通を押さえ込める存在の大田美津子が言つた。氣の強さなら誰にも負けませんという顔つきの美少女だ。しかし通は、

「向こうから仕掛けて来るんだからしそうがねえだろ？ 僕だつて好きで喧嘩してる訳じゃねえよ」

「嘘ばっかり。喧嘩したくて、ウズウズしてゐるくせに」

美津子の皮肉に通は、

「うるせえよ、ブス」

「何ですって！？」

美津子は通の襟首を捻り上げた。

「もういつぺん言つてごらんなさいよ、このチビ！」

美津子のその言葉に、近くにいた生徒達が真っ青になつて遠くに逃げ出す。「チビ」とか「寸足らず」とかの言葉は、通には絶対言つてはいけない禁句なのだ。

「言つてやるよ、バス。気がすんだか、バス…」

「あつたま來た！ もつあんたとは絶交よ…」

「おひ、望むところだ」

通は歩き去る美津子にベーッと舌を出した。周囲は一人の緊張感に溢れたやり取りを畠然として見ていた。

「美津子、言い過ぎよ」

同級生で親友の富田香たしなが奢める。彼女はお嬢様な美少女である。

「何でよ！？ あいつは私に三回もバスつて言つたのよ…」

「あのねえ…」

呆れてしまう香。

「通、謝つた方がいいぞ、美津子さん！」女の子にあの言葉は、酷いと思つぞ」

小学校からの親友である竹森信一が言つたが、通は、「冗談じゃねえよ。あいつはもつと酷い事言い返したじゃねえか。何で俺が謝らなきやならねえんだよ！？」

通に「チビ」と言つて無事ですむのは美津子だけだ。信一は通が口ではああ言いながらも、美津子には本氣で怒つていらない事を知つている。

「全く……」

まさに「夫婦喧嘩は犬も食わない」の類いである。

そして下校時。通は信一と校門を出た。

「通兄ちゃん！」

そこへピヨコンと女子高生が現れた。他校の生徒のようだ。

「おお、瞳じやねえか？ どうしたんだ？ 学校は？」

通がそう尋ねたのは、通の父方の従妹いいじである矢田瞳だった。美津子がきつい感じの美少女なら、瞳はまさしく癒し系美少女だ。

「今日は創立記念日で休みなの。だから、兄ちゃんに会いに来たのよ」

「フーン」

通は笑顔で応じた。

「あ、この人、信ちゃんね？ 懐かしいわあ、何年ぶり？」

瞳は信一を見て言った。信一は、

「小学校以来だから、五年ぶりくらいかな？」

「そうだね。あの時よりカッコよくなつてるよ。彼女いるの？」

瞳は興味津々の顔で信一に迫る。通が、

「残念だけどいるぞ。お前じゃ太刀打ちできねえよ」

「あらま、ショックウ」

瞳はニコニコして言つ。彼女は昔からこんな感じで、とても気さくな女の子。信一は苦笑いだ。

「ああ、瞳ちゃん。久しぶりね」

美津子が声をかけた。彼女は通を全く見ていない。隣の香は呆れている。

「ああ、^{みつこねえ}美津子姉！ 久しぶりー！」

瞳は美津子と手を取り合つて喜ぶ。そして香に気づき、

「もしかして、この人が信ちゃんの彼女？」

そう言われて香はドキッとした。信一はニッコリして、

「そうだよ。僕の彼女、宮田香さん」

「よろしく」

香は信一の紹介にホッとして挨拶する。瞳も香に微笑んで、

「矢田瞳です。よろしく」

そしてしばらく女三人の止め処ない会話が続いた。

「行くぞ、信一」

「あ、ああ」

呆れた通が歩き出す。信一も仕方なく彼について行く。

「ああ、待つてよ、通兄ちゃん！」

瞳が追おうとすると、

「放つておきなさいよ、瞳ちゃん。それより、どこかで美味しいものでも食べない、久美子ちゃんも誘つて」

「ああ、それいい！ 行こ行こ、美津子姉」

三人はペチャクチャ喋りながら、通の妹である久美子がいる中等部に向かつた。

「はーい！」

通は突然現れたその金髪の美少女に仰天した。

「て、天使女？」

通の前に現れたのは、地球人の女の子に変装した、スピカ人のエンジェルだった。

「またその呼び方する！ 怒るよ、ホントに！」

エンジェルは口ではそう言いながらも嬉しそうだ。

「信一君も元気そうね。香ちゃんとはうまくやつてる？」

信一はニコツとして、

「おかげ様で。エンジェルさんも、相変わらずお奇麗ですね」

「あらん、ありがとー。でも、香ちゃんに悪いから、お礼のキスはしないわね」

エンジェルがあまりにハイテンションなので、通も信一も引き気味だった。

「何しに來たんだよ、お前？」

通は素つ気ない態度で尋ねた。エンジェルは苦笑いして、

「実はさあ……」
と来た理由を話した。

「またかよ」

通はアスタークトの顔と声を思い出していたんだ。信一が、
「で、そいつはもう近くまで來てているの？」

「多分ね。でも、アスタークト達は地球の環境に私達ほど適応しないから、長時間はいられないはずなんだ。いふとしても、何もできなきいとは思つうんだけど」

エンジェルが考えながら言つと、通は、

「だつたらお前も来なくていいじゃん。それにあのカマヤロウは、一度ぶつ飛ばしたんだから、心配いらねえよ」

「相変わらず冷たいんだから、通は。そんなにアタシが嫌いなの？」
エンジェルが通に擦り寄つて尋ねると、通はビクッとして、

「こら、引っ付くな！」

と逃げた。エンジェルはケラケラ笑つて、

「何よ、美津子ちゃんが怖いの？」

「だ、誰があんな奴、怖いもんか！」

ムツとする通。信一は肩を竦めた。エンジェルは真顔になつて、
「アスター口トは強くなつてゐるよ。あのサタンが警戒するように言つ
て来たくらいだから」

「サタンが？」

通もサタンの事は覚えている。絶対勝てないと思つた相手だ。そ
して、「強くなつてゐる」という言葉が、通の闘争心を搔き立てた。
「面白そうだな。どのくらい強くなつたか、確かめてみるか」

「あんたねえ……」

エンジェルは思い出した。このバカはこいつこう奴だと。

「え？」

エンジェルが急にビクンとして周囲を見回す。

「どうした？」

通もそれに釣られて周りを見た。信一も警戒する。
「おかしいな、あいつの気配が微かにしたんだけど。消えちゃつた」
エンジェルは首を傾げた。通は舌打ちして、

「何だよ、役に立たねえ女だな」
「五月蠅いよ、全く！」

エンジェルはキツとして通を睨み、

「アスター口トの奴、地球に降りてるよ。あの気配は、そう遠くなか
つたから」
「そうか」

途端に嬉しそうになる通である。

「でもどうして消えたんだる？ 三次元から出たのなら、その痕跡は残るはずなのに、それもないし」

エンジエルは考え込んだ。

「まあ、あんまり心配するなって。あんなカマヤロウ、どんなだけ強くなつても俺の敵じゃねえよ」

通はニヤツとして言った。エンジエルは溜息を吐いて、「だといんだけね」と呟いた。

第一章 アスタークト現る

通は、エンジェルが現れたのを鬱陶しく思っていたが、それを口にする事はなかつた。彼は決して女が苦手な訳でも、気遣いができない訳でもない。以前、別れ際にキスされた事も覚えているし、美津子がアスターに監禁された時も、命がけで助けようとしてくれたのも忘れてはいられない。だから、彼は、それなりにエンジェルに恩義を感じてはいるし、エンジェルが自分の事をどう思つてはいるのかも理解している。

「そう言えはさ、他のみんなは元気?」

他二て？

通はそれで甘素の氣ない態度だ。彼なりの照れ隠してある。

やんは元氣？

「元気だよ。会つてくか？」

通が言つと、エンジェルは苦笑いをして、

「会いたいけど、私が会うと迷惑かかるからね」

「何言つてんだ、今でも十分迷惑だよ」

「ひつじー」

知らない人が聞けば、カツブルの会話にしか聞こえない。

久美子ちゃんは元気ですよ。今では中等部で一番強いかもね!」

「へえ、血は争ひなしにて奴?」

ハハシノルが樂じやへば喜びと

「アーティスト」

ハジエルは二回もひいたが、

「え？

「どうした、天使女？」

通が眉をひそめて尋ねる。エンジェルは通に「天使女」と呼ばれた事に突っ込むのを忘れるほど驚いていた。

「うそ、アスターがすぐそばにいる」

「何?」「

通と信一はサッと背中合わせになり、周囲を見た。

「ひつちだよ」

エンジェルが走り出す。

「おいおい、そんなに近いのか?」「

「うん、すぐそばだよ」

通と信一は顔を見合させてからエンジェルを追いかけた。

「あ

通は角を曲がったところで思わず立ち止まつた。前から美津子達が走つて来るのが見えたからだ。

「美津子ちゃん! 香ちゃん! 久美子ちゃん! お久ーっ

!」

エンジェルは事情を知らないので、大喜びで手を振る。

「あ、エンジールさん、ちよつと良かつた!」

「は?」

エンジールはキヨトンとした。美津子はゼイゼイ息をしながら、「またあの変な連中が現れたのよ! 瞳ちゃんが連れて行かれて……」

「……」

「何! ?」

通が会話に割り込む。

「どうして瞳が?」

「わからないわよ!」

一人は「絶交した」のを忘れて話していた。

「居場所わかるか、天使女?」

通がエンジェルを見る。エンジェルは、

「まだ三次元にいるよ。ひつちだ!」

とまた駆け出した。通はそれに続いて、

「信一、美津子達を頼む！」

「了解」

信一は敬礼で応じた。

「あのカマヤロウ、何考えてるんだ？」

通は走りながら思つた。

二人は程なく河川敷に出た。以前美津子が連れ去られた場所だ。
「あそこ！」

エンジエルが指差す。河川敷に瞳が倒れているのが見えた。

「瞳！」

通は瞳に向かつて走り出す。

「あ、通！」

エンジエルは、この何も考えない男の行動を呆れ、後を追つた。

「瞳、大丈夫か！？」

通は瞳を抱き起こした。

「あ、通兄ちゃん……」

瞳は薄らと目を開けた。

「良かつた、何ともないのか？」

「うん。待つてたよ、通兄ちゃん、兄ちゃんが来るのを……」

瞳はガバッと通に抱きつく。通はビクンとしたが、

「お、おう。もう大丈夫だ」

「うん。私はもう大丈夫」

通に抱きついている瞳の腕の力が突然強力になつた。

「ぐう！」

通はその力に仰天し、

「瞳、いてえよ、そんなに締めつけるなよ」

と振り解こうとした。その言葉にエンジエルが、

「通、おかしいよ！ 地球人の女の子が、いくら力を入れたって、あんたが痛いなんて思うわけないよ！」

「あなたが痛いなんて思うわけないよ！」

「あ！」

通はエンジエルの言葉にハツとした。

「そう、私は大丈夫だけど、兄ちゃんは大丈夫じゃないよー。」

「ぐおおおお！」

更に瞳の腕が通を締めつける。

「通！」

エンジエルが駆け寄ろうとするが、アーフツールス人の兵士が現れた。

「く！」

エンジエルと兵士の戦闘が始まる。

「やめろ、瞳……。今なら冗談ですませてやるよ……」

通は瞳を睨みつけた。しかし瞳は、

「やーよ。通兄ちゃんは私のもの。美津子姉になんか渡さないんだから！」

「何だと！？」

通は瞳の腕をようやく振り解き、彼女から離れた。

「兄ちゃん、私と付き合つてよ。私、美津子姉よりずっと前から、兄ちゃんの事好きだつたんだよ」

瞳は急に涙を目に浮かべて話した。

「瞳……」

通は一瞬氣を抜いてしまった。

「だから、私のために死んで、通兄ちゃん！」

瞳の顔が鬼のような形相になり、バツと通に近づいた。

「グオッ！」

瞳の正拳が、通の鳩尾みぞおちに入った。

「つうひ……」

エンジエルが兵士を片付けて、瞳に蹴りを見舞った。

「何してるの、通！？」

エンジエルはうすくまる通を抱き起こした。

「つまらんな、その程度では」

「！？」

その声に通とエンジェルはビクッとし、声の主を見た。

「久しぶりだな。今度こそ、貴様を虚空の果てに送つてやるぞ、地球人」

そこには、アスタークトが立っていた。以前よりパワーを漲らせて。

「カマヤロウ、てめえ、瞳に何をした！？」

通はエンジェルの支えを振り払つて怒鳴つた。アスタークトはフツと笑い、

「わからんのか、その女がどうしたのか？」

エンジェルが先に気づいた。

「そうか、あんた、通と同じ事を！」

「ほう、察しがいいねえ、スピカ人のくせに」

アスタークトはエンジェルを見た。

「スピカ人のくせには余計よ！」

エンジェルはカツとなつて言つた。アスタークトはそれを無視して、

「さあ、瞳、私と一緒に来るので」

「はい、アスタークト様」

瞳はスツとアスタークトに寄り添つた。

「てつめえ！」

通がアスタークトに突進した。

「ここで待つていてる。この女を返して欲しければ、必ず来る事だ」

アスタークトはそういう残し、瞳を伴つてテレポートしてしまつた。

「くそ！」

通は地団太踏んで悔しがつた。エンジェルはアスタークトがいた場所に落ちてゐる一枚のカードを拾つた。

「これは、五次元の座標軸……」

「何だ、それ？」

通が覗き込む。

「奴の居場所よ。ここにアスタークトがいる」

エンジェルがそう言うと、

「よし、すぐ行くぞ、天使女！」

「アタシはエンジェル！ その呼び方、やめてよね」

通は苛立つていた。

「うるせえよ！ とにかく、早く行くぞ！」

「ほう。そんなに私とキスしたいんだ、通？」

エンジェルの言葉に、通はその時の事を思い出した。

「ま、ま、また、あれやるのか！？」

通は真っ赤になつた。エンジェルはいたずらっぽく笑つて、
「大丈夫よ。すぐすむから。今日はギャラリーもいないしね」

「お、おい……」

エンジェルは妙に色っぽい顔で通に近づいた。

「お前、この緊急時にだな……」

思わず後ずさりする通。

「何勘違いしてるのよ。キスして転移しなきや、五次元に行けない
でしょ！」

エンジェルはガバッと通に抱きつき、

「では、いただきます」

「うわあああ！」

ブチゅうと音がして、一人の唇が触れた。途端にエンジェルが輝
き出し、通に溶け込む。そして通が輝きだし、エンジェルの姿に変
わつた。二人は一つになり、強大な力を得たのだ。

「おおお……」

通は久しぶりに自分のパワーが上がったのを感じた。

「え？」

ふと気づくと、畳然として自分達を見ている美津子達がいた。。

「うわ！」

通は仰天した。

『おい、美津子達に見られたぞ』

通は自分の中のエンジェルに言つた。エンジェルは、

『別に見られてもミカエル様に罰を受けたりしないから安心して』

『そういう事じゃなくてだな……』

『何よ、美津子ちゃんに見られると困るので、私とのキス?』

『べ、別にそんな事はねえよ…』

エンジェルは心中で笑つた。

「お、おう、これから、瞳を助けに行つて来る… じゃあな…」

『う言つと、エンジェルの姿の通はテレポートした。』

「今、お兄ちゃん、エンジェルさんと……」

久美子がそう言ひかけたのを、信一が止めた。

「おつと、変な詮索はなしね」

でも美津子は固まつたままだ。

「信ちゃん、美津子がフリーズしてるわ」

香が美津子の反応がないのを確認して言つた。

「再起動まで時間かかりそうだね」

その様子を見て信一が答えた。

「お兄ちゃん……」

久美子は通が消えたところを見て呟いた。

第一章 通初めての敗北？

通とエンジールの「熱い口づけ」を田撃し、フリーズしてしまった美津子を、香と信一が抱えるようにして家に運んだ。

「お姉ちゃん！」

知らせを受けていた弟の晶が玄関で出迎えた。

「どうしちゃったんですか、姉は？」

晶は瞬き一つしない美津子を見て香に尋ねた。

「えーとね、ちょっとお答えできかねます」

香はそう言つて苦笑いする。信一が、

「まあ、話は美津子さんを休ませてからにしようか、晶君」「は、はい」

香の代わりに晶が美津子を支え、信一と一人で部屋まで運んだ。

「一体どうしたの？」

晶は小声で久美子に尋ねた。久美子は何故か赤くなつて、

「わ、私に訊かないでよ、晶君」

「え？」

晶は久美子が赤くなつたのを見て、余計訳がわからなくなつてしまつた。

その頃、お騒がせの張本人である通は、アスターントに指定された五次元の座標に向かつて飛んでいた。座標の位置に正確にテレポートできればいいのだが、行つた事がない位置にいきなり飛ぶ事は至難の技なのだ。

『あとどれくらいかかりそうだ、天使女？』

通は心の中でエンジールに話しかけた。

『天使女じゃなくてエンジール！ あと地球時間で三十分でどこかな』

『もつと早く着けねえのかよ？』

『無理よ。これでも相当ギリギリのスピードなのよ。私の身体が壊れそうなの！』

『そうか。わかった』

エンジェルも、通と同化しているので、彼の感情がよくわかる。だから、焦る気持ちも理解できた。しかし、飛翔に体力を使い過ぎると、アスターと対峙した時に勝てる見込みが薄くなる。

『瞳ちゃんてさ、通の事が好きなの？』

『そんなんじゃないさ。あいつは昔から、人のものが欲しくなる奴なんだ』

『そうなの？』

エンジェルは通の心の中を覗いてはいけないと想いながらも、つい見てしまった。

通がまだ保育園入園前の頃。瞳はすぐ近くに住む仲の良い従妹だつた。まるで本当の兄妹のよう遊んでいた。

それが少し変化したのは、久美子が生まれてからだ。通が可愛がる久美子に嫉妬した瞳が、通がいな時に久美子に意地悪をしていた。久美子はまだ泣く事しかできなかつたので、瞳の意地悪はエスカレートし、久美子の服を破つたり、手をつねつたりした。

ある日、瞳を見ると泣き出す久美子を見て不審に思つた通が、とうとう瞳の「犯行」を目撃し、彼女に怒つた。瞳は逆ギレし、「通兄ちゃんがアタシと遊んでくれないからだ！」

と泣き出した。その頃の通は、今とは違つて喧嘩バカではなかつたので、自分が悪い事に気づき、素直に瞳に詫びた。そして二人の仲は元通りになつた。

久美子に対する嫉妬がなくなつたのも束の間、次に通が小学校で出会つた美津子に、瞳の矛先は向いて行く。

通が一年生の時は、瞳も美津子を敵視していなかつたのだが、瞳が小学校に入学すると、美津子を異常なほどライバル視し、二人が一緒にいると必ず割つて入つていた。

美津子も瞳が可愛いので、彼女が割り込んで来るのを不快に思わず、一緒に遊んでいた。幼い頃はそれですんでいたが、小学校高学年になると、「仲がいい」では気がすまなくなつた瞳が、通に告白した。

「兄ちゃん、アタシと付き合つて」

「俺達、まだ小学生だぜ。それに俺とお前は従兄妹同士じゃないか」通のその不用意な発言が、また瞳を切れさせた。

「従兄妹同士は結婚だつてできるのよ！ ネットで調べたんだから！」

「おー……」「…

通は瞳がそこまで思いつめているとは考えていいなかつたので、面食らつてしまつた。

困り果てた通は、しばらく悩み、美津子となるべく遊ばないようになつた。美津子も瞳の通に対する感情に気づいたらしく、「瞳ちゃんを大事にしなさいよ」と通に忠告し、通と距離を置くようになつた。

ところが、瞳は父親の仕事の都合で、海外に行く事になり、騒動に突然幕が引かれた。

瞳からは頻繁に手紙が届いていたが、やがてそれも通が高校に入学する頃には途絶えた。通の両親の事故死で、瞳の家族と疎遠になつていたからだ。だから今日の瞳の出現は、まさに突然だつたのである。

エンジエルは辛くなつた。通の瞳に対する思いは、相当複雑だ。瞳もそうだらう。もし、アスタロトがその事を知つた上で、瞳を利用しているのなら、絶対に許せない。そう思つた。

「あれか」

五次元空間に浮遊する城。アスタロトが独自に築いたもののようだ。自分の家の紋が縫い込まれた旗が掲げられている。

「待つてろ、カマヤロウ。ギツタギタにしてやるぞ！」

久しぶりに本気の「喧嘩」ができるので、通は瞳の事も忘れてワクワクしていた。

『はあ。心配して損しちゃった』

エンジエルは通の呑氣を加減に呆れてしまつた。

「どりやああああ！」

通の正拳突きが城門の吹き飛ばした。

「待つていたぞ、地球人」

城門の向こうの庭園にアスタークトと瞳が立つてゐる。通は着地して、

「瞳を返してもらうぜ、カマヤロ」「

するとアスタークトはニッとして、

「瞳、お前あいつのところに戻りたいか？」

「いいえ、アスタークト様、私はここに残りたいです

瞳のその発言に通は仰天した。

「瞳、何言つてるんだ！？ そいつはな……」

「通兄ちゃんと違つて、アスタークト様はとてもお優しいのよ

瞳はアスタークトに寄り添つて言つた。

「瞳……」

通は唖然とした。アスタークトは通の動搖を笑い、

「情けないな、地球人。助けに来たはずが、拒否されるとはな

「く……」

通は歯軋りした。そして更に通に追い討ちをかける事を瞳が言い出した。

「アスタークト様、私、通兄ちゃんを殺したいんですけど、かまいませんか？」

通は打ちのめされていた。

（二）殺すだと？ あの瞳が、そんな……）

「かまわんさ。存分にお礼をしてから、殺してやれ」

「はい！」

風を巻いて瞳が通に迫つた。

「うわ！」

完全に虚を突かれた通は全く防御する事なく、瞳の正拳を顔面に食らった。

「やついー！」

瞳は大喜びしている。

「つづ……」

通は口から血を流し、瞳を見た。

『通、相手はあんたと条件が一緒なんだ。気を抜くと本当に殺されるよ』

エンジェルの声が忠告する。

「わかつてるよ。わかつてるけど……」

通は星の数ほど喧嘩をして来たが、一度も女を殴った事はない。いや、暴力を一切振るつた事がないのだ。それは彼の中の絶対的な掟だ。それだけは、例え地球を賭けられても破れない。

「何ボサツとしてんのよ、兄ちゃん！」

瞳のハイキックが後頭部を襲つ。

「ぐう！」

通はそのまま前のめりに倒れた。

「まだ早いわよ。全然楽しめてないわ！」

瞳は顔面血だらけの通を髪を掴んで引き起こし、

「おらあー！」

と膝で腹を蹴つた。

「うぐ……」

また崩れ落ちそうになる通を瞳が引き起こす。

「まだまだよ！」

連續の膝蹴りが、通の腹に突き刺さる。

「ゲヘH……」

通は口から血を吐いた。

「つまんないわ、兄ちゃん。反撃しなさいよ」

瞳は全く抵抗しない通を嘲り、蹴り倒した。

「私も気分悪いのよ。こんな一方的なやり方はね」

「そう、じゃあこっちも行くわよ！」

エンジェルは通の意識を閉じ込め、自分の身体を動かした。

「ええい！」

キックが瞳の顔にヒットした。

「キャツ！」

不意を突かれ、瞳は後ろに倒れた。

「あんた、通が女に手を挙げないのを知つていてこんな事をするのなら、アタシが相手だよ！」

エンジェルは、本当は自分の顔がこれ以上ボコボコになるのが我慢できなかつたのだ。

「いいわよ、別に。死ぬのはあんた達なのに変わりはないから」

瞳は狡猾な笑みを浮かべて言い返した。

「バカにするなあ！」

エンジェルの反撃が始まった。瞳は今度は逆に一方的に殴られた。

「言つてわからない奴には、時には鉄拳制裁も必要なのよ、通！」

エンジェルはそう叫びながら瞳を殴りつけた。

「やめて、やめてよ。兄ちゃん、痛いよ。どうしてこんな事をするの？」

瞳は泣きながらエンジェルを見つめた。

『やめる、天使女！』

閉じ込めたはずの通の意識が出て来て、エンジェルの支配を排除してしまつた。

『通！』

『瞳とのケリは俺がつける』

再び通が表に出て来たのを察知した瞳は、

「兄ちゃん！」

と突進し、その顔面を蹴り上げた。

「ぐおうー。」

通はもんざり打つて仰向けに倒れた。

『通、これ以上やられたら、本当に……』

エンジェルが心中で叫んだ。通は立ち上がった。

「止めよ、兄ちゃん！」

瞳のジャンプしての踵落としが頭頂部に炸裂し、通はまた倒れた。今度は白由を剥いて。

「やつた！ 勝ったわ、兄ちゃんに！」

瞳は嬉しそうにアスタロトを見た。アスタロトはニヤリとし、「つまらんぞ、地球人。今のお前は、私を虚空の彼方まで飛ばした時より遙かに弱い。失望したよ」

瞳はアスタロトに駆け寄った。

「私はこれから地球に降り、地球人を殲滅する。お前はここからその様子を見ているがいい。そしてそれが完了したら、改めて息の根を止めてやるよ」

アスタロトはそういい残すと、瞳と共にテレポートした。

『通！』

エンジェルは呼びかけても答えない通に驚き、転移を解いた。

『通！』

通は肉体も精神もボロボロだった。エンジェルはその通の様子に涙した。

「どうしたらいいの？」

彼女は通を抱きかかえ、ミカエルの城にテレポートした。

第三章 悪ガキ復活！

「あんのバカアツ！」
自宅のベッドでフリーズが解けた美津子が、怒りの雄叫びを上げた。

「お姉ちゃん、何があつたの？」

美津子より女らしいと噂の弟の晶が尋ねる。

「つるさーー！」

美津子はそう怒鳴つてしまつてから、

「あ、ごめん、晶。あんたは悪くないよ
と詫びた。自分に姉が謝るなんて世界が終わるのではないだろうか、
と晶は真剣に心配した。

「何だかんだ言つて、美津子は矢田君が好きなのよね

香は嬉しそうだ。美津子はキッと香を睨み、

「違う！ ハンジエルさんをたぶらかしたのよ、あのチビー！」

「美津子……」

ここまで素直でないと、只呆れるしかない。

「それより、瞳さんが心配です。あの宇宙人に連れ去られてしまつ
たんでしょう？」

久美子がすかさず話を本筋に戻した。晶は久美子を見て、

「一体何があつたの？」

「えーとね、後で話す」

久美子は苦笑いして誤魔化す。晶は自分だけ蚊帳の外なのがわから、ガツカリしたが、

「う、うん」

と素直に応じた。彼は誰にも逆らえない性格なのだ。多分幼稚園児
にも反論できないだろう。

「通の事だから、もう終わつてるんじゃないの？」

信一が楽天的な事を言つ。

「そんな簡単にはいかなかつたよ。……」

そこに突然エンジェルが現れた。

「エ、エンジェルさん！」

晶以外の者が、驚いて叫んだ。彼女はテレポートして来たので、本当に突然の来訪だつた。

「誰？」

エンジェルと晶がお互ひを見て尋ねた。信一が素早く、「こちら、エンジェルさんでスピカ星系の女性。こちら、美津子さんの弟さんで晶君」と一人を紹介した。

「よろしく」

エンジェルはニッコリしたが、晶は怪訝そつな顔で会釈した。

「通がどうかしたんですか？」

信一が代表してエンジェルに尋ねた。エンジェルは途端に沈痛そな顔になり、

「瞳さんにボコボコにされて、今スピカ軍の医療施設で治療中よ」「えええ！？」

今度は晶を含めた全員が驚いた。

「たまにはいい薬よ、あいつには」

美津子は尚も素直ではない。香が、

「美津子、いい加減にしなさいよ。久美子ちゃんに悪いでしょ！」

「ああ、香さん、私は気にしてませんから。美津子さんには、兄は迷惑しかかけていませんし」

久美子が慌ててフォローした。するとエンジェルが、

「私がここに来たのは、みんなが危ないからなのよ。すぐに逃げないと、アスターント達が来るわ」

「ええ！？」

また驚く一同。エンジェルは全員を見て、

「アスターントはまだ地球に降りていないようだけど、奴は地球人を皆殺しにするつもりなのよ」

「……」

さすがの美津子も押し黙り、香と顔を見合わせた。信一は腕組みをして、

「それで、通の容態は？」

「危ないわ。精神的なダメージが大きいの」

久美子が涙ぐみ、

「お兄ちゃん……」

と晶にすがりついた。晶はビックリしたが、何とか久美子を支えた。

「しっかり、久美子ちゃん」

信一は溜息を吐き、

「あいつ、女の子には絶対手を挙げないからな。しかも相手が瞳ちやんだなんて……」

「通……」

美津子は俯いて呟いた。

「みんなに通に呼びかけて欲しいんだ。あいつ、魂の抜け殻みたいでさ」

エンジェルの言葉に美津子はベッドから出た。

「行きましょう、エンジェルさん。時間がないんでしょ？」

「ええ」

彼女達は、エンジェルの力でスピカ軍の医療施設へとテレポートした。

その頃、アスターと瞳は、アメリカ合衆国の首都であるワシントンに降り立っていた。

「ここがこの地球で一番強い国か」

アスターはニヤリとした。

「ここを潰せば、後は思いのままという事だな」

「はい、アスター様」

瞳もニヤリとした。その時、アスターはエンジェル達が五次元に飛んだのを感じた。

「スピカ人め。何か企んでいるな」

それと同時に、彼はかつての本国であるアークツールス軍の追っ手が迫っている事も気づいた。

「サタンめ、とうとうこの私を消すつもりか。しかし、そんな事はさせぬ」

アスタークトは上空を見上げ、

「行くぞ、瞳」

瞳は背中に翼を出した。彼女は只アークツールス人の血を輸血されただけではなさそうだ。

「はい、アスタークト様」

一人は飛翔した。成層圏まで上昇すると、そこにはたくさんのアーチツールス軍の兵士がいた。

「アスタークト、国家反逆罪で逮捕する」

その一団の隊長が言つた。アスタークトはフッと笑い、

「そのような事がお前達如きにできるかな？ 瞳、相手をしてあげなさい」

「はい、アスタークト様」

瞳はそう応じて、凄まじい速さでアーチツールス軍に向かつた。

美津子は、たくさんの方を着けられてベッドで眠つてゐる通を見てまたフリーズしそうだった。

「私……」

酷い事言つてごめん。心の中で泣きながら通に詫びた。

（通が、通が……）

美津子があまりオロオロするので、久美子が逆に冷静になつた。

「美津子さん、しっかりして！ 兄は大丈夫ですよ」

「う、うん」

美津子は力なく微笑み、そばにあつたソファに崩れるように座つた。

「ドクター、どうなんですか？」

エンジエールが医者らしきスピカ人に尋ねた。

「何とも言えんな。肉体的には回復しているが、精神的にはまだ危険域だからな」

「そうですか」

エンジエールは久美子達に目配せして、通が眠っている治療室に入つた。信一、香が続き、久美子が美津子を抱きかかえるようにして入つた。

「お兄ちゃん！」

久美子が涙声で叫ぶ。しかし、兄の反応はない。信一が、「通、起きろよ。冗談はもういいからさ」と言つたが、通はピクリともしない。

「矢田君、起きて、お願ひ」

香の呼びかけにも反応はない。エンジエールは悲しくて見ていられなくなつた。

「起きてよ、通……」

美津子がフラフラしながら通に近づく。

「美津子さん！」

倒れかけた美津子を久美子が支えた。

「お願ひよ。このままじゃ、私、ホントに嫌よ。自分が許せなくなる……。起きて、お願ひ……」

美津子は泣いていた。顔が涙でグシャグシャだ。

「起きてよー！」

美津子は通にすがりついた。それでも通は目覚めなかつた。

「通……」

美津子は通の顔を右手で撫でた。久美子も堪え切れなくなつて泣き出した。香も信一にすがつて泣いている。晶まで涙ぐんでいる。「こんなにみんなが心配してるのよ！ 起きなさいよー！」

遂に美津子は悲しみを通り越して怒り出した。久美子達は呆気に取られた。エンジエールも驚いて美津子を見た。

「起きろって言つてるのがわからないのか、このチビイツー！」

美津子がそう叫んだ時、ドクンと心電図が大きく反応した。

「何だと、このバスがあああ！」

通が全ての管を引きちぎって起き上がった。

「通！」

美津子はまた泣き出し、彼に抱きついた。信一達は畠然としている。

「わわ、美津子、どうしたんだよーー？」

「良かったあ、このバカア……」

美津子は通に抱きついたまま泣いた。

「お兄ちゃんー！」

「通！」

「矢田君！」

「矢田さんー！」

「通！」

皆が、この悪ガキの復活を喜んだ。

「話にならん脆弱さだな」

瞳はほんの三分で、アークツールス軍の兵士を消し飛ばしてしまつたのだ。

「ではもう一度地球へ行こーつか

「はい、アスタロト様」

瞳が答え、地上に降下しようとした時である。

「そうはいかねえぞ、カマヤロウー！」

と声がした。

「何！？ 誰だ？」

アスタロトはまるで時代劇の悪役のような顔で周囲を見回した。

「その声は！？」

瞳の形相が険しくなる。

「正義の味方、矢田通様だあー！」

キランと輝き、彼方から飛翔して来るエンジェルが転移した通だ

つた。

「バカめ、またやられに来たか。愚かな地球人だ」
アスター口トは鼻で笑つた。

「さつきのような訳にはいかねえぞ、カマヤロウ！」
通は瞳を無視し、一直線にアスター口トに向かい、彼の顔面を蹴り飛ばした。

「ぐわおおお！」

アスター口トは不意を突かれてこれをまともに食らい、地上に落下して行く。

「アスター口ト様！」

瞳が慌てて救出に向かう。

「あんたは邪魔！」

通と入れ替つたエンジエルが、容赦なく瞳を殴り飛ばす。

「きやああ！」

瞳もアスター口トを追うように落下した。

「同じ過ちは繰り返さないのが、喧嘩屋の鉄則なんだよ！」
通がアスター口ト達を追いながら言つた。

その頃、スピカ軍の医療施設では、今度は美津子が倒れていた。

「しつかり、美津子！」

香が声をかける。久美子と晶が心配そうに見守つている。
「だからいない方がいいって言つたのに」

彼女は信一と顔を見合せた。

「一日に一度も、通が他の女性とキスするのを見たら、ショックだ
ろうからね」
と信一は肩を竦めた。

エンジェルが転移した通は、見た目は美少女だが、中身は喧嘩バ力の権化だ。

「おらあ、もう一発！」

落下するアスタークトに追いつき、また蹴りを見舞つた。

「グホア！」

アスタークトは口から血を吐き、更に落下する。

『そ、うか。アスタークトの奴、地球上に長くい過ぎて、身体が弱つてるのはよ。チャンスよ、通！』

エンジェルが囁く。通（身体はエンジェル）はニヤリとして、「よおおし、一気に止めだ！」

「させない！」

間に瞳が割り込み、

「通兄ちゃん、アスタークト様をいじめないでよ、瞳泣いちゃうから！」

「え？」

通は学習能力が欠如している。エンジェルはそう思った。さつきまで振り切れそくながら、上昇していた通の戦闘計数が、急速に低下したのだ。

「ぐわつ！」

瞳の右ストレートが顔面に炸裂し、通は鼻血を吹き出しながら落下した。

「アスタークト様！」

瞳がアスタークトに抱きつく。そして落下を止めた。

「こらあ、瞳、何するんだああ！？」

鼻血を止めながら、通が戻つて來た。

「アスタークト様、私達も転移をしましょ！」

「う、うむ」

瞳の言葉を聞き、通は仰天した。

『おい、瞳の奴、今、転移って言わなかつたか?』

『言つたわね。やばいわよ、通。もつと強くなつちやうわ、あいつ

『『』

エンジュエルが答えると、通は、

『んなこたあどうでもいい! 瞳とあのカマヤロウが、キスするん
だぞ!』

『ああ、そうね』

エンジュエルはあまり何も感じていない。

『ふざけるなああ!』

通は一人の転移を阻もうと突進した。

『危ない!』

瞳はアスター口トを抱え、逃げ出した。

『瞳、考え方直せ、そいつはカマだぞ!』

『違うわ。アスター口ト様は、紳士よ。兄ちゃんと違つてね!』

瞳はすっかりアスター口トの虜なのだ。何を言つても無駄である。

『危ない!』

瞳はアスター口トを抱きかかえたまま、テレポートした。

『あ、逃げやがつた!』

通は慌ててテレポートした。

『う、うん……』

氣を失っていた美津子は、スピカ軍の医療施設のベッドで目を覚ました。

『お姉ちゃん、大丈夫?』

再び弟の晶が尋ねる。

『あ、うん……』

美津子は通とエンジュエルがキスしているのを見たのを思い出しき

赤面した。

「美津子って、ホントに意地つ張りね」

香が呆れ顔で言つ。美津子はムツとして香を睨み、

「何でよ！？」

「だつて、矢田君とエンジールさんがキスしたのを見て氣を失うくらい矢田君の事が好きなくせに、好きじゃないとか言い張るんだもの」

香の真つ直ぐな主張に、美津子はまた氣を失いそうだったが、「ち、違うわよ！ 誰だつて、人がキスしてるの見たら、驚くでしょ！」

「でも、私も久美子ちゃんも晶君も倒れなかつたわよ」

香がそう言うと、

「あの、僕は？」

と信一が口を挟む。香はクスッと笑つて、

「だつて信ちゃんは、たくさんキスしてるから慣れてるでしょ？」

「え？」

信一はそれを聞いてビクッとしたが、ちょっと天然な香は気づいていない。むしろその発言で、美津子と久美子が赤くなつた。晶は意味がわからないのか、ポカンとしている。

「とにかく、矢田君が帰つたら、素直に自分の気持ち伝えなさいよ」香が諭すように言つたが、美津子はブイツとソッポを向いて、

「私は元々素直よ！」

と言い放つた。

その頃通達は迷子になつっていた。

『もう、何も考えずにテレポートするから、現在地がわからないでしょ！』

エンジールはプリプリして言つた。

『わ、わりい』

さすがに通も焦つていた。

『取り敢えず、我が軍の本部に戻るわよ』
エンジェルが身体を支配し、テレポートした。

瞳とアスターントは、アスターントの城に戻っていた。

「地球人め……」

地球の大気成分は、アーチツールス人にはかなりきついのだ。アスターントは限界を超えてしまい、衰弱しているようだ。

「アスターント様」

瞳が潤んだ目でアスターントを見ている。

「瞳、さあ、転移しよう。お前と一つになれば、もつと強くなれる」「はい、アスターント様」

アスターントと瞳は見つめ合った。転移とは、男女の恋愛関係とは違い、あくまで力を一つにする方法である。よって、何もその方法は「キス」に限られたものではない事がわかつて来ている。

「瞳……」

しかし、エンジェルもアスターントも、下心があるから「キス」を選ぶのだ。しかも、瞳の場合、アスターントによつて暗示をかけられており、彼女自身もアスターントとの「キス」による転移を望んでいた。

「アスターント様」

二人は口づけし、転移が始まった。アスターントの身体が輝き、瞳に溶け込む。そして瞳が輝き、やがて二人は一つになつた。

「わはははは！」

身体は瞳、心はアスターント。通にとつては最悪の形態になつた。「私は完全に回復し、しかも瞳の力も手に入れた。もはや、サタンすら恐れる必要はない！」

アスターントは軽く気を解放した。すると、城の壁が吹き飛んだ。

「想像以上だ。私は最強になつた！」

アスターントは瞳に下心はあつたが、恋愛感情はない。只彼女を利^用して強くなりたかつただけだ。

「さてと。手始めにスピカ人共を血祭りにあげるか」「瞳の顔で、アスタロトは狡猾な笑みを浮かべた。

通達は、スピカ軍の医療施設に到着していた。

「転移、解くよ」

エンジェルがそう言いつと、

「待つて！」

と香が止めた。

「どうして、香ちゃん？」

エンジェルが不思議に思つて尋ねた。

「だつて、今解くと、また出る時にキスするんでしょう？」

「え、ええ、まあ……」

エンジェルは、香達が、転移するのにキスする必要はない事を知つてゐるのではないかと思い、ギクッとした。

（でも、違うみたい）

彼女は、香達が心配している事が別にあるのに気づいて、ホッとしました。

「また矢田君がキスすると、倒れる人が約一名いるから」

香はチラッと美津子を見た。すると美津子は、

「何よ、別に私は関係ないわよ」

「無理しない方がいいわよ、美津子」

香は嬉しそうに忠告する。

「無理なんかしてないわよ」

「そう？」

それを聞いていた通が痺れを切らし、

「ああ、面倒くせえ事言つてんじやねえよー。」

と怒鳴り、転移を解いてしまった。

「あら」

強制的に通から分離されたエンジェルは驚いた。

「こんな事もできるんだ」

すると美津子は、

「ほーら、ほらんなさい。通はね、エンジェルさんとキスしたいから、転移を解いたのよ」

と勝ち誇ったように言つた。するとその言葉にカチンと来た通が、「だつたら悪いか？」

と開き直る。その言葉に今度はエンジェルがドキッとした。
(やだア、通つてば。勘違いしちゃうじゃないの)

「悪くないわよ、別に。好きなだけキスすればいいじゃないの、このチビ！」

「何だと、このバス！」

二人の罵り合いはしばらく続いたが、警報によつて止まつた。

「何だ？」

通がエンジェルを見た。

「未確認飛行物体が接近中らしいわ。しかも、サタン級のね」「何イツ！？」

通達は仰天した。エンジェルは近くにあつた通信機で連絡をとり、

「どうやら、貴方のご親戚の方のようよ、通」「瞳か！？」

通は駆け出した。

「待ちなさいよ、通！」

エンジェルが慌てて追つた。

「どうするの、美津子？」

香が尋ねた。美津子は、

「知らないわよ」

と顔を背ける。香は信一と顔を見合せた。

第五章 一縷の望み

通とエンジェルは、医療施設の外に出ていた。

「天使女、その、あの、何だ、行くぞ！」

周囲に誰もいないのを確かめ、通は顔を真っ赤にしてエンジェルを見た。そして目を瞑る。

「……」

エンジェルは、美津子が一人のキスを見て失神した事を思い、躊躇した。

（ホントは、キスしなくても転移できるって知つたら、アタシは通に確実に殺されるわね）

真実を話すのはあまりにも危険度が大きいので、エンジェルは言うのをやめにした。

「行くよ、通」

「お、おう」

それでもエンジェルは通が好きなのだ。絶対に通と美津子の間に入ることなどできないとわかつているのに、彼の事を諦められないのである。

（これで最後にしよう。何としても、アスター口をやつづける）
そんな思いもあつたせいか、エンジェルのキスは今まで一番濃厚だった。

「フグフグ！」

通がもがいた。しかしエンジェルは構わずに続け、転移した。

「よし！」

通は転移が完了したのを確認すると、気合一発、飛翔した。今まで経験した喧嘩の、どれよりも壮絶なレベルの戦いを始めるために。

「通……」

香達が止めるのも聞かず、美津子は通を追いかけて来たが、すでに一人は飛び立つた後だった。

(私、素直になるから……。だから、生きて帰つて、通。そして、必ず、瞳ちゃんを助けてよ)

美津子は目を潤ませて祈つた。

「さすがにあの状況の美津子をからかう事はできないわね」香が言つ。信一が、

「いつもあのくらい素直だといいんだけど、美津子さんも「辛いよね。エンジェルさんの事だけじゃなくて、相手は矢田君の従妹なんでしょう？」

香は信一を見上げた。

「そう。しかも、ある意味恋敵だしね」

信一はいつになく真剣な表情で答えた。

「え？」

香は驚いた。それは知らなかつたのだ。

「瞳さんは、ずっと兄の事が好きだつたんですね。だから……」

瞳の第一被害者の久美子が言つた。晶も驚いて久美子を見ている。

「そうなんだ。美津子は知つてゐる、それを？」

香は久美子を見た。久美子も香を見て、

「ええ。知つてます」

そう、美津子は瞳の第一の被害者だから。

「晶君は男の子だつたから、瞳さんには可愛がられてたのよね」久美子の何気ない一言に、晶はビクッとした。

(何か、僕だけ苛められていなくて、申し訳ない氣がしてしまつ……)

被害妄想な男である。

「む？」

瞳の姿をしているアスタークトは、前方から接近して来る者に気づいた。

「来たか、地球人め。もはやお前如きでは相手にならんぞ」アスタークトはニヤリとした。

「私の相手はミカエル只一人。他は邪魔なだけだ
そして通達もアスター口トを視認していた。

「瞳か？ あのカマヤロウは……？」

通は周囲を見回した。するとエンジェルが、

『アスター口トは瞳ちゃんに転移してるよ。あいつ、瞳ちゃんを表に
出して、あんたと戦うつもりだよ』

「何だと！？ どこまで卑怯なヤロウなんだ、あのカマは！」

通は激怒し、加速した。

「一瞬で終わりにするぞ、天使女！」

『そう願いたいけどね』

エンジェルは、瞳の姿をしたアスター口トから、ミカエルにも匹敵
しそうなパワーを感じていた。

（勝てるのかな、アタシ達は？）

通の強さは知っている。しかし、アスター口トは単体でも以前より
強くなっていた。それに加えて、通と同じく超人化した瞳にアスター
口トが転移したのだ。そのレベルアップは想像するだけで恐ろしか
った。

「愚か者め。死にに来たか？」

アスター口トは通達に哀れみすら感じられるほど、自分達の勝利を
確信していた。

「何！？」

通はそんな余裕たっぷりのアスター口トの隙を突き、凄まじい勢いで
間合いを詰めた。アスター口トは一瞬対処に遅れた。

「おらああ！」

エンジェルが意志を支配し、瞳の顔を容赦なく殴った。

「ぐおつー！」

アスター口トは後ろに飛ばされた。

「おのれ！」

しかしダメージはほとんどない。その上、高速で傷が治癒する。

「何、あれ？」

エンジェルは、アスタロト達の転移が、通常言われているものと違つのに気づいた。

「やばいかもよ、通」

彼女は額に汗を滲ませた。

その頃、スピカ軍の総司令部では、ミカエル将軍がアスタロトの分析を急がせていた。

「アスタロトの転移は、通常のものとは違うようだ。何がどう違うのか、奴の放つエネルギーを解析し、エンジェル達の支援をする」ミカエルはアスタロトの存在に脅威を感じていた。
(場合によつては、この私が出なければならんな)
彼は右の拳をギュッと握り締めた。

「今度はこちらから行くぞ、地球人！」

アスタロトは反撃を開始した。

「うわあ！」

いきなりエンジェルから意志を返された通は目の前に迫つて来る瞳を見て後退りした。

「死ね！」

瞳の顔で、瞳の声で、アスタロトが襲い掛かつて来る。わかつていても、通には反撃ができない。

「く！」

防御にも限界がある。

『通、反撃してよ！ 防御ばかりじゃ、アタシの身体が保たないよ』
エンジェルが泣き言を言う。でもそれは真実だ。彼女もこのまま身体を破壊されたくない。

「くそ！」

通は瞳から離れ、逃げ出した。

「待て、地球人！」

瞳の姿のアスタロトが、エンジェルの姿の通を追う。

『通…』

エンジェルが叫ぶ。通は、

「わかつてゐよ… でも、いくら中身はカマヤロウでも、姿は瞳だ。無理だよ、殴れねえ。交代してくれ」

『わかつたよ』

エンジェルは通の意識を押しのけ、肉体を支配した。

「おりあ…」

キックが瞳の顔面を襲う。

「きやあああ！」

瞳の声でアスターントが悲鳴を上げる。

『やめろお、天使女アツ…』

通はわかつていながらも、止めに入ろうとする。

「ダメだよ、通。このままずっとこんな事を続けられないって…」

通は強制的にエンジェルと入れ替わった。

「わかつてゐよ、わかつてるけど…」

誰よりももどかしく思つてゐるのは通自身なのだ。

「やい、天使女、あのカマヤロウと瞳を引き離す方法はねえのかよ？」

『そんな方法があつたら、実践してゐわよ…』

エンジェルも苛ついていた。

（アスターントめ。どこまでも卑怯な奴……）

エンジェルはここまで通を苦悩させていたアスターントの狡猾さに

腹が立つた。

「通兄ちゃん、アスターント様のために死んで…」

瞳がニヤリとして通に向かつて来る。

「瞳、そんな奴と一緒になるな！ お前は、お前は…」

通はそれでも瞳の攻撃を防御するだけで、反撃をしなかつた。

「ぐあああつ…」

通はまともに正拳を食らい、吹つ飛ばされてしまった。

（でも妙だ。もし、アスターントが、計算上の力をそのまま出してい

るのなら、私達がここまで耐えられるはずがない。どうこう事？）
エンジェルは、その事が気にかかっていた。

ミカエルの命令で解析を進めていた技師達が、遂にその謎を解いた。

「判明しました。エネルギーを解析したところ、三回の輸血をしたものとの結果が得られました」

「三回？」

ミカエルは技師の一人を見た。技師はミカエルを見て、「はい。まず最初にアスタロトの血を地球人の少女に輸血し、反応が出るのを待つてアスタロトに少女の血を輸血します」「何と……。そのような方法、危険ではないのか？」

ミカエルは、アスタロトの執念を感じた。

「はい。場合によつては、拒絶反応で死に至る可能性もあります。その危険性を知りながら、更にアスタロトはその血をもう一度少女に輸血したのです」

ミカエルの右手が震えた。

「何という事を！ 何という事をしたのだ、あの男は！？」

ミカエルはモニターに映る通達の戦いを見た。

「私が出る。もはやこの戦いは、正当なものではない」「しかし、閣下……」

技師達は驚愕して意見した。しかしミカエルは、

「すぐにサタンにも救援を要請しろ。アスタロトはアークツールズ軍の敵でもあるはずだからな」

「は、はい」

彼等はミカエルの迫力に気圧されて、返事をした。

「エンジェル、撤退しろ。そいつはすでに化け物だ。私が戦う」

ミカエルはエンジェルに呼びかけた。

「それはやめてくれ、ミカエルさん」

通の声が答えた。ミカエルはハツとしたが、

「通か？ もうその少女は、お前の知っている地球人ではない。アスタークトの道具となってしまったのだ。私が倒す。お前は撤退しろ」
「やだね。この喧嘩は俺が売られたものだ。相手が誰だろ？ 俺がケリを着ける。邪魔はしないでくれ」

「……」

ミカエルには、通の辛さ、悲しみ、怒り、決意がよくわかった。
「了解した。但し、少しでもお前が危ない時は、出でなれ」

「ああ」

ミカエルはフツと笑った。

「どこまでも計測不能な男だ」

エンジェルは呆れていた。ミカエルの言葉をはねつけ、まだ戦おうとするこの喧嘩バカは、一体何を考えているのかわからなくなつた。

（でも、一つ気になつてゐる事がある）

エンジェルはそれを通に伝える事にした。

『アスタークトの強さは、こんなものじゃないはずなのよ。何故か、力を出し切れていないの』

「どういう事だ？」

通は攻撃をかわしながら尋ねた。

『これは可能性の問題なんだけど、もしかして、瞳ちゃんの意志が、アスタークトの力を抑えているんじゃないかしら？』

「ああ？ わかりやすく説明しろ」

通は苛ついて怒鳴つた。

『つまり、瞳ちゃんは貴方と戦いたくないと思つてゐるかも、といふ事よ！』

エンジェルの言葉に、通はハツとした。

『瞳はまた、完全にカマヤロウに支配されてゐる訳じゃねえつて事か？』

『その可能性があるつてだけよ。そう断言するにはデータが少な過ぎ

『わるき

「そんな理屈はどうでもいい！ その一点に賭けて、瞳を助けて、カマヤロウをぶっ飛ばす！」

通は瞳に突進した。

「何！？」

いきなり向かつて来た通に驚き、アスターは後退した。
(何だ？ こいつ、急に戦闘計数が上昇したぞ？)

アスターは前回、不可解な通のパワーアップで敗北しているので、そのトラウマが甦りかけた。

「こいつ、まだ何かあるのか？」

アスターは警戒し、通から離れた。

「俺はできるだけ時間を稼ぐ。その間に、いい方法を考える、天使

女

『えーっ？ 一緒に考えてよ、通』

エンジェルが泣き言を言つと、通はニヤッとして、

「俺は考えるのは苦手だ。任せた」
と言い放つた。

『全く、勝手なんだから。わかった、何とか考えてみるよ
頼んだぜ、天使女』

通はアスターが距離を取ってくれた事に感謝していた。
(待つてろよ、瞳。何としても、お前は助けるからな)

第六章 通怒りの一撃！

矢田通は、従妹である矢田瞳の姿をした強敵アスターントと睨み合つていた。

「どうした、地球人？ 怖氣づいたか？」

アスターントが挑発する。いつもの通なら、そんな事を言われれば絶対に突っ込んでいるはずだが、今回はそれはしない。いや、できないのだ。

（畜生……。もし、本氣でぶん殴れば、奴を倒せるかも知れねえ。でも、そんな事をしたら、瞳が……）

彼は瞳を傷つけたくない。そして何より、女の子を殴りたくないのだ。

「本当に怖氣づいてしまったようだな。情けない。もはや、お前は私と戦う資格がない。ミカエルを出せ」

アスターントはニヤリとして言い放つた。

『あいつ、調子に乗つて！』

エンジェルがいきり立つ。

「天使女、あんな挑発に乗せられるな。熱くなるんじゃねえよ。サッサといい手を考えろ」

あんたにだけはそんな事言われたくない、とエンジェルは思つた。

「何だ？ ミカエルも怖氣づいたのか？」

アスターントはどんどん調子に乗つて來た。

『あのバカがあ！』

エンジェルが沸騰寸前だ。しかし、通は、

「だから熱くなるなって言つてんだろ、天使女！ そんな暇あるなら、考えろ」

『わかつたよ』

エンジェルも、乗せられ過ぎの自分を恥じた。

「まう。ここまで言つても動かぬか。ならば、一いつから行くぞ、

「地球人！」

アスタークトは狡猾な笑みを浮かべ、通に向かつて来た。

「死ね！」

通はアスタークトの正拳をかわした。続けざまに回し蹴りが襲いかかる。

「くつ！」

それも紙一重でかわす。

「逃げるだけか、地球人！？ 面白くないぞ」

アスタークトはそう言いながら、攻撃を続けた。

「う！」

蹴りが顔を掠めた。エンジェルの美しい顔がスパッと切れ、血が流れる。

『わああん！ 通、顔だけは勘弁してよお』

エンジェルの泣きが入った。

「わかつたよ」

通は顔を両手でガードし、瞳の姿のアスタークトを睨む。

「そんな事をしても、無駄だああ！」

アスタークトの猛攻が始まった。目にも留まらぬラッシュ攻撃である。

「うおお！」

通はそれを全力でガードし、かわし続けた。

「貴様、それでも戦わぬか！？」

アスタークトの怒号が飛ぶ。だが、通は反撃しない。

「おりやああ！」

次は蹴り。触れただけで粉微塵になりそうな凄まじさである。

「くう！」

通はたまらなくなり、下がった。

「逃がさぬぞ、地球人！」

瞳の顔がだんだん可愛さを失つて行く。

「おい、天使女、瞳の顔が、カマヤロウに似て來たぞ」

通がそれに気づいた。

『同化が始まってるのかもよ

「どうか?」

通はキヨトンとした。

『アスタロトの奴、何か特殊な方法で転移してゐみたいなのよ。でなければ、普通は姿がアスタロトで、中身が瞳ちゃんになるはずよ』

「そうなのか

通は凶悪な顔つきの瞳を見た。

『このまま転移を続けていると、瞳ちゃんがアスタロトに同化され、彼女の存在が消されてしまつかも知れないわよ』

「何だつて!?

通は仰天した。

「冗談じゃねえ! 瞳がカマヤロウになるつて事は、カマヤロウが俺のいとこになるつて事か!?

『いや、そこを心配するんじゃなくてね……』

エンジェルは呆れてしまつた。

「くそ!」

通は逃げるのをやめ、アスタロトを睨んだ。

「許さねえ! そんな事は、絶対にさせねえぞ、カマヤロウ!..」

アスタロトは、急に止まつた通を見て警戒し、

「何だ? 何をするつもりだ?」

と眉をひそめた。

「ダメだ、そうだとしても、無理だ!..」

通はそれでも攻撃する事ができない。アスタロトは通の戦闘計数が低下するのを感じ、

「瞳よ、あいつの強さを引き出す方法はないのか? このまま勝つても、つまらんからな」

アスタロトは、前回自分を虚空の果てまで吹つ飛ばした時の通を倒したいのだ。

『アスタロト様、一つだけ方法があります』

瞳が答えた。アスターントはそれを知り、

「そうか。そんな事で良かつたのか。ならば話は簡単だ」と呟き、ニヤリとした。

その頃、美津子達は、医療施設の中のスクリーンで、通達の戦いを見ていた。

「どうしたんだろう？ 一人共動がなくなつたわ」「香が信一に囁く。信一はスクリーンを見たままで、「お互い警戒してんんだろうね。理由はそれぞれ違うだろ？」「美津子は目を潤ませてスクリーンを見ていた。

「通……」

そんな美津子を、心配そうに見ている久美子と晶。久美子は晶と手を握り合っていた。晶はそのせいでドキドキしている。姉の事も心配だが、今の自分の状況も心配だった。

ミカエルも、司令部のスクリーンで戦いを見ていた。
「アスターントめ。何を企む？」
彼は腕を組んで眉を寄せた。

アスターントは通をせせら笑い、

「何だ、空元氣か、地球人。情けないな」

「何だと、こらあ！？」

通が挑発に乗せられそうになる。

『ほら通、ダメでしょ！』

「ああ、そうだつた

通はエンジェルに窘められてハツと我に返る。

「ほつ。どこまで我慢できるかな？ お前は堪え性がないからな

「……」

通は何も言い返さない。アスターントはフツと笑い、

「腰抜けか、やはり。倒すまでもない。消えろ、チビ」「

と言つた。

「げ！」

スクリーンで見ていた信一と香、久美子がビクッとした。美津子は気づいていない。そして、鈍感な晶も。

「知らないぞ、もう」

信一はスクリーンに背を向けた。香も両手で顔を隠す。

「瞳ちゃんが可哀相」

「お兄ちゃん……」

久美子もスクリーンから目を逸らせた。

「何なのよ、みんなして？」

美津子と晶の姉弟は、全く意味がわからないままだった。

「今、何て言つた？」

通の戦闘計数が跳ね上がる。アスタロトは計測器がたちまち振り切れたので、狂喜した。

「おおおお！ それだ、それだ！ それこそあの時と同じ… あの時のお前だ！ そのお前を倒してこそ、この戦いに意味があるので！」

アスタロトはこれから起らる事にまるで気づく事なく、絶叫していた。

「今何て言つたって訊いてるんだよおお…！」
通が壮絶な勢いでアスタロトに向かつた。

「ぐおおおお！」

瞳の姿なのに、通は容赦なく殴つた。

「ブへ、ゲホ……」

アスタロトは反撃どころか、防衛すらできない。

「訊いてる事に答える、カマヤロウ！」

いや、そんな状態では、答える事なんてできないし。エンジェルはそう思い、少しだけアスタロトを哀れんだ。そして、前回突然通

が反撃し、勝利した理由を知った。

『つまり、NGワードを言つてしまつた訳ね、アスタロトが』

「オラオラオラ！」

通の猛攻は続く。瞳の顔はボコボコになつて行つた。

「答えるーつ、カマヤロウがああ！」

渾身の一撃が決まつた。

「うおおおおおー！」

するとどうした事か、瞳の身体からアスタロトが分離し、そのまま遙か彼方へと飛んで行つてしまつた。

『どういう事？』

エンジェルは呆然としてそれを見ていた。途端に通の意識が飛んだ。

「ああー！」

エンジェルは慌てて入れ替り、落下し始めた瞳をキャッチした。

「大丈夫、瞳ちゃん？」

無事なのか心配で、声をかける。

「平気です……。通兄ちゃんは、あいつだけ殴つていたんですよ」

瞳が答える。確かに彼女の顔は全く傷ついていなかつた。

（そんな事つてあるのかな？）

エンジェルは頭が混乱しそうだつた。

こうしてまた、アスタロトは矢田通に敗れ、虚空の果てに消えたのである。

ペローグ 永遠によなら

アスターの生体反応はまだ確認できていた。死んではいないらしい。

「今度こそ戻っては来られまい。いや、もう戻ったとしても、通と戦おうとは思わんだろ？」

司令部のVIPルームで、ミカエルが言った。彼は通達を司令部を救つてくれたお礼に招待したのだ。

「そうだといいけどね。ホントにしつこいカマヤロウだからね」「サタンも警戒を続けると言つて来ている。仮に戻つて来ても、今度は彼がアスターを許さんさ」

ミカエルはフツと笑つて言つた。

「ミカエル様つて、素敵ね、通兄ちゃん」

瞳が小声で言つ。通は呆れて、

「お前のその軽はずみな性格が、みんなに迷惑かけた事を反省しろよ、瞳」

「はーー」

大好きな通兄ちゃんに窘められ、瞳はスゴスゴと引き下がつた。

「では、我々は準備があるので失礼する」

ミカエルは部屋を立ち去りながら、

「エンジェル、ゆつくり別れを惜しみなさい」

「はい」

ミカエルはそのままVIPルームを出て行つた。

「今、どういう意味？」

不思議に思つた信一が尋ねる。エンジェルは苦笑いして、
「アタシ達、地球侵略を諦めたの」

「え？」

美津子と香は顔を見合させた。

「そう言えば、エンジェルさんて、侵略者なんだっけ」

改めてギクッとする。

「地球の住環境が、私達に合わないんだ。最初は改善しようと思つたんだけど、それには何百年もかかるらしいし」

エンジェルの言葉に晶が反応した。

「地球人類が、地球を汚染してしまつたから、あなた方は侵略を諦める、という皮肉な結果になつたのですね」

「そうね」

エンジェルは寂しそうに言つた。美津子が通に、

「あんた、一緒に行きたいんでしょ？」

「何でだよ？」

通はそう言つてしまつてから、しまつたと氣づいてエンジェルを見た。

「いいよ、氣を使わなくとも。アタシはモテるんだから。あんただけが男じゃないし」

「あのなあ……」

あまりにも身もフタもないエンジェルの言い方に通はムッとした。

「アハハ、ふられたあ！」

美津子が笑いながら言つたので、

「う、うるせえよ、ブス！」

「何よ、チビ！」

エンジェルはギクッとしたが、香達は何も反応しない。

「あれ？」

通も切れた様子はない。

（何だ、そういう事か）

やつぱり美津子には勝てない。エンジェルはそれを改めて感じた。

「矢田君で、美津子に何言われても怒らないのね」

香が面白がつて言つた。

「な、何よ、香。どういう意味？」

美津子は未だに気づいていないようだ。通もムッとして香を見た。

「何だよ、香？ 何の事だよ？ 僕は年中このブスに怒つてるぞ」

「何よ、チビ！ もうこっぺん言ひて」らんなさいよー。」

美津子がまた「ゾゴワード」を言つが、通は切れない。だから美津子は気づかないのか、とエンジェルは思った。

「ああ、何度も言つてやるよ、ブス。これで満足か、ブス！」「あんたねえ！」

美津子が通に掴みかかるのを香と信一が止める。

「お兄ちゃん、いい加減にしてよー！」

久美子が通を窘める。瞳は呆れてそれを見ていた。

「勝てないなあ、美津子姉には……」

彼女はエンジェルを見て、

「そう思つでしょ、貴女も？」

と同意を求めた。エンジェルは肩を竦めて、

「そうね」

そしていよいよ地球に降りる時が来た。通達は転送装置のある場所に移動していた。

「瞳ちゃんは、検査の結果、異常は見られないわ。今後も何も起らないと思うけど。もし、心配なら連絡頂戴」

エンジェルがそう言つと、

「お前なあ、隣町に引っ越すんじゃねえんだぞ？ ビツヒツて連絡するんだよ？」

通がすかさず突つ込む。しかしエンジェルは、

「アタシ達はどんなに遠く離れても、会話できるのよ、通」と通の耳元で囁いた。途端に通は真つ赤になった。

「貴方とアタシは血を分け合つたの。だから、いつも一緒よ」

エンジェルの言葉に、ほんの少しだけ美津子がギクッとした。

「でも心配しないで、美津子ちゃん。通を連れて行つたりしないか

ら

「べ、別に私は……」

美津子は赤くなりながらも必死に否定した。

「こいつは関係ねえだろ、天使女！」

通も赤くなつた。

「じゃ、地球上に送るね」

エンジェルは急に真顔になり、通から離れた。

「多分、永遠にさよならね。みんな、元氣でね」

「そんな事言わないで、たまには遊びに来て下さい、エンジェルさん」

信一がいつもの乗りで言う。エンジェルは苦笑いして、

「ありがとう、信一君」

いつの間にか、美津子、香、久美子、瞳が涙ぐんでいる。

「みんな、そんな顔しないでよ。笑つて別れましょ？ ね？」

エンジェルはそう言いながらも目を潤ませている。

「元氣でな、エンジェル」

通が言つた。エンジェルは二口ツとして、

「やつと名前で呼んでくれたね、通。ありがとう」

「お、お！」

通は照れて俯いた。

「元氣でね、エンジェルさん」

美津子達が言つた。

「みんなもね」

エンジェルは転送装置のレバーに手をかける。

「さよなら！」

レバーが下がり、通達を光が包む。

「じゃあな、エンジェル」

もう一度通が言つた。エンジェルはその声を聞くと、我慢できなくなり、泣き出した。

「大好きだよ、通！」

その声は通に聞こえたかどうか、エンジェルにはわからなかつた。通達は光と共に消えていたからである。

そして通達は、自分達の住む町に戻った。

「帰れたな」

通が呟く。

「そうだね」

信一が答える。

「あのね、通兄ちゃん」

いきなり瞳が話し出す。

「何だよ、瞳？」

ビクツとしながらも、通は瞳を見た。美津子達も瞳を見る。

「私、家出して來たの。だから、兄ちゃんの家に住ませてくれない

？」

「な、何一つ！？」

これには久美子も驚いていた。

「そんな、家出だなんて。瞳さん、どうしたんですか？」

「ちょっとお父さんと喧嘩しちゃってさ！」

「そのくらいの事で家出するなー！」

通が怒ると、

「兄ちゃんだつて、昔、漫画捨てられただけで家出したじゃないの。言われたくないわ」

瞳が逆襲した。美津子と香は顔を見合わせて笑つた。

「う、うるせえよ！ そんな昔の事、持ち出すんじゃないねえー！」

通は赤くなつて怒つた。

「それにさ」

瞳はいたずらっぽく笑つて、

「久しぶりに兄ちゃんと一緒にお風呂入りたいし」

通はその発言に崩壊しそうだった。久美子も呆れている。美津子と香は目が点になつてしまつた。

「アハハ、ウソウソ！ もういくらい何でも、一緒にには入れないよ」

瞳はゲラゲラ笑つて通を指差す。

「お前なあ……」

通は脱力してしまった。

「兄ちゃん」

瞳が真顔で言った。

「何だよ？」

それでも通は何かあると思つて警戒してくる。

「助けてくれてありがとう。兄ちゃんなら、必ず勝つって思つてた

よ

「あ、ああ」

違う話か、と安心する通。瞳はまたニヤッとして、

「でも、私と兄ちゃんの子供なら、世界征服でもあると想わない？」

「何ーっ！？」

しばしば瞳にむけられた通だった。

その男、不器用につき

彼の名は大山大。おおやまと私立の名門である杉野森学園中等部の二年だ。

身長一メートル超、体重百キロ超。すでに柔道界や相撲界、更には格闘技界からオファーがあるほどの体格だ。

しかし、彼はそのような道に進むつもりはない。

「勿体ないよ、大山君」

進路指導の先生が言う。

「自分は不器用ですから」

大山は、ある映画俳優の「決め台詞」を真似て拒否した。

彼には、たつた一つだけ願いがある。自分の尊敬する高等部二年の矢田通のそばにいる事。

矢田通とは、その名を関東中に轟かせている喧嘩バカである。宇宙人とも戦つて一度勝つたという噂だ。大山の憧れの先輩なのだ。

しかし、大山の本心は、その矢田通でさえ知らない。矢田通には、全く顔が似ていない妹がいる。彼女の名は久美子。中等部は言うに及ばず、高等部、近隣の中高に至るまで、その名を知られた美少女である。大山が、本当にそばにいたいと思っているのは、通ではなく、久美子なのだ。しかし彼はそれを誰にも言っていない。当然の事ながら、久美子もそれを知らない。

「大山だ！」

付近の中学生のワル共は、大山の強さを知っているため、彼を見かけただけで逃げ出す。高校のワル共も、大山の強さと、彼が矢田通と親しいことを知っているため、決して絡んで来ない。むしろこびる連中すらいる。大山はそういう人間が一番嫌いなので、歯牙にもかけないが。

「大山君」

いつものように校門のところで見張りをしていると、久美子が声をかけて来た。

「あ、く、久美子さん」

純情な彼は、間近だと憧れの人の顔すら見られない。

「どうしたの、こんなところで？ 彼女を待つてるの？」

久美子の爽やかな笑顔が眩しくて、大山は俯いたままだ。

「いえ、違います」

久美子さんを待つていたんですね、とは決して言わない。

「今日は、大田君はいないのですか？」

大山は数少ない共通の話題を振つた。久美子は苦笑いして、

「晶君は塾あきらだつて。冷たいのよね」

晶とは、矢田通の幼馴染である大田美津子の弟で、久美子のボイフレンドだ。だから、大山は、晶がいない事に少しだけホッとした。

「では、自分がお供致しますので」

「平気よ。もうこの前みたいな事はないから」

久美子は笑顔で言った。

「しかし……」

心配性な大山はそれでも不安だ。

この前のような事とは、矢田通に恨みがある連中が、久美子を攫さらつて通との喧嘩を優位に進めようとした一件だ。大山は真相を知らないのだが、その連中は久美子が全員倒している。だからそれ以降、そんな間抜けな事をするバカはないのだ。

「矢田久美子も強い」

その噂がワル共に広まるのに一週間とかからなかつた。しかし、大山の耳にはその噂は届いていなかつた。

「じゃ、ウチまで送つてね、大山君」

久美子はあまりに悲しそうな顔をする大山を見かねて言った。

「は、はい！ 全力でお守りします」

「ありがとうございます」

二人は家路に着いた。

久美子と大山の取り合はせは、本当に奇異だつた。誰もが振り返る。大山は堪りかねて、

「あの、『じ迷惑ですか？』

と囁いた。久美子はニコツとして、

「どうして？ 全然迷惑じやないよ。大山君がいてくれるから、誰も絡んで来ないし」

「そ、そうですか……」

大山はその言葉に赤面した。しかし、ワル共が近づいて来ないのは、久美子が通の妹だと知られているのと、実は久美子が強いという事が知られているからだ。でも久美子は、晶だけでなく同級生全員に、自分が格闘技を習っている事を明かしていない。晶には、自分が強い事を知られたくないという乙女心なのだ。嫌われそうな気がするらしい。久美子は晶に「LOVE」なのだが、晶は自分に「LOVE」だと思つていないので。お互い勘違いしているカップルである。

「！」

その時だつた。舗道の向こうに、その辺りの顔役だと言われているヤクザの幹部が組員を引き連れて現れた。

（どうする？）

大山は考えた。人通りも少ないので、喧嘩になつても構わないが、久美子さんを巻き込むわけには行かない。彼は考えあぐねていた。

「おお！」

組員の一人がこちらを見て叫んだ。すると全員がこちらを見て歩調を速めた。

「！」

大山はドキドキしていた。

（あの人数じや、とても勝ち目はない……。どうする？）

（幾筋もの汗が彼の額を伝わつた。

（俺は死んでも久美子さんを守る！）

大山は死を覚悟した。その時である。

「ああ、久美子さん、今お帰りですか」

全員、久美子と顔見知りだつた。大山は腰が抜けそうになつた。

「大丈夫、大山君？」

ヤクザと談笑した後、久美子は大山が落ち込んでいるのに気づき、声をかけた。

「はい、大丈夫です。すみません、自分、不器用なので……」

「平気よ、大山君。私、凄く感謝してるから」

久美子の天使のような笑顔に、大山は嬉し泣きをした。

「どうしたの、大山君？」

驚く久美子。大山は泣きながら、

「自分、大丈夫です。不器用なもので……」

と言い続けていた。悲しいまでに純粹な男である。

その男、不器用につきの2

彼の名は大山大。おおやまおお私立の名門である杉野森学園中等部の二年だ。身長一メートル超、体重百キロ超。すでに柔道界や相撲界、更には格闘技界からオファーがあるほどの体格だ。

その風貌から同級生だけではなく、高等部のワル共からも一目置かれ、恐れられている。しかし、そんな彼にも大きな弱点があつた。それは「女子」。彼は想像を絶するほど女性に対してウブである。クラスの女子達は大山を怖がつて近寄らないので平気なのだが、コンビニやファミレスでレジが女性だと汗まみれになつてしまつのだ。そこまでいくと「対人恐怖症」ではないかと悩んだりもしている。彼が汗まみれなのをレジの女性が気づくと、必ず「キモい」という顔をされるのも、そんな反応を助長していた。

それほどウブな大山にも好きな女子はいる。尊敬する高等部の矢田通の妹にして、中等部男子のアイドルである矢田久美子だ。ケンカバカの通とは似ても似つかないほどの美少女で、頭脳明晰、周囲の人望も厚い。とても大山に釣り合うとは思えない存在だ。

（だから、自分は久美子さんを陰ながらお守りする役目に徹する）大山はあくまで片思いのままで良いと思っている。悲しいまでに一途で純粹な男である。

「おはよう、大山君」

校門の前でその久美子に声をかけられた。

「お、おはよう」いります、久美子さん

すっかり狼狽える大山である。久美子はクスッと笑つて、

「私は同級生なんだから、いりますはいらないよ」

「いえ、でも久美子さんは通さんの妹さんですから……」

顔を近づけて来る久美子にドギマギしながら、大山は答える。

（これ以上久美子さんと話していたら、どうにかなつてしまつ…）

「し、失礼します！」

大山はダッと駆け出し、久美子から離れた。

「変なの」

久美子は大山の思いを全く知らないので、兄である通の親しくしている男子として接している。そして、大山の風貌を怖がつたりもしない。

「おはよう、久美子ちゃん」

そこへ大田晶が現れた。彼も久美子を好きな一人だ。そして久美子も晶の事が好きなのだが、互いに自分の気持ちを打ち明けていい。只、兄の通は気づいており、

「久美子を嫁さんにしてくれ」

と頼まれている。頼まれた時は、

「断わつたら殺される」

と思った晶だったが、もちろん彼も久美子の事が好きなので断わると言つ選択肢はなかつた。

「通さんも、姉さんをお嫁にもらつて下さいね」

晶がそう言うと、通は、

「何でだよ！」

と怒つた。通は晶の姉である美津子と幼馴染で、晶は昔から一人を見て来ている。当然将来は結婚するのだろうと思つてゐるが、素直でない通と美津子はそれを認めない。

「おはよう、晶君」

久美子ちゃんの笑顔はいつ見ても可愛い。晶はついにやけてしま

う。

「何、晶君？ 気持ち悪いよ、思い出し笑いして」

「あ、ごめん」

そんな二人だが、当然一人や一人はそれを快く思わない者がいる。入学当初から一人を知つてゐる者にはそんな大それた事を思つはれない。何しろ、久美子は宇宙人を倒したと噂の矢田通の妹。そして晶は、その通が只一人勝てないと言わされている大田美津子の弟。「一人の間に割つて入ろうなんて、死に行くようなものだ」

ある男子生徒の言葉である。

「関係ねえよ」

「ここに一人のバカがいた。名前は妻萱三四郎^{つまぶきもとよしろう}。転校生だ。成績優秀、スポーツ万能。顔もそれなりにイケメンだ。彼は久美子と同じクラス、すなわち大山、そして晶とも同じクラスになつた。他の女子達は転校生のイケメンにメロメロになつていたが、久美子だけは見向きもしない。それが三四郎のハートに火を点けた。三四郎の久美子を見る眼に危険を感じた大山は、

（あいつ、身の程知らずだ）

と考え、注意する事にした。彼は三四郎を屋上に呼び出した。

「何、大山君？」

他の男子が怖がる大山と一対一になつても動じていない三四郎を見て、

（こいつ、強い）

と大山は思った。しかしそんな事は顔に出さずに、

「矢田久美子さんに近づくな。お前とは釣り合わない」

すると三四郎はニヤツとして、

「おや？ 君が久美子ちゃんの彼氏なのかな？」

「か、彼氏！？」

大山は久美子の事を「久美子ちゃん」と呼んでいいのは、晶と通の親友である竹森信一のみと勝手に決めていた。しかも言つに事を欠いて大山を彼氏と言つた事も許せない。

「違う。だが、久美子さんはお前なんかと付き合つたりしない。近づくな」

「うぜえよ、デカブツ。少し強いと思って、偉そうにするんじゃねえよ」

三四郎の顔つきが変わる。凶悪な目になつた。

「俺が誰なんか知らねえようだな！」

三四郎が大山に突進する。大山が身構えた時、三四郎の姿が消えた。

「何？」

大山は辺りを見回すが、三四郎はいない。

「遅いよ！」

三四郎は背後に回っていた。彼の右手には警棒のようなものが握られていた。

「ぐお！」

大山はそれでいきなり首を殴られた。

「うう……」

彼は呻きながらそのまま前のめりに倒れた。

「俺が誰を好きになるうが関係ねえだろ、ブサイクが！」

三四郎は連續して大山の腹を蹴つた。

「グフ……」

大山の口から血が吹き出す。

「俺に対する礼儀をわきまえねえてめえが悪いんだよ！」

三四郎は警棒を振り上げ、大山の頭を殴ろうとした。

「う！」

その三四郎の腕をガシッと止めた者がいた。

「邪魔するな！」

三四郎が鬼の形相でその手を振り払つて振り向くと、そこには久美子が立っていた。

「何してるのよ、妻簫君？」

久美子は二コリともせずに尋ねる。三四郎は肩を竦めて、「こいつ、君を襲つつもりだつたので、成敗したのさ」と白々しい嘘を吐いた。そして、

「ちようどいいや。ここでいい事しない、久美子ちゃん？」

今度は嫌らしい顔つきになる三四郎。しかし久美子は動じない。

「嫌よ」

「嫌じやねえよ！」

すっかりイケメン返上の三四郎は、久美子に襲いかかつた。

「は！」

久美子は三四郎の右腕をねじ上げ、そのまま投げた。

「ぐへ！」

屋上のコンクリートの上に叩きつけられ、三四郎は呻いた。

「これは大山君の分！」

久美子の正拳が三四郎の腹に炸裂した。

「ぐえええ！」

三四郎は涎よだれを吐き散らしてもがいた。

「ぐ、久美子さん……」

起き上がりかけた大山は啞然としていた。

「大丈夫、大山君？」

久美子がハンカチを差し出して囁く。

「だ、大丈夫です」

大山は袖で血を拭つて、久美子のハンカチを受け取らない。

「見られちゃつたね、私の秘密」

ペロッと舌を出して言つ久美子に大山は赤面して立ち上がる。

「いえ、自分は何も見ていませんから」

そう言つて歩き出す。久美子は二ヶ「コリして、

「ありがとう、大山君。じゃあ、一人だけの秘密ね」

「は、はい」

二人だけの秘密。そのあまりにも甘酸っぱい響きに氣を失いそうな大山である。

「お、俺も見てたからな、この暴力女……」

そこまで言いかけて、久美子の一睨みにブルッた三四郎は、

「な、何も見てません！」

と言い直した。

そして翌日、三四郎は挨拶もしないまま、転校したのだった。

その美少女、一目惚れにつき

私立の名門杉野森学園。幼稚舎から大学まである巨大な教育機関だ。

その高等部にその男はいた。矢田通。勉強はできるが嫌い。スポーツも得意だがやる気がない。でも、喧嘩だけはどんな事があつても受けて立つ、生まれついての喧嘩バ力である。

しかし、通の強さは半端ではなく、一部の噂では宇宙人を倒したと言われている。そして付近の暴力団も暴走族も、通の名を聞くだけビビり、姿を見れば失禁する連中もいるほどだ。その矢田通も、幼馴染の大田美津子だけには頭が上がらないと言う噂も同じくらい伝わっていた。美津子最強伝説は健在なのだ。本人は大迷惑らしいが。

東京・神奈川・埼玉南部では、矢田通を知らないその筋の者、ヤンキーは存在しない。しかし、北関東となると、まだ通の名と顔はそれほど知られていないかった。

「やめて下さい。何ですか、貴方達は！？」

G県。時々関東から外されてしまう影の薄い存在だ。その県庁所在地であるM市の駅前で一人の女子高生が不良共に絡まれていた。その容姿の可憐さから、不良共の目的は察しがつく。

「見ての通りの高校生だよ。ねえ、一緒に遊ばない？」

不良共は総勢五名。その中の一人が言つた。女子高生は、

「これから友達と映画を見に行くんです」

「だったらそのお友達も一緒にいいよ」

更に欲望丸出しでそいつは言つた。すると、

「やあ、お待たせ。さ、行こうか」

と突然別の男子高校生が現れ、その女子高生を連れて行こうとする。

女子高生はキヨトンとして、

「あ、あの、えっと……」

と懸命にその高校生が誰なのか思い出そうとする。しかし思い出せない。思い出せないのであるが、その高校生がイケメンなのでウツトリしてしまった。

「こりてめえ、何横から割り込みかけてんだよ、ボケが！」

不良の一人がその高校生の肩を掴む。するとその高校生は、

「先約は僕だよ、下品な皆さん。残念でした」

とその手を振り払い、歩き出した。

「待てこらー！」

更に不良共が追いかけようとすると、

「お前らの相手は俺がするよ」

と後ろで声がした。不良共が振り返ると、チビッ子が一人立っている。

「何だ、てめえは？ 痛い目に遭いたいのか、チビ？」

「ああ！？」

そのチビッ子の目がギラッと光る。

女子高生を助けた高校生が目を伏せる。

「あーあ、知らないぞ」

次の瞬間、五人の不良達がボコボコにされた。助けられた女子高生も引くくらい。

女子高生を助けた高校生が、

「申し遅れました、僕は竹森信一。東京の杉野森学園高等部の一年生です。で、あっちが同級生の矢田通です」

気がすんだのか、ようやく不良共を解放した通が女子高生を見た。

「怪我はないか？」

「は、はい。ありがとうございました。私、M女子高校一年の沢本

瑠璃佳です」

瑠璃佳は少し怯えながら言った。信一はその様子に気づき、

「『めんね。本当はすぐに逃げるつもりだったんだけど、あいつらがNGワードを言っちゃったから、ややこしくなったんだ』

「NGワード?」

瑠璃佳は首を傾げた。通は何故かムツとして、

「行くぞ、信一。ここにもいなかつたから、次だ」

「ああ」

サッサと行ってしまう通に肩を竦めてから、信一は瑠璃佳を見た。

「申し訳ない、瑠璃佳さん。縁があつたらまたお会いしましょう」

「は、はい」

爽やかな笑顔で立ち去る信一と振り返りもしない通をしばらく見送り、瑠璃佳はショッピングモールへと歩き出した。

そして瑠璃佳は帰宅後、すぐにインターネットで杉野森学園を調べた。

「これって、運命的な出会い?」

彼女の目は、輝いていた。

そして数ヵ月後。

瑠璃佳は父親の仕事の関係で東京に引っ越した。幼い頃に母親を亡くした瑠璃佳は、父親と一人で生活して來た。その父親が東京の本社に栄転が決まり、瑠璃佳と一緒に行つてくれるようになつたのだ。瑠璃佳は友人達と離れ離れになるのを嫌がり、応じていなかつた。だから、ずっと転校を渋つていた瑠璃佳がある日突然、

「転校したい学校が見つかった」

と言い、父親について行く事に同意した時、父親は喜んだが、不審にも思った。

「どうして急に決心がついたんだ?」

「好きな人がその学校にいるの」

「え?」

それはもつと問題だ。父親は密かに溜息を吐いた。しかし、今は

一緒に東京に行く事に同意してくれた事が嬉しかった。

瑠璃佳が転校したのは、当然の事ながら、杉野森学園高等部。成績優秀な彼女は、転入試験では何も問題がなかつた。

登校第一日目、彼女は誰よりも早く学園に行き、校門で待つていた。ある人物が来るのを。

「あ！」

瑠璃佳は、連れ立つて歩いて来る信一と通の姿を見つけた。

「おはようございます！」

彼女は笑顔全開で二人に駆け寄つた。通はキヨトンとしたが、信一は覚えていたようだ。

「お久しぶりです、瑠璃佳さん。どうしたんですか？」

「転校してきました。今日から私、後輩です！」

瑠璃佳は息を弾ませて言つた。信一と通は顔を見合わせた。

「そうなんだ。よろしくね」

信一はまた爽やかな笑顔で言つた。すると瑠璃佳は通を見て、「あの、その、えっと、あの時からずっと好きです！ 付き合つて下さい！」

と頭を下げてラブレターらしき封筒を差し出した。

「な、何イツ！？」

通は仰天した。信一もビックリしている。そして何より驚いていたのは、後から来てそこだけ聞いてしまつた大田美津子であつた。

その美少女、意地つ張りにつき

東京都の一角にある私立杉野森学園。幼稚舎から大学まであるマンモス校だ。

その高等部でちょっとした異変が起こつた。

矢田通。宇宙人も倒したと噂の喧嘩バカである。その彼が、数ヶ月前、北関東にあるG県で、ある少女を助けた。彼女の名は沢本瑠璃佳。通にしてみれば、多々ある不良達とのバトルの一つに過ぎなかつたが、瑠璃佳は違つた。生まれて初めて、一見して不利な体格の男子が、五人の不良をあつと言う間に倒してしまふのを見た。そして、それは「吊り橋効果」も手伝つて、瑠璃佳を勘違いさせたのかも知れない。事もあろうに、彼女は通に一目惚れし、父親の転勤を利用して杉野森学園に転入して來たのだ。

高等部がざわついた。矢田通の彼女は大田美津子。いつの間にか出来上がつた伝説にも近い設定。通も美津子も、それを全力否定だ。しかし周囲は信じていない。只、通に思いを寄せる女子もそれなりにはいる。彼は女子に乱暴はしないし、下ネタを言つたりする事もない。今絶滅しかかつてゐる「硬派」なのだ。だから人気はある。でも、美津子の存在が、女子達を躊躇させる。美津子は高等部でトップクラスの成績、スポーツも万能、人望も厚い。その上誰もが認める美少女でもある。その美津子が通の彼女だと信じられているので、他の女子達は決して通に告白したりしなかつた。自分に勝ち目はないと思っているからだ。

「誤解なんだからね」

美津子は機会があるとそう言つてゐるが、信じる者はいない。その設定を根底から覆したのが、瑠璃佳だつた。彼女は転校初日にいきなり通に告白し、手紙まで渡した。女子にはそれなりに優しい通はそれを突き返す事なく、受け取つた。悪い事にその一部始終を美

津子が見ているのも知らずに。いや、見ているとわかつたら、意地つ張りの通の事だから、嬉しそうにして受け取つたかも知れない。

「大変な事になりそつ」

それを目撃した生徒達は、身を震わせたと言ひ。

「ねえ、沢本さん」

同じクラスの委員長が瑠璃佳に声をかけた。

「はい」

瑠璃佳は一刻も早くクラスに馴染みたいので、愛想良く応じた。

「貴女、一年生の矢田さんに告つたんですつて？」

「あ、はい。それが何か？」

委員長があまりに深刻な表情なので、瑠璃佳は怪訝に思つた。

「貴女は今日転校して来たばかりだから知らないのも仕方ないんだけど、矢田さんには彼女がいるのよ」

「え、そなんですか？」でも、手紙受け取つてくれたし、何も言われなかつたですよ」

委員長は顔を引きつらせた。

「て、手紙も渡したの？」

「ええ。私、口下手なので、言葉でうまく伝えられないから、一生懸命考えたんです」

瑠璃佳は二二二二口して言つ。委員長は溜息を吐いて、

「今からでも遅くないから、矢田さんの所に行つて、謝つて来た方が良いわ」

「どうしてですか？」

瑠璃佳には意味がわからない。

「仮に矢田さんに彼女がいたとしても、告白するくらい構わないと思ひますけど」

「……」

委員長は呆れてしまつたようだ。

「私は忠告したからね。何があつても知らないよ」

彼女はそばにいた友人達と歩いて行ってしまった。

「どういう事なんだろ？」「

瑠璃佳にはさっぱり訳がわからなかつた。

一方、もう一人の当事者である通は、親友の竹森信一と話していった。

「美津子の奴、今日俺と田が合つと露骨に顔を背けるんだけじ、どうしてだ？」

通は呆れるほど鈍感である。信一は肩を竦めて、

「今朝、沢本さんに田代それただる？ それを美津子さんが見てたんだよ」

「はあ？ 意味がわからんねえぞ」

「全く、鈍感だな、通は」

信一は溜息を吐いた。

「ホントはわかつてゐんだる、美津子さんの気持ち？」

「美津子の気持ち？ 何の事だよ？」

通は顔を赤らめて尚も惚けた。

「美津子さんがどうして顔を背けるのか、わかつてあげなよ」「知るか！」

通は美津子を一瞥し、教室を出た。

「ほら、矢田君も気にしてるよ」

美津子の親友で信一の彼女である富田香みやたかおおつが囁く。

「何？ 何の事？」

似た者同士である。美津子も意地つ張りなのだ。

「美津子が顔を背けるの、矢田君が気にしてるの。美津子もわかつてやつてるんでしょ？」

「違うわよ。あいつの顔見ると、気分が悪くなるから、見ないようにしてるだけ」

美津子はそう言つと席を立つた。

「あ、矢田君を追いかけるの？」

香が楽しそうに言ひ。

「違うわよ！」

美津子はムツとして大股で歩き出す。

「待つて、美津子」

香が追いかけた。

「あ」

美津子は階段の踊り場に瑠璃佳が立っているのに気づいた。瑠璃佳は美津子を見上げて会釈した。

「大田美津子さんですね」

瑠璃佳は真正面から美津子を見ている。美津子はギクッとして踊り場まで下りて行き、

「そうだけど……貴女は？」

「私、今日転校して來た一年の沢本瑠璃佳です」

あの時、美津子は瑠璃佳を見たが、瑠璃佳は美津子に気づかなかつたのだ。

「大田先輩が、矢田先輩の彼女なんですか？」

瑠璃佳の直球な質問に、美津子は狼狽えた。香も思わず唾を呑み込む。

やや間があつてから、

「違うわ。私はあんな奴の彼女じゃない。只の幼馴染」

美津子はそれだけ言つと、

「じゃ」

と階段を駆け下りた。

「では、矢田さんと私が付き合つの、構わないんですね？」

その背中に瑠璃佳が言つ。美津子は立ち止まつたが振り返らず、

「私には関係ない。お好きにどうぞ」

と言い、駆け去つた。

「美津子！」

香は一瞬呆気に取られたが、瑠璃佳に微笑んでから階段を駆け下

り、美津子を追いかけた。

「あっちゃん。言っちゃったね、美津子さん」
階段の上から見ていた信一が呟いた。

その美少女、積極的につけ

杉野森学園高等部。

そこに異変が起こりつつあった。

喧嘩バカの矢田通。通の彼女は幼馴染みの大田美津子。それが高等部の生徒の一致した認識。いや、生徒ばかりでなく、教職員、果ては理事長に至るまでそう思っていた。その「定説」が崩れつつある。一人の転校生によつて。

その転校生の名は沢本瑠璃佳。さわもと るりか北関東で一番地味なG県の有名進学校のM女子高校から転入して來た。彼女はほんの偶然から矢田通と顔見知りになつた。信じられない事だが、彼女は通に一目惚れした。瑠璃佳は十人の男子がいれば十人が全員「付き合つて下さい」と告白するくらい可憐で可愛い美少女だ。それがよりによつてどうした事か、通に転校初日、いきなり告白した挙げ句、手紙まで渡したのだ。その最後のシーンだけを見てしまつた美津子は、通の顔を見ようとしている。彼女自身、通が手紙を素直に受け取つた事がショックだつた。口ではどれほど「あんな奴」とか言つっていても、美津子は間違いなく通の事が好きなのだ。それだけは包み隠しようもない事実である。

「全く、何て事言つちゃうのよ、美津子つてば」

親友の富田香が呆れて言つた。美津子は階段の踊り場で顔を合わせた瑠璃佳に、

「大田先輩が、矢田先輩の彼女なんですか？」

と尋ねられ、

「違うわ。私はあんな奴の彼女じゃない。只の幼馴染」

と言つてしまつた。その上、瑠璃佳の、

「では、矢田さんと私が付き合つて、構わないんですね？」

とこう更なる質問にまで、

「私には関係ない。お好きにどうぞ」
と言つてのけた。それを聞いていた香はあまりに強情な美津子に驚いてしまった。

翌日の下校時の事。

「知らないぞ、矢田君盗られても、

香が脅かすように言つても、

「盗られるも何も、別にあいつは私の彼でも何でもないし」

美津子は全く取り合わない。香はニヤツとして、

「なーるほど。自信があるのね」

「何が？」

美津子は親友の嫌らし笑みに気づき、ムツとする。

「あんな小娘になびくような通じやないわって思つてね」

「何言つてんのよ！ 妄想が激し過ぎるわよ、香」

美津子はブイと顔を背けて歩き出す。

「じゃあさ、この学園一の美少女の私を捨てて、転校生に鞍替えしたりしないわって思つてる」

「あんたね！」

靴を下駄箱から出しながら、美津子は香りを睨みつけた。香は笑つて、

「心配ないわよ、美津子。矢田君は何を言つていても、貴女の事が好きなんだから。大丈夫」

「別にあいつに好かれたくないなんかない」

美津子は靴を履き、玄関をスタスタと出て行く。香も慌てて靴を履き替えて追おうとするが、

「待つてカオリン」

と信一に呼び止められた。香は信一を見上げて、

「信ちゃん、いいの、放つておいて？」

「今は何を言つても反発するだけだよ。もう少し冷却期間を置かな」と

いと

信一は歩き去つて行く美津子を見て言つた。

「そうかなあ」

香は不満そうに腕組みした。

矢田通に告白した転校生の話は、中等部にまで伝わっていた。
通の舎弟を自認する大山大は、驚愕おおやまがくしていた。

「大丈夫なのか、その転校生？ 姐さんにボコられたりしないだろうか？」

彼は妙な心配をしていた。「姐さん」とは美津子の事である。当然の事ながら、通の妹の久美子も、その話を耳にしていた。

「変わった人もいるものね」

彼女は嬉しそうに笑つた。美津子以外を好きになつたりするはずがないとわかっているだけに、その転校生に対する兄の反応が見てみたいと思つたのだ。

「姉さん、大丈夫かなあ。ああ見えて、実はガラスのハートなんだよね」

美津子の弟で、久美子のボーイフレンドの晶が呟く。

「そうなの？」

久美子は意外そうな顔で晶を見た。

「でも、心配無用よ。お兄ちゃん、美津子さん一筋だから。それは妹の私が保証するわ」

久美子はニコッとして晶を見た。晶はその笑顔に赤面し、

「そ、そ、そ、う、な、ん、だ」と応じた。

そして、その矢田通。彼は下校時に瑠璃佳の待ち伏せに遭い、一緒に帰つていた。

「『迷惑でしたか、私の手紙？』

瑠璃佳は通の半歩後ろを歩いている。通は前を向いたままで、

「迷惑じゃないけど。どうして俺なんだよ？」

「かつこーいからです」

瑠璃佳は「コニコニ」して言つ。通は苦笑いして、

「生まれてこのかた、かつこーいなんて言われた事ないぞ」

「大田先輩にもですか？」

瑠璃佳は「一シ」として尋ねた。通はピクッとしたが、

「あいつは関係ねえよ

「そうですか」

瑠璃佳はますます嬉しそうだ。

「手紙、読んでくれました？」

「ああ」

通はあくまでぶつ切ら棒だ。瑠璃佳は顔を赤らめて、

「お返事は？」

と言つた。通は立ち止まつて瑠璃佳を見ると、

「沢本さんとは付き合えない」

「えつ？」

そんなストレートに断られると思つていなかつた瑠璃佳はビックリした。

「やっぱり大田先輩が彼女なんですか？」

「違うよ。そうじやない。君は昨日転校して來たばかりだろ？
それをいきなり付き合つて下さこいつて、いへり何でも非常識じやないか？」

通の口から出でているとは思えなくらい当たり前の言葉だ。実は信一が考へてくれたのだ。

「そうですね」

瑠璃佳は悲しそうな顔をした。通はビクッとした。彼は女の子の涙に弱い。泣かれるとどうしていいかわからなくなつてしまつ。（泣くなよ、絶対。話がややこしくなるから……）

通は心中で祈つた。

「わかりました。そうですね。矢田先輩の仰る通りです。私が軽率でした」

瑠璃佳は深々と頭を下げた。そして、
「では、お友達になつて下さい。まずはそこから始めたいと思いま
す」

「……」

全然メゲていない……。通は睡然としてしまった。

「ありがとうございました」

瑠璃佳は笑顔で手を振りながら、走り去った。

「解決しないよな……」

通はガツクリと頃垂れた。

その美少女、危機一髪につき

杉野森学園高等部は、あの矢田通に告白した転校生の話で持ち切りだった。

その転校生の名は、さわもと るりか沢本瑠璃佳。高等部一年。かなりの美少女である。クラスメートはおろか、全学年の男子生徒が溜息を吐いた。

「どうしてなんだよ」

通は確かに女子には人気はあるがモテはしない、というのが「定説」だった。それを覆したのが転校生で、しかも美少女となると、彼らは「定説」を変更しなくてはならないと思つていた。

そして、翌日。

「おはよう、美津子」

通学路で落ち合つた香が声をかける。

「おはよう、香」

美津子は「」く普通に応じた。しかし香は「ヤツ」として、

「今日はご機嫌ね、美津子」

美津子は親友のその途方もない切り出しがキョトンとして、

「どういう意味よ？」

「矢田君、転校生の告白を断わつたんでしょ？ 信ちゃんから聞いたわ」

美津子はビクッとした。その話は全然知らなかつたのだ。香は美津子の様子に気づき、

「あ、もしかして、何も知らなかつた？」

と決まりが悪そうに尋ねる。すると美津子はムツとして、「知りたくないわ！」

ブイツと顔を背け、彼女は大股で歩き出す。

「美津子、女の子がそんな歩き方したらダメだよ」

香が追いかけながら言つ。しかし美津子は、

「大きなお世話！」

と更に大股で歩いた。そして、前方を歩いている通に気づいた。

「あ……」

通は瑠璃佳と並んで歩いていた。美津子はますますヒートアップした。

「失礼」

彼女はわざと通の肩にぶつかつて二人を追い抜いた。

「いてえな、美津子！ 何するんだよ！？」

意味がわからない通が怒鳴るが、美津子は完全無視を決め込み、

スタスタ行ってしまった。

「美津子、待つて！」

香は通を睨みつけてから、美津子をまた追いかけた。

「何なんだよ、あいつら？」

通がぼやくと、瑠璃佳が、

「私のせいですか？ 私が矢田先輩と歩いているから、大田先輩が怒つて……」

「関係ねえよ。あの女、昔から瘤瘍持ちなんだ。気にするなって」
通は瑠璃佳に言うが、彼女を見ない。瑠璃佳は通を待ち伏せしてここまで一緒に歩いて来たのだが、彼が一度も自分の顔を見てくれないのに気づいていた。

「あの」

「何だ？」

やはり通は瑠璃佳を見ない。

「矢田先輩、私の事、嫌いなんですか？」

「な、何でだよ！？」

やつと通は瑠璃佳を見た。瑠璃佳は悲しそうな顔で、

「だつて、さつきから全然私の顔を見てくれないから」

「あ、いや、女の子の顔をジロジロ見るなって、死んだ親父によく言わされたからさ」

通はバツが悪そうに言った。それは嘘だ。本当は、瑠璃佳を至近距離で見るのが恥ずかしいのだ。

「なんですか」

瑠璃佳は少しだけ元気になつたようだ。

「優しいんですね、先輩」

「そうかあ。そんな事ないと思つぞ」

二人の姿を見た高等部の生徒達は、

「矢田通が大田美津子から転校生に乗り換えた」と勝手に解釈し、その噂は瞬く間に広がつて行つた。杉野森学園の外にまで。

そしてその噂を聞きつけてほくそ笑んだ奴がいた。石動允。杉野森学園とはライバル校関係にある大東苑学院だいとうえんがくいんの生徒だ。

允は以前、通の妹の久美子を拉致して通を潰す作戦を実行したが、久美子の思わぬ強さに返り討ちとなつた。その怨みを晴らす時が来たと思つたのだ。

「今度こそ、あいつの弱点を利用して、潰してやる」

允は狂氣めいた顔で笑つた。

竹森信一は、教室で通と美津子の間に漂つ不穏な空氣を感じていた。

「何があつたんだ、通？」

信一が小声で尋ねる。通は、

「訳がわからんねえんだよ。あの女、朝から機嫌が悪くてさ」

「ホントか？」

「ホントだよ！」

信一は通の「事情聴取」を諦め、香に近づいた。

「何があつたのさ、あの二人？」

「それがね……」

香から理由を聞いた信一は呆れてしまった。

「何のために断わり方を教えたのかわからないな」

信一は香に礼を言って、もう一度通に近づいた。

「通、あの子にきちんと教えた通りに言ったのか？」

「言ったよ。そしたらさ、友達からって言われてさ。そこまでお前に教わってなかつたし……」

信一は頑垂れた。

「小学生か、お前は……」

「うるせえよ！ しょうがねえだろ、成り行きだそなつちまつたんだからさー！」

通が開き直る。

「大体、俺が誰と歩こうが、あいつには関係ないだろ

通はわざと美津子に聞こえるように言った。美津子がピクンとする。

「美津子」

香が止める間もなく、美津子は通の前に行ってしまった。教室の一
同がザワツとする。

「ええ、そうですね。私が悪かったです、矢田通さん。今後一切貴
方とはお話ししないようにしますので、それでご了承下さい」

美津子は笑顔でそう言つと、シンと顔を背け、自分の席に戻つた。

「上等だ！ こいつもお前と話さなくていいのなら、せいせいする
ぜ」

通も一步も引かない。信一と香は顔を見合させて溜息を吐いた。

「……」

さすがに通のその言葉は美津子にはダメージが大きかつた。彼女
は必死になつて涙を堪えていた。

「矢田君、今の言い過ぎよ！」

香が大声で言つたので、通はビッククリしたようだ。

「香、何だよ、お前まで……」

「私も矢田君とは口利かないから！」

香もブイと顔を背け、席に戻つた。通は信一を見上げた。すると

信一も、

「今日は全面的にお前が悪い。僕もしばらく距離をおかせておひらつ

よ

通はその言葉に唖然としたが、

「ああ、そうかい！」

と言つと、ムスッとして腕組みをした。

そして放課後。

瑠璃佳は、朝の事が気になつたので、通に声をかけるのをやめて、
その日はクラスメートと下校した。

「あ

瑠璃佳達が大通りから細い脇道に入った時だ。その道を塞ぐよう
に大東苑学院の柄の悪そうな連中が五人、並んでいた。

「沢本瑠璃佳ちゃんだな？」

石動允が進み出て尋ねる。瑠璃佳達は、ギョッとして後退りしたが、
他の連中がすばやく回りこみ、囮まれてしまった。

「おめえらには用はねえ。消えろ」

允は瑠璃佳以外の女子生徒を追い払つた。彼女達は真つ青になつ
て走り出した。

「何なんですか、貴方達は？」

瑠璃佳は震えながら言つた。允は一ヤリとして、

「矢田通をぶつ飛ばす会の会員だよ」

と言つた。その言葉に瑠璃佳は目を見張つた。

その男、本当に手加減なじつ

さわもと るりか
沢本瑠璃佳が、大東苑学院の石動允に捕まつた。

その情報はすぐに杉野森学園高等部にもたらされた。瑠璃佳と下校していた女子生徒が蒼ざめた顔で高等部まで戻つたのだ。

「……」

その話を聞き、胸中複雑な思いの大田美津子。その親友の心がわかり、何も声をかけられない富田香。

「とにかく、そこまで案内して下さい」

竹森信一が女子生徒に言つた。女子生徒はそこに戻るのが怖かつたが、信一が同行してくれるのなら安心だし、嬉しいと思い、現場に向かつた。

その瑠璃佳の思い人である矢田通は、間が悪い事に中等部の舍弟である大山大と中等部の校門脇で話していた。

「何心配してんのだよ。別に俺はそんなつもりはねえよ」

通は鬱陶しそうに言つた。大山が瑠璃佳との事を聞き、命がけで通に忠言したのだ。

「ですが、矢田さん、姐さんは随分と荒れ模様だとか」

姐さんは美津子の事だ。大山は再三、「姐さんて呼ばないで」と美津子に言われているのだが、他の呼び方を思いつけないので、美津子以外に話す時にはまだ「姐さん」を使つてゐる。美津子とは直接話さないようにしてゐるのだ。

「誰に聞いたんだよ、そんな事?」

「晶さんです」

晶は美津子の弟。「姐さん」の弟さんだから、呼び捨てでも、君付けでもなく、「晶さん」である。大山の前世は犬か狼かも知れない。

「あいつはいつも機嫌悪いじゃねえかよ」

「それはお兄ちゃんが悪いんでしょ！」

そこへいきなり、通の妹にして、中等部のアイドルでもある久美子が現れた。その後ろには、ボーイフレンドの晶が、まるで従者のようにつき従つている。

「他人聞きが悪い事言うなよ、久美子」

通が剥れて言う。久美子は大山にニコッと微笑んでから、

「本当の事でしょ！」

と兄を容赦なく睨む。この世で通にこんな態度を取つて無事ですむのは、美津子と久美子だけだらう。

「うるせえな」

通は久美子と口喧嘩をしても勝ち目がないのでサッサと逃げる準備だ。すると久美子が、

「それより、高等部が大騒ぎよ。何も聞いてないの、お兄ちゃん？」

「大騒ぎ？ 何があつたんだ？」

通が嬉しそうに尋ねる。久美子は呆れた顔で、

「昨日転校して来た人が、大東苑学院の連中に連れて行かれたんですつて」

「何！？」

通は驚いた。大山もだ。大東苑学院と言えば、つい先日、久美子を拉致しようとした連中と同じだ。

「あの子が連れて行かれたのか？」

通は慌てていた。

（畜生、俺のせいでの子を……）

「そうよ。お兄ちゃんに、転校初日にラブレターを渡した人。沢本瑠璃佳さんよ」

久美子の言葉が終わらないうちに、通は走り出していた。

「あいつら！」

美津子や香が自分に連絡してくれないのは仕方がない。だが、信一までもが黙つているのは、さすがに面白くない。通は高等部へと

走った。

「矢田さん」

大山が追いかけるが、通は尋常ではない肉体なので、追いつく事などできない。彼の姿はたちまち見えなくなつた。

「お兄ちゃん、本氣で乗り換えるつもりかしら？」

久美子がそう呟くと、晶が、

「それだけは困るよ。只でさえ、姉さん、機嫌が悪いんだから。家に帰るのが怖くて」

「だったら、しばらくウチで寝泊りすれば、晶君？」

久美子が何気なくそう言つたので、晶は仰天してしまつた。

信一は女子生徒の案内で現場に着いていた。そこには、允の舍弟が一人残つていた。

「矢田通にこれを渡せ」

そいつは信一に紙切れを渡すと、サッサと走り去つた。

「ありがとう。気をつけて帰つてね」

信一の笑顔に顔を赤らめながら、女子生徒は帰つて行つた。

「あいつら、バカの一つ覚えか？」

信一はその紙に書かれた文字を見て呟いた。

「女を返して欲しければ、鉄橋脇の河川敷まで来い」

信一は通に知らせるつもりはない。自分で全部ケリをつけ、瑠璃佳にきつぱり言うつもりなのだ。通の事は諦めてくれと。
(美津子さんと通が不仲なのは、僕もカオリンも嫌なんだ)
信一が通に連絡しなかつたのは、そういう思いからである。

しかし、信一のそんな思いは無駄になつた。通は天性の勘から、大東苑学院の連中がどこにいるのか読んでいた。彼は信一よりも早く、夕日に染まる河川敷に着いた。

「ほお、王子様の到着だぜ、お姫様」

允がおどけた調子で舍弟に押さえつけをせしむる瑠璃佳に言った。

「矢田さん、ダメです。来ちゃダメ！」

瑠璃佳は涙声で叫んだ。しかし激高している通には、そんな言葉は届かない。

（よーし、そのまま真っ直ぐ來い。深さ三メートルもある落し穴だ。上から石のシャワーを浴びせてやるよ）

允の顔が歪む。嬉しくて仕方がないようだ。

「てめえ、どこのどいつだ！？ 堂々と俺に喧嘩売つて来いや！」

通は猛スピードで允達のところに走った。

「え？」

允は仰天した。通は確かに落し穴の上を通過したのだが、速過ぎて落ちなかつたのだ。

「おらああ！」

通は雄叫びを上げ、まずは允を川のはるか彼方まで吹っ飛ばした。歯の根も合わないほど震えている残りの連中は、あつと詰つ間に同じく川に沈んだ。

「てめえら、顔覚えたぞ！ 今度見かけたら、前歯全部なくなると思え！」

通が怒鳴ると、顔を出していた連中が一斉に水中に潜つた。

「大丈夫だったか？」

通が瑠璃佳に声をかけると、

「怖かったあ！」

と彼女はそのまま通に抱きついた。

「わわ！」

通は夕日より赤くなつた。

「悪かったな、沢本さん。俺のせいで、酷い目に遭つちまつてさ」

通は何とか瑠璃佳を押し返して言つた。瑠璃佳は涙を拭いながら、

「そんな事、全然気にしてませんから……。それより、来ててくれて、

本当に嬉しい……」

言葉にならないほど、瑠璃佳は感動し、泣いた。

「帰るうか」

「はい」

通は上着を瑠璃佳にかけてあげた。瑠璃佳はまだ泣いていたが、それでもしつかりした足取りで歩き出す。

「……？」

そこへ信一が到着し、睡然としていた。

「信一、後で話がある」

通はムツとした顔で言い、瑠璃佳を庇つよつこにして河川敷を去つ

た。

「ふう

信一は思わず溜息を吐いた。

（まだ続くのか、この危険な状態……）

先が思いやられ、信一は頃垂れてしまった。

その美少女、ガラスのハートにつき

大田美津子は自分が素直でないために、さわもと るりか 沢本瑠璃佳が不良共に連れ去られ、拳げ句に矢田通が助けに行く事になつたのを知り、酷く落ち込んでいた。

「美津子、貴女のせいじやないから。そんなに落ち込まないの」「親友の富田香の言葉も、美津子のショックを和らげる事はできなかつた。

「私、どうすればいいのかな?」

美津子は遠くの商店街の明かりをボンヤリと見ながら呟く。香は自分に問い合わせられたのかどうかわからなかつたが、「沢本さんに謝る必要はないと思つ。但し、はつきりさせないといけない事がある」

美津子はキヨトンとして香をみた。香は美津子をジックと見て、「矢田君は美津子の彼氏なんだつていう事よ」

「なつ！」

美津子は真つ赤になつた。普段なら怒り出す彼女が赤面したという事は、精神的に参つていてる証拠だ。以前も宇宙人に連れ去られて酷い目に遭つた時、美津子はとても素直になつたのだ。

「あ、あいつは私の事なんか、うるさい女くらいにしか思つていな
いわよ」

美津子は火照る顔を背けて強がりを言う。

「そんな風に思つていたら、命懸けで何だかわからない所にまで貴女を助けに行かないわよ、美津子。もつ少し素直になりなさいよ」

美津子は香に言われて、その当時の事を思い出した。

（あんな状況で、あいつは私を助けに来てくれた。それなのに私は

……）

いつだつてそうだつた事を思い出す。

一人がまだ小学校に通っていた時。

美津子は高学年の男子にかまわれて困っていた。それに気づいた通が、身体の大きさが全然違うのに飛びかかって行つたのだ。

「何すんだよ、チビ！」

通は相手に一方的に組み伏せられてしまつた。結局通は美津子を助けられず、美津子は騒ぎに気づいた先生に助けられたのだ。

「俺、強くなる。強くなつて、美つちゃんを守るから」

涙をグッと我慢しながら、通が言つた。美津子は幼心に、「通ちゃんのお嫁さんになりたい」と思つたのだつた。

そして通は強くなつた。いや、強くなり過ぎた。彼とともに戦つて勝てる相手は東京近郊には存在しなくなつた。そして彼はある事故をきっかけに桁外れに強くなつた。

「小さい頃は、もつと素直だつたのにな……」

美津子は自嘲気味に言つた。香はそれを聞いて、

「それはみんなそう。いつの間にか、いろんな事を考えるようになつて、素直な心を忘れてしまつものよ」

「偉そうに」

美津子はやつと笑顔を取り戻して言い返す。

「良かつた、美津子が笑つてくれて」

香も微笑む。美津子は涙ぐんで、

「ありがとう、香」

一方、通と信一は、公園のジャングルジムの上に並んで座つていた。

「どうして俺に黙つてたんだよ？」

いきなり通が切り出した。信一はそこから見え始めた夜景を見たままで、

「全部僕が片を付けるつもりだった。ワル達も、沢本さんの事もね」

「フーン」

通はそう答えると、ニヤッとした。

「今度からはそういうのなしだぞ、信一。俺の事は俺が片を付けるからな」

「わかつたよ」

信一は肩を竦めて応じた。

「で、沢本さんはどうしたの？」

「家に送ったよ。寄つて行つてくれつて、言われたけど、彼女、父親と二人暮らしだしくてさ。女の子が一人でいる家には上がりにからつて、帰つて来た」

「お前らしいな」

信一がクスクス笑つた。

「つむせえよ」

通はブイと顔を背ける。その時信一の携帯が鳴り出した。

「はい」

信一はジャングルジムから飛び降りて携帯に出た。

「うん、わかつた」

それだけ言つと、信一は通を見上げて、

「帰るか？」

「ああ。久美子が心配してると、多分」

通もジャングルジムから飛び降りる。

「いろいろな意味でね」

信一が戯けて言つと、通はまたムツとした。

「お前、一言多いんだよ」

それでも二人は顔を見合わせて笑つた。

美津子と香も家路に着いていた。

「遅くなっちゃったね、美津子」

「そうだね。ごめん、香、変な事に付き合わせりやつて」

美津子が手を合わせて謝ると、

「何よ、他人行儀な。親友なら、これくらい当たり前でしょ？」

「香……」

美津子はまた涙ぐむ。

「あ、いけない」

「えつ？」

香は突然走り出した。

「ごめん、美津子、今日大事な用事があるの忘れてた。先に帰るね」「ちょっと、香！」

親友じやなかつたの？ そう愚痴りたくなる美津子だった。

「勝手なんだから」

追いかけようと思つたが、やめた。美津子はそのままゆっくり歩いて家に向かつた。

通と信一も話しながら歩いていたのだが、

「いけない、今日大事な約束があるのを忘れてた！ じゃ」といきなり信一が走り去つてしまつた。

「あいつ、ホントに忙しない奴だな。香以外に女がいるんじゃないのか？」

通は妙な疑惑を持つた。そんな事は絶対にないのが信一と香なのがだ。

「全くよオ」

通は仕方なく一人で歩き出す。そして家まであともう少しと一歩路地の角を曲がろうとした時、反対側から歩いて来る美津子に気づいた。美津子も通に気づいたようだ。

「……」

お互ひ、何となく気まずいのだが、逃げる事はしない。それでもそのままいるのを我慢できなくなつた通が歩き出し、角を曲がつた。

「待つて、通」

美津子が呼びかけ、彼に駆け寄つた。通は立ち止まつた。

(信一の奴、香とはめやがつたな)

通は二人の策略に気づいた。

「ごめん、通。私が変な意地を張つたせいで、沢本さんが大変な目に遭つて……。ごめん」

通は仰天していた。美津子がそんなに素直に謝つたのを見るのは、生まれて初めてだったのだ。だから、それに対してもう一つ反応をすればいいのか、すぐには思いつけない。

「昔は私達、こんなじやなかつたのにね。もつとお互に素直だつたのに。いつからこんな関係になつちやつたのか……」

美津子は泣いていた。それを見て通はパニックになりかけた。

「お、おい、泣くなよ、美津子。俺、どうしていいかわからなくなりそうだよ」

「だつて……」

それでも泣き続ける美津子。通は困り果てた。対応を考えあぐねていると、美津子が動いた。

「通……」

彼女は通に抱きついて來た。

「わわつ！」

身長は美津子の方が大きいので、傍目には姉が弟を慰めているよう位見える。

「うう」

身長差のせいで通の顔は美津子の胸に埋もれていた。

（し、死ぬ……）

通はいつ氣絶するかわからない程緊張していた。

「私、もう意地張らないから。だから……」

美津子が更にギュッと抱きついて来る。

そして通は気絶してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0596f/>

TORU 史上最強の悪ガキ

2010年12月6日14時40分発行